

いわて復興応援隊

活動報告書

2012～2024



いわて定住・交流促進連絡協議会

目次

はじめに	
いわて定住・交流促進連絡協議会 会長 岩渕伸也	1
いわて復興応援隊について	
いわて復興応援隊(復興支援員)	2
いわて定住・交流促進連絡協議会	3
隊員の受入及び受入体制	4
隊員の市町村別配置先(人数)	5
隊員の受入機関・活動期間・活動内容	6
いわて復興応援隊活動事例	
2012年度(平成24年度)	11
2013年度(平成25年度)	18
2014年度(平成26年度)	26
2015年度(平成27年度)	32
2016年度(平成28年度)	39
2017年度(平成29年度)	45
2018年度(平成30年度)	49
2019年度(令和元年度)	56
2020年度(令和2年度)	65
2021年度(令和3年度)	72
2022年度(令和4年度)	79
いわて復興応援隊研修会・活動報告会開催歴	91
メディア及び関係機関広報等掲載歴	97
いわて復興応援隊インタビュー	
盛岡編	102
宮古編	108
大船渡編	111
陸前高田編	115
釜石編	120
住田編	124
洋野編	130
メッセージ	
いわて復興応援隊受入関係者の皆様	134
元いわて復興応援隊	140
あとがき	
いわて復興応援隊 専門支援員	149

はじめに

平成 23 年(2011 年)3 月 11 日に発生した東日本大震災津波から 13 年を迎えます。

岩手県では、沿岸部を中心に余震や災害関連を含め 5,146 名の尊い命が奪われ、今もなお 1,107 名の方々が行方不明となっています。

改めて犠牲になられた方々の御冥福をお祈りしますとともに、御家族や被災された皆様に心からお悔やみとお見舞いを申し上げます。

いわて定住・交流促進連絡協議会では、先の震災により甚大な被害を受けた三陸地域のコミュニティの維持・再生・強化及び復興に向けた地域振興を支援するため、総務省の復興支援員制度を活用し、平成 24 年 10 月から令和 5 年 3 月までの 10 年 6 か月の間、全国から人材を募集し、県内の被災沿岸市町村を中心に県の復興支援員を「いわて復興応援隊」として配置しました。

いわて復興応援隊は、被災地の見守りや地域おこしなど、復興に伴う地域協力活動を通じ、コミュニティの再構築や地域復興・活性化を図る活動を中心に、県内被災地域の自治体、NPO、第三セクター等の配置先において、様々な分野の支援活動を行ってきました。これまで隊員の活動を理解し、温かく受け入れていただきました地域住民の皆様や受入機関・団体の皆様、共に活動いただきました関係者の皆様に深く感謝申し上げます。

いわて復興応援隊のこれまでの活動については一区切りといたしますが、応援隊が地域と歩んだレガシーは、令和 5 年度から活動を開始しました「いわて地域おこし協力隊」をはじめ今後も岩手の地域づくりに受け継いで参ります。

本書は、いわて復興応援隊のこれまでの活動を三陸の復興の推移と併せて振り返り、復興支援員の活動事例として記録するものです。

本報告書を作成するにあたり、元いわて復興応援隊並びに受入機関の皆様には、御多忙の中、インタビュー取材や寄稿等に御協力いただきましたことに厚く御礼申し上げます。

最後となりましたが、いわて復興応援隊として活動された 57 人の皆様には、岩手三陸の復興に御支援いただきましたことに、改めて感謝申し上げますとともに、今後も様々な関りを通じて岩手三陸とつながり続けていただければ幸いです。

皆様とまたお会いできる日を楽しみにしています。

いわて定住・交流促進連絡協議会
会長 岩淵 伸也

いわて復興応援隊について

いわて復興応援隊（復興支援員）

いわて復興応援隊は、東日本大震災津波により甚大な被害を受けた三陸地域のコミュニティの維持・再生・強化及び復興に向けた地域振興を支援するため、関係機関や地域住民との連携を図り、県内外から集まる人と人、地域と地域をつなぐ役割を担う人材として、岩手県が県内の被災沿岸市町村等に配置した「復興支援員」です。

復興支援員は、総務省が地方公共団体に対し、震災復興特別交付税により財政措置する制度で、当県では、県の復興支援員を「いわて復興応援隊」と称し、2012年10月から2023年3月まで、県が設置したいわて定住・交流促進連絡協議会の任期付き職員として採用し、県内の被災沿岸市町村を中心に57名を配置しました。

いわて復興応援隊のほか、「いわて三陸復興のかけ橋推進協議会（岩手県）、県内の市町村が設置した「釜援隊（釜石市）」や「やまだ復興応援隊（山田町）」、「大槌町復興推進隊（大槌町）」、「のだむら復興応援隊（野田村）」など多くの復興支援員が県内で活躍しました。

総務省 web サイト「復興支援員」より

「復興支援員」制度について

制度の概要

- 目的：被災者の見守りやケア、地域おこし活動などの「復興に伴う地域協力活動」を通じ、コミュニティ再構築を図る
- 実施主体：被災地方公共団体 ※東日本財特法に定める「特定被災地方公共団体」又は、「特定被災区域」を区域とする市町村（9県・227市町村）
- 設置根拠等：被災地方公共団体が定める復興計画やそれに基づく要綱等を根拠とし、被災地域内外の人材を委嘱
- 期間：概ね1年以上 ※第2期復興・創生期間（R3～R7）中
- 総務省の支援
 - ①復興支援員を設置する地方公共団体に対し震災復興特別交付税による財政措置（2011年度～）
 - ⇒ 報償費等及び所要の活動経費について特別交付税措置 ※地震・津波被災地域の「地域おこし活動の支援等」（注）については、令和7年度で措置を終了する。
 - ②その他、地域おこし協力隊等のノウハウを活かし、募集や研修、マネージメント、情報提供の面で地方公共団体をサポート
- 支援員数：199名（令和3年度復興特交算定ベース）20団体（3県・17市町村）

（注）「地域おこし活動の支援等」とは、復興支援員が従事する活動のうち、「心のケア等の被災者支援」以外のもの。

復興に伴う地域協力活動の例

- 住民の生活支援、見守り・ケア
(当該活動と一体として行う相談業務を含む。)
・仮設住宅等に居住する住民の巡回、話し相手、巡回時における住民からの健康・生活支援等に関する一般的な相談対応、適切な相談窓口の案内等
・複数の仮設住宅等に分かれて居住する被災コミュニティの連絡調整
- 地域おこしの支援
・地域行事、伝統芸能コミュニティの活動再開及び活動の応援等
・都市との交流事業実施の応援等
・地場産品の販売その他地産地消の推進のための取組の応援等
- 農林水産業への従事等

※具体的内容については、各被災地方公共団体が委嘱において地域の実情に応じ定める

（参考）総務省通知（2012年1月6日付け）

全国の復興支援員の活動については、総務省 web サイトで紹介されています。

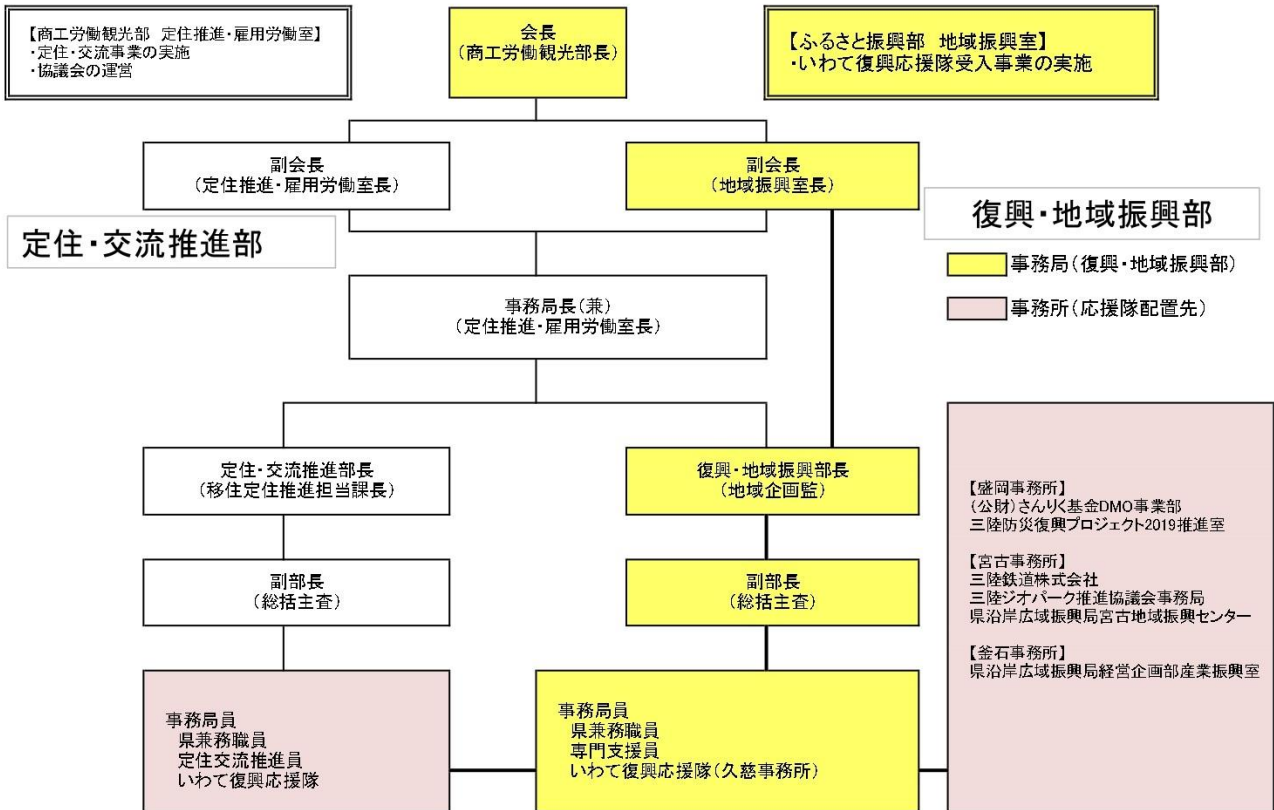
“総務省” ⇒ “地域力の創造・地方の再生” ⇒ “復興支援員”



いわて定住・交流促進連絡協議会

岩手への定住・交流促進に向けて、県・市町村・民間団体等の情報の共有化、ネットワークの構築を図ることを目的とし、2006年度(平成18年度)に県が設置した組織で、県と県内市町村のほか、民間企業、関係団体で構成されています。2019年4月1日付けで組織改正を行い、県庁の2つの部による共管体制となりました。

いわて定住・交流促進連絡協議会事務局の概要(2019年6月時点)



復興・地域振興部 (県ふるさと振興部地域振興室)	定住・交流推進部 (県商工労働観光部定住推進・雇用労働室)
いわて復興応援隊受入事業 いわて復興応援隊募集・採用 隊員の活動及び生活支援、労務管理全般 隊員受入自治体及び受入団体との連携、調整 応援隊に関する情報発信 県内外の復興支援員・地域おこし協力隊との連携 復興支援団体等との連携	定住交流促進事業 移住セミナー、いわて体験ツアーの企画・実施 移住希望者への相談対応 定住交流に関する情報発信

※ 復興・地域振興部は、2023年度から「いわて地域おこし協力隊受入事業」が加わり、県が事業主体となる地域おこし協力隊の受入をスタートさせています。

いわて復興応援隊の受入

2012年6月、県が沿岸の各市町村に「いわて復興応援隊受入事業」を照会し、応援隊配置を希望する市町村及び団体の審査を行いました。2012年7月、いわて復興応援隊の募集が開始され、全国紙に募集記事が掲載されると、問合せが急増し応募者は98人となり、書類審査の時点で当初の10人採用の枠を急遽15人に広げ、同年8月の東京と盛岡の採用面接で14人が選ばれます。

2012年10月1日、いわて復興応援隊の1期生14人が辞令を受け、沿岸各地で活動を開始しますが、その直後から配置先と応援隊との活動等のミスマッチなど様々な課題が発生し、応援隊受入のプロセスの見直しに迫られます。様々な課題を受け、受入を希望する市町村や団体に対し、現地調査やヒアリングを実施し、東京・盛岡での募集説明会には、現職の応援隊にも参加を依頼するなど活動や生活面でのミスマッチを防ぐための事前の対策を考えながら、2013年4月の応援隊2期生の着任を迎えました。

その後は、毎年幾人かの採用をつづけ、57人の応援隊が、三陸の復興に取り組みました。



いわて復興応援隊の受入体制

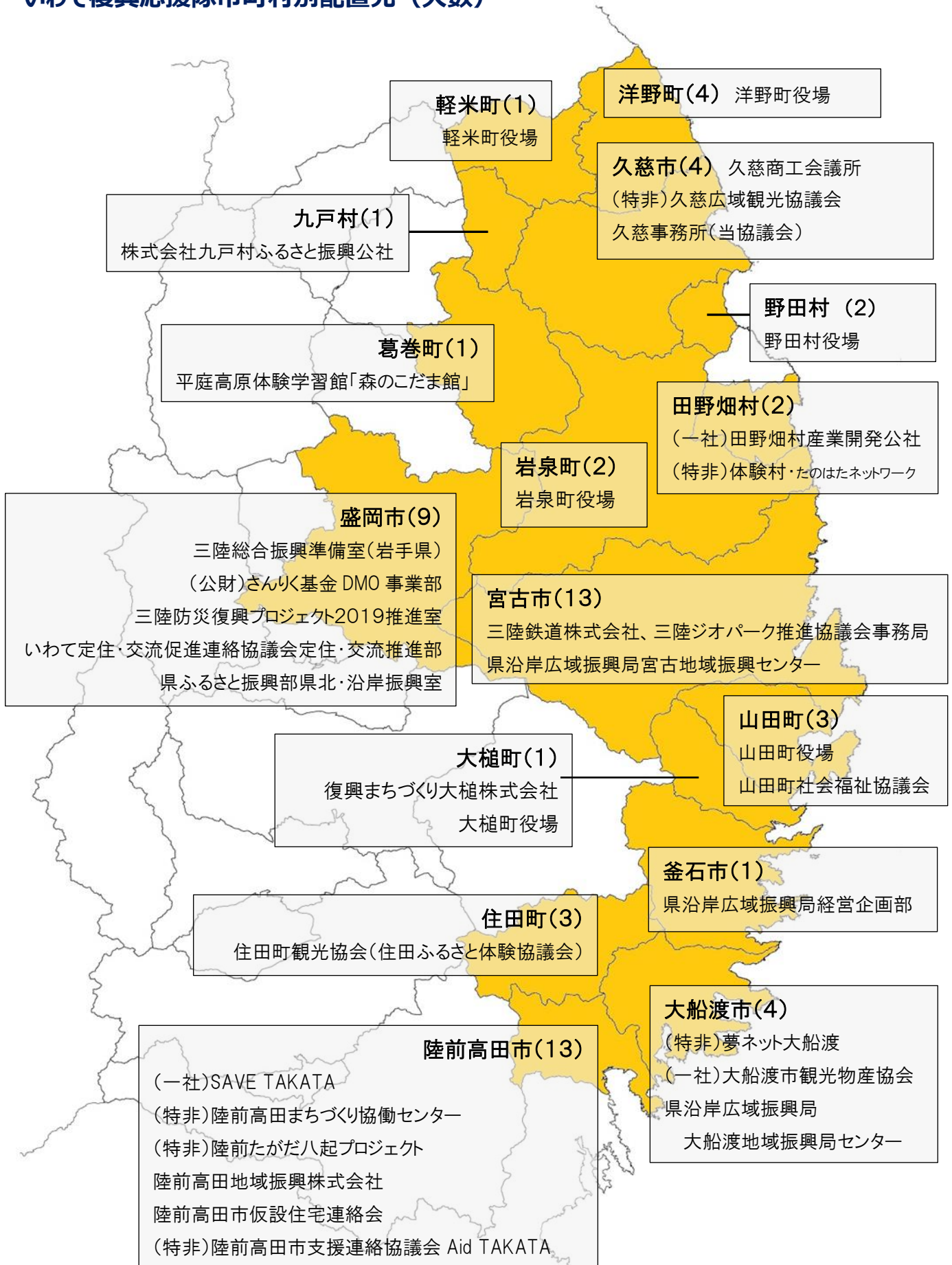
2012年10月の応援隊のスタート時点では、当協議会事務局には専任の職員はおらず、応援隊からの相談や課題発生への対応が困難の状況でした。

当時から応援隊受入を支援していた県委託事業「さんりく交流センター（三陸交流事業）」のスタッフが応援隊専門支援員として2013年4月から協議会事務局に入り、隊員活動のマネジメントをはじめ労務管理や隊員各自の生活を含めた個別相談など全面的に支援する体制を整えました。

専門支援員は、定期的に隊員配置先を訪問し、隊員や受入担当者それぞれ面談するなど、隊員の活動環境の保全・改善や関係機関との連携に取組み、応援隊の受入機関は、同協議会の現地事務所として、日常の業務管理、活動支援など事務局と連携して隊員の活動を支援していきます。

応援隊スタート当初は、県内にはまだ少なかった地域おこし協力隊や集落支援員等とも定期的な研修を合同で開催するなど各地域の地域づくり人材の交流・連携を図る機会を作り、また、東日本大震災被災3県の復興支援員の支援組織（みやぎ連携復興センター、ふくしま連携復興センター）と連携し課題を共有するなどより良い制度の運営に向けた取組も行いました。

いわて復興応援隊市町村別配置先（人数）



いわて復興応援隊配置先一覧（受入機関・期間・活動内容）

	配置機関(団体)名	市町村	期間・隊員数
1	三陸総合復興準備室(県政策地域部地域復興室)	盛岡市	2015年5月～2018年3月 5人
	<ul style="list-style-type: none"> ・三陸沿岸地域の地域資源掘り起こし (観光業者等へのヒアリング、現地調査の実施、観光地魅力向上の検討) ・教育旅行の企画(教育旅行関係者へのヒアリング) ・現地調査等を通じた三陸の魅力情報発信(SNS) 		
2	公益財団法人さんりく基金 DMO事業部	盛岡市	2017年4月～2023年3月 1人
	<ul style="list-style-type: none"> ・教育旅行の企画支援 ・三陸観光プランナー養成塾事務局運営支援 ・三陸観光ポータルサイト「さんりく旅するべ」運営支援 ・三陸の地域資源等情報収集・取材 ・総合学習探求授業支援(県立盛岡第三高等学校等) 		
3	三陸防災復興プロジェクト 2019 推進室	盛岡市	2018年4月～2020年3月 4人
	<ul style="list-style-type: none"> ・関係市町村・団体、地域住民・学生のつながり作り ・プロジェクト運営支援(さんりく文化芸術祭 2019、三陸ジオパークフォトロゲイニングフェスティバル) ・開催記録作成及びプロジェクトの事業継承の支援 		
4	いわて定住・交流促進連絡協議会 定住・交流推進部	盛岡市	2018年10月～2023年3月 1人
	<ul style="list-style-type: none"> ・定住・交流事業の支援に関する情報発信 ・移住相談窓口業務(電話、LINE等)、協力隊等のイベント参加 ・復興支援員、地域おこし協力隊の募集情報支援 		
5	県ふるさと復興部 県北・沿岸復興室	盛岡市	2020年4月～2023年3月 1人
	<ul style="list-style-type: none"> ・三陸防災復興プロジェクトのHP、SNSによる情報発信 ・復興支援マッチング支援(かけ橋プロジェクト) ・防災啓発イベントの取材、運営支援等(ぼうさい国体ほか) 		
6	三陸鉄道株式会社	宮古市	2013年1月～2023年3月 3人
	<ul style="list-style-type: none"> ・三陸鉄道を活用した観光ツアーの企画、沿線企業と連携した特産品開発支援 ・イベントの記録写真撮影およびポスター、チラシ等の宣材制作支援 ・ラジオ番組企画制作(エフエム岩手「笑顔をつなぐ、ずっと…三陸鉄道」) ・SNS及び動画サイトでの情報発信 ・駅構内映像、中吊り広告ヘッドマークデザイン等 ・三陸国際芸術推進委員会運営委員として支援 		
7	三陸ジオパーク推進協議会事務局	宮古市	2014年5月～2023年3月 10人
	<ul style="list-style-type: none"> ・三陸ジオパーク普及啓発活動(フォーラム、ジオツアー、啓発イベント等) ・三陸ジオパークガイド養成(講座、ガイド交流会、認定試験ほか) ・広報紙「さんりくジオだより」発行支援(取材、記事作成) ・県内学校でのジオ授業推進支援、「さんりくジオパークかわらばん」の運営 ・「みちのく潮風トレイル」「三陸鉄道」「三陸DMOセンター」との連携 		

いわて復興応援隊配置先一覧（受入機関・期間・活動内容）

	配置機関(団体)名	市町村	期間・隊員数
8	県沿岸広域振興局 宮古地域振興センター	宮古市	2019年5月～2023年3月 2人
	<ul style="list-style-type: none"> ・三陸ジオパーク現地推進員活動(中央ブロック担当) ・三陸DMOセンターとの連携支援 ・明日の浜人発掘事業支援、「いわて水産女子コミュニティ」立ち上げ ・水産業に関わる若者との交流・活動支援(地域おこし協力隊等) ・郷土芸能伝承活動支援(中野七頭舞など) 		
9	特定非営利活動法人 夢ネット大船渡	大船渡市	2013年4月～2017年3月 2人
	<ul style="list-style-type: none"> ・起業・創業支援(大船渡市と連携した起業者相談等) ・三陸鉄道活用事業支援(イベント列車の企画・運営) ・気仙地域対象のコミュニティ誌「復興ニュース」の発行・配布支援 ・仮設住宅住民とのふれあい(英語カフェ等)及び傾聴活動 ・支援物資の配布及びボランティア受け入れ支援 		
10	一般社団法人 大船渡市観光物産協会	大船渡市	2013年4月～2018年3月 1人
	<ul style="list-style-type: none"> ・観光再生に向けた支援(さんま焼きイベント、教育旅行誘致、ガイド養成講座など) ・地域素材の発見、情報収集と発信、広報物品の制作支援(チラシ、グッズ、キャラクター等) ・基石海岸インフォメーションセンター(同キャンプ場)の施設運営支援 ・防災・震災ガイドの運営サポート、三陸ジオパーク、みちのく潮風トレイルとの連携 		
11	県沿岸広域振興局 大船渡地域振興センター	大船渡市	2018年6月～2019年3月 1人
	<ul style="list-style-type: none"> ・三陸ジオパーク現地推進員活動(気仙エリア担当、関係者との交流) ・三陸DMO地域連携活動(イベント運営、情報発信) ・気仙地域の地域振興・復興支援関係団体との連携、地域ニーズ調査、情報発信 ・災害ボランティアの実践と現地レポート 		
12	久慈商工会議所	久慈市	2013年4月～2018年4月 1人
	<ul style="list-style-type: none"> ・街なか活性化事業、連続テレビ小説「あまちゃん」関連イベント運営支援 ・地域資源を活用した観光商品開発・新しい観光スポット作りほか ・地域活性化イベント企画運営支援(事業者、地域の若者との連携、PR 隊結成) ・県外における久慈地域 PR 活動(商談会、あまロスツアー、観光プロモーションなど) 		
13	特定非営利活動法人 久慈広域観光協議会	久慈市	2018年5月～2019年5月 2人
	<ul style="list-style-type: none"> ・県北沿岸地域のツアー造成(洋野・久慈・野田・普代) ・三鉄との連携による観光振興 ・グリーンツーリズム、体験プログラムの造成ほか 		
14	いわて定住・交流促進連絡協議会 久慈事務所	久慈市	2019年5月～2023年3月 2人
	<ul style="list-style-type: none"> ・三陸ジオパーク現地推進員活動(北部ブロック担当) ・三陸DMO地域連携活動(イベント運営、情報発信) ・一次産業の振興支援 ・みちのく潮風トレイルの現地対応等の連携 ・地域おこし協力隊との連携・交流、活動支援 ・地域団体、地域事業者とのまちづくり連携活動 ・ドローンによる上空からの動画撮影による、北三陸の情報発信支援 		

いわて復興応援隊配置先一覧（受入機関・期間・活動内容）

	配置機関(団体)名	市町村	期間・隊員数
15	一般社団法人 SAVE TAKATA	陸前高田市	2012年10月～2017年9月 4人
	<ul style="list-style-type: none"> ・復興支援協力団体のコーディネート、マッチング支援 ・被災地のITスキル向上、在宅ワーク就労支援、高校生キャリアアップ支援 ・復興商店調査及び商店街マップ(陸前高田復興マップ)等の制作、アプリ開発支援 ・地元農産物の6次化・ブランド化、農業の担い手づくり・若者就農体験支援 ・被災事業者及び新規事業者支援のためのwebサイト開設 ・被災地ボランティア・インターン・移住を希望する大学生交流支援 		
16	特定非営利活動法人 陸前高田まちづくり協働センター	陸前高田市	2013年1月～2018年4月 5人
	<ul style="list-style-type: none"> ・まちづくりコーディネーター育成講座運営 ・市民活動や地域団体の活動支援 ・災害復興住宅の自治会立ち上げ等地域コミュニティ支援 ・「陸前高田市まちづくりプラットホーム」事務局運営支援 ・「高田大隅つどいの丘商店街」復興に関するイベント企画をはじめ運営支援 		
17	特定非営利活動法人 陸前たがだ八起プロジェクト	陸前高田市	2013年4月～2018年4月 2人
	<ul style="list-style-type: none"> ・モビリア仮設住民支援事業(仮設住宅サポートセンター運営) ・仮設住民の見守り支援、自立支援サポート、子供の居場所支援 ・県外交渉事業推進支援(中越地震災害地域ほか) ・災害公営住宅住民のコミュニティ形成支援、高齢者買い物サポートほか ・外部支援によるボランティアの受け入れサポート 		
18	陸前高田地域振興株式会社	陸前高田市	2013年4月～2016年4月 1人
	<ul style="list-style-type: none"> ・ネットショップ「陸前高田のうまいもの たがだ屋」運営サポート ・販促ツールデザイン(チラシ、ポスター、POP、特産品ラベルデザイン等) ・陸前高田物産センター及び東京、名古屋での特産品販売 		
19	陸前高田市仮設住宅連絡会	陸前高田市	2013年4月～2015年3月 3人
	<ul style="list-style-type: none"> ・仮設住宅自治会サポート(交流イベント運営、住民サポートほか) ・住民、行政、関係各所との連絡調整支援 ・仮設住宅住民と外部とをつなぐコミュニティ紙「連絡会通信」発行 ・陸前高田復興の定点記録(連絡会通信に掲載) 		
20	特定非営利活動法人 陸前高田市支援連絡協議会 Aid TAKATA	陸前高田市	2014年5月～2015年4月 1人
	<ul style="list-style-type: none"> ・陸前高田災害FMパーソナリティー、番組の地域情報取材(暮らしの情報、ボランティア情報、行政情報など) ・地域イベント運営支援(企画、MCほか)、情報発信ほか 		
21	県沿岸広域振興局 経営企画部産業振興室(釜石)	釜石市	2018年6月～2013年3月 1人
	<ul style="list-style-type: none"> ・三陸ジオパーク現地推進員活動(南部ブロック担当) ・三陸ジオパーク及び三陸DMOセンターに係る気仙エリアのサポート ・地域イベントの企画(三陸ジオフォトログ in 宮古ほか) ・三陸DMO地域連携活動(イベント運営、情報発信) ・「さんりく旅するべ」「ジオだより」への寄稿協力、三陸の季節の移り変わりを画像で発信。 		

いわて復興応援隊配置先一覧（受入機関・期間・活動内容）

	配置機関(団体)名	市町村	期間・隊員数
22	いわて体験交流施設 平庭高原体験学習館「森のこだま館」	葛巻町	2013年2月～2014年9月 1人
	<ul style="list-style-type: none"> ・体験学習のサポート、来場者案内サポート ・被災地との交流事業支援ほか ・応援隊連携による地域特産品の販促支援 		
23	住田町観光協会(住田ふるさと体験協議会)	住田町	2012年10月～2018年4月 3人
	<ul style="list-style-type: none"> ・着地型観光基盤整備支援(グリーンツーリズム、インバウンド受入体制づくりなど) ・住田町観光PRキャラクター(すみっこ)による地域活性化プロモーション推進 ・町民ガイドの立ち上げ、民泊受入先開拓、教育旅行受け入れ支援ほか ・特産品の県外PR及び販促支援 ・仮設住宅入居者と地域住民、県外ボランティアとのコミュニティ支援 		
24	復興まちづくり大槌株式会社	大槌町	2013年4月～2017年5月 1人
	<ul style="list-style-type: none"> ・宿泊施設「ホワイトスペース大槌」開設準備・運営支援 ・交流イベント運営(ヒルクライム、船釣大会) ・コミュニティ施設 浪板海岸ヴィレッジ管理・運営支援 ・ふるさと納税特産品贈呈事業、県外交流拠点での特産品販売支援 ・大槌町復興推進隊(協力隊)のマネジメント及び活動支援 		
25	大槌町商工観光課	大槌町	2017年5月～2018年4月 1人
	<ul style="list-style-type: none"> ・大槌町観光交流協会の設立支援 ・大槌駅窓口業務の支援 ・復興まちづくり大槌(株)からのイベント事業等の継承(ヒルクライムほか) 		
26	社会福祉法人 山田町社会福祉協議会	山田町	2013年4月～2016年4月 2人
	<ul style="list-style-type: none"> ・地域内外交流イベントの企画・運営、子供の遊び場創出(サマーチャレンジやまだ等) ・ボランティアの受け入れ・マッチング支援 ・住民ボランティア活動啓発支援(小・中高校生ボランティア講座ほか) ・津波被災写真の洗浄、返却、デジタル化支援(思い出写真展) 		
27	山田町	山田町	2013年6月～2014年5月 1人
	<ul style="list-style-type: none"> ・中心市街地の復興計画検討及び遂行支援 (関係者調整、事業者ヒアリング及びワークショップの実施、補助金等の情報収集及び情報提供など) ・仮設商店街活性化の仕掛けづくり(100円商店街等のイベント企画・運営) ・各種補助金等の申請及び報告書の作成支援 ・山田町復興支援員(やまだ復興応援隊)の立ち上げ、募集、活動サポート 		
28	岩泉町	岩泉町	2012年10月～2016年3月 2人
	<ul style="list-style-type: none"> ・観光用PRツール、動画作成支援 ・三陸鉄道とのタイアップ事業(車内イベント) ・地域交流プロジェクト推進(着地型旅行商品造成) ・龍泉洞冬季観光等「恋人の聖地」事業推進 ・県外イベントでの町内特産品の販売支援 		

いわて復興応援隊配置先一覧（受入機関・期間・活動内容）

	配置機関(団体)名	市町村	期間・隊員数
29	軽米町	軽米町	2012年10月～2017年9月 1人
	<ul style="list-style-type: none"> ・地域農林畜産物の付加価値化(さるなし、かつけ、雑穀ほか) ・地域イベント企画運営支援(芝桜チューリップウォーク、森林ウォーキング、食フェスタ in かるまい等) ・県外での軽米町魅力PR(いわて銀河プラザ出店、町イチ！村イチ！) ・ゆるキャラ(かるるん)との地域PR、SNS等による情報発信 		
30	洋野町	洋野町	2012年10月～2017年9月 2人
	<ul style="list-style-type: none"> ・町の公式ブログ「ひろのだよ」による情報発信(地域の人、街の魅力発信) ・県外での物産販促サポート ・「洋野エモーション」の立ち上げと地域住民との協力運営 ・洋野町エコツアー・モニターツアーの企画・運営支援 ・小学校の総合学習(講師)、地域の魅力をテーマにした講演 ・県外からの修学旅行(震災学習)の受け入れ及び取材と情報発信 		
31	特定非営利活動法人 体験村・たのはたネットワーク	田野畑村	2013年4月～2018年4月 1人
	<ul style="list-style-type: none"> ・被災地の観光再生支援(サッパ船運営、大津波語り部ガイド等体験プログラム支援) ・地域素材の発見・情報収集と情報発信 ・教育旅行及び観光客の誘致推進支援(修学旅行誘致説明会、全国ほんもの体験フォーラムなど) 		
32	一般社団法人 田野畑村産業開発公社	田野畑村	2013年4月～2015年10月 1人
	<ul style="list-style-type: none"> ・地域素材を活用した特選品の企画・開発(地域女性部と連携) ・ネット通販の企画・運営及び販売促進活動(物産展及びイベント等への出店支援) ・「たのはた未来プロジェクト」の立ち上げ及び地域情報発信(SNS、ブログ、メルマガ) 		
33	野田村	野田村	2012年10月～2017年9月 2人
	<ul style="list-style-type: none"> ・観光物産館ぱあぶるの通販サイト「ネットぱあぶる」リニューアル、Facebook ページ作成 ・山葡萄ワインの販促支援 ・”荒海”商品のブランディングと販促プロモーション、公式サイト制作・運営支援 ・コミュニティ施設の活性化(野田村ヒップホップダンスの取組み) ・地域の魅力情報発信ブログ「のだ村に暮らすのだ！」 ・体験ツアー企画・交流事業推進「野田村ファッションショー」 ・復興支援活動団体「チーム北リアス」との連携 		
34	株式会社 九戸村ふるさと振興公社	九戸村	2012年10月～2017年9月 1人
	<ul style="list-style-type: none"> ・地域特産品「あま茶」のPR及び販促支援(風評被害対策支援) ・未利用地域資源の有効活用(マタタビ) ・地域資源を活用した新商品開発(イワテヤマナシ) ・「オトデ館」運営及び情報発信支援 		

※配置人数は、配置換えとなった人数を含む

いわて復興応援隊

活動事例

2012（平成24）年度



2011年3月～2012年3月の県内の主な出来事

- 2011年3月11日、東日本大震災津波発生
- 2011年4月9日、県内初となる応急仮設住宅への入居開始
- 2011年6月、「東日本大震災復興基本法」成立
- 2011年8月31日、県内すべての避難所が閉鎖
- 2012年1月6日付けで総務省が「復興支援員」の推進について通知
- 2012年3月11日、東日本大震災津波から1年を迎え、各地で追悼式挙行

いわて復興応援隊スタートに向けて

- 2012年7月、県がいわて復興応援隊の募集を開始。全国紙にいわて復興応援隊募集記事が掲載され、県への問い合わせが急増。
- 県内外から約100人の応募があり、当初の採用予定枠を10名から15名に変更。
- 8月、書類審査を経て、都内及び盛岡において採用面接を実施。
- 9月、応援隊受入予定自治体に対し事前説明会を実施。

いわて復興応援隊 14 名を任命

10月1日、岩手県庁でいわて復興応援隊として県内外から採用された14名に辞令が交付された。総務省の復興支援員制度を活用し、県が初めて採用する応援隊着任に、多くの報道陣から取材を受けた。

翌年1月1日付けで採用となる1名（三陸鉄道株式会社配置）を含め、初年度の応援隊は15名となる。



2012年度任用の応援隊（配置先）※敬称略、着任当時の氏名

- | | |
|--------------------------|-------------------------------|
| 寺田 英人（軽米町） | 小石川 茂（宮古市・三陸鉄道株式会社） |
| 渡邊 博（九戸村・(株)九戸村ふるさと振興公社） | 鈴木 麻里子（陸前高田市・陸前高田まちづくり協働センター） |
| 宮本 慶子（洋野町） | 菅原 久美子（陸前高田市・(一社)SAVE TAKATA） |
| 勝田 麻津子（洋野町） | 齋藤 健祐（陸前高田市・(一社)SAVE TAKATA） |
| 山下 美陽（野田村） | 新田 昌輝（陸前高田市・(一社)SAVE TAKATA） |
| 町田 恵太郎（野田村） | 平山 花織（陸前高田市・(一社)SAVE TAKATA） |
| 藤島 亜紀子（葛巻町・森のこだま館） | 佐々木 敦代（住田町・住田町観光協会） |
| 橋本 充司（岩泉町） | |

注)年度内の配置替えあり

2012年度の活動事例

いわて復興応援隊は、東日本大震災発災の翌年の平成24年10月からスタート。県が復興支援員制度導入を決め、関係市町村への周知や受入体制の整備など、公募から採用に至るまでの期間が短い中で全国から98人(県内35人、県外63人)の応募があり、翌年1月の追加採用を含め、15名の隊員が着任した。

着任からまもなく、隊員が担当となり自治体公式ブログやSNS、動画作成などにより沿岸地域の情報発信がはじまり、県内外で行われる被災地復興イベントでは、配置地域の出展を支援し、沿岸の復興状況や三陸の魅力のPRを積極的に進めた。また、地域づくり等の研修にも積極的に参加し、県内外の復興支援員や地域おこし協力隊等との交流を深めた。

10月

応援隊公式SNSがスタート

応援隊や地域の情報を伝える目的で、隊員が定期的に投稿する形で応援隊Facebook、Twitterの運営がスタート。配置先(地域)の様子や県外向けのPR活動などを動画も取り入れながら発信した。

応援隊が自治体地域情報ブログやSNSの運営支援

洋野町の「ひろのだよ」や野田村の「のだ村に暮らす」など、配置先で地域情報や地域の魅力を伝えるための情報発信を応援隊が担当するケースも多かった。



11月・12月

県内外での地域をPRする活動もスタート

- 盛岡・八幡平広域観光PRイベント(東京/新橋)で岩泉町の出展支援
- ふるさと交流まつり(東京/上野)で洋野町の出展支援
- JOIN地方交流会in岩手に参加(野田村)
- 三陸ジオパーク・モニターツアー「モシ竜・ロマンクルーズ被災地ガイド」に参加(岩泉町)
- 野田村で行われた三陸鉄道の枕木プレート設置式の様子を取材。

※三陸鉄道復旧に向けた支援プロジェクトのひとつで、支援者の名前が刻まれたプレートを三陸鉄道の線路の枕木に設置する。

- 魚をおろすのは初体験の応援隊が、地元の中学生と一緒に「鮭とば」作りを体験(洋野町宿戸漁協)

北三陸の天体観測体験
(洋野町・ひろのまきば天文台)



平成 24 年度第 1 回いわて復興応援隊研修会を盛岡市で開催



11 月の 2 日間、いわて復興応援隊初めての研修会を盛岡市のつなぎ温泉で開催し、応援隊 14 名全員が顔をそろえ、それぞれの活動内容や地域の状況について発表を行った。

講師として、総務省自治行政局地域自立応援課人材力活性化・連携交流室の藤澤三宝子氏を迎え「被災復興の地域づくり」について中越地震復興支援のプロセス、復興支援員制度と制度設計の元になった地域おこし協力隊の事例から成功のポイント等について講義を受けた。

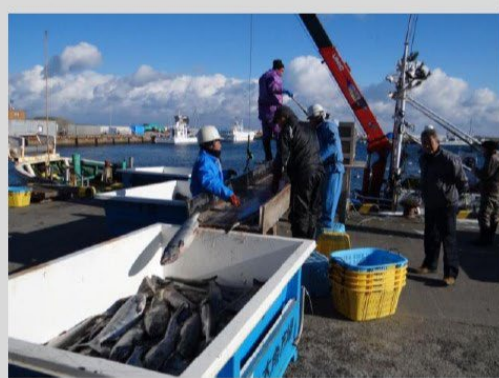
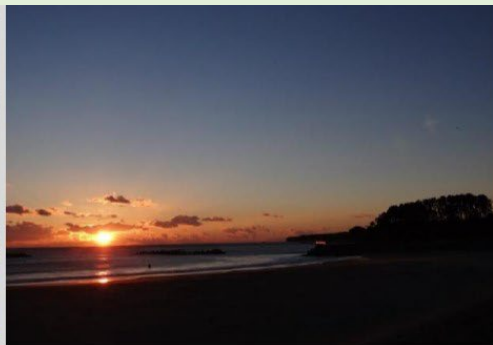
【開催日】2012 年 11 月 15 日、16 日

【会場】つなぎ温泉・清温荘(盛岡市繫)

1 月～3 月

着任後初めて迎える三陸沿岸の正月を紹介

応援隊が各地の正月様子を SNS や地域ブログで紹介。多くの隊員が活動地域で着任後初めての正月を迎え、地域の魅力を伝えた。



行政や民間の様々な広報媒体で応援隊の活動を紹介

- JOIN(移住・交流推進機構)ポータルサイト「隊員インタビュー・特集Vol.37」で住田町配置の応援隊と共にいわて復興応援隊についても紹介された。
- 県政番組「いわて希望の一步」で応援隊の活動といわて復興応援隊について紹介

1 月放送:「我ら!いわて復興応援隊～被災地の今を発信(野田村)～」
2 月放送:「我ら!いわて復興応援隊～思いを復興の力に(陸前高田市)～」

- 岩手日報の特集「頑張る復興応援団(2013.3.6)」に洋野町配置応援隊が掲載され、地域の魅力探しを元気に発信する活動が紹介された。

復興支援に関わる学生達の受入れ(野田村)

「野田村復興応援フィールドツアー」で大阪と八戸の大学生を野田村で復興支援に関わる若者たちと連携し受入れ、地域との交流を図った。



味噌づくりに挑戦

軽米町の醤油とみその老舗製造会社が開催した「味噌づくり教室」に軽米町・洋野町で活動する応援隊が参加し、他の参加者共に麴をほぐす作業や大豆を蒸す行程を体験した。

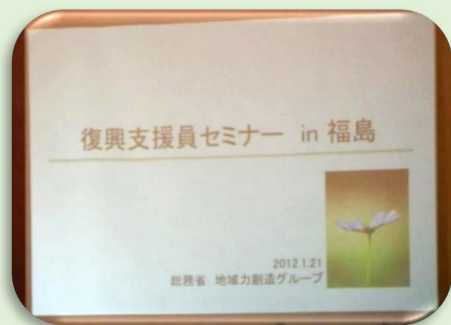
厳寒の凍み大根づくりを体験

岩泉町安家地区で、地元で生産される赤い色で辛みのある大根で作る保存食の凍み大根づくりを体験。



復興支援員セミナー in 福島で応援隊が事例発表

1月21日、福島県庁で開催された総務省主催「復興支援員セミナー in 福島」で、福島県、宮城県の復興支援員とともに、いわて復興応援隊(住田町配置)が事例発表を行った。



基調講演: 稲垣文彦氏(中越防災安全推進機構復興デザインセンター長)
藤沢烈氏(復興庁政策調査官)

事例発表: 宮城県、福島県浪江町、宮城県復興応援隊、岩手県復興応援隊、浪江町復興支援員

被災地のITスキル向上と就労支援

陸前高田市の就労創出支援の一つとして、パソコン教室開催を支援。このほか、被災事業者や新規事業者のwebサイト開設支援など被災地のIT普及を進めることで、被災者の生活支援をはじめ、地域活性化、観光や産業の復興支援につなげていくこととなる。



配置先「陸前高田まちづくり協働センター」の取組を紹介

陸前高田市の仮設商店街「高田大隅つどいの丘商店街」に拠点を置く、応援隊配置先の一つ「陸前高田まちづくり協働センター」の取組みを応援隊SNSで紹介。



陸前高田まちづくり協働センターは、地域の復興に寄り添いながら、町内会・自治会等のコミュニティ支援やNPOの立ち上げ・運営支援など地域づくりを支える取組みを行っている。

高田大隅つどいの丘商店街には、もう一つの応援隊配置先である(一社)SAVE TAKATAも入居するシェアオフィスもあり、2013年3月時点で、応援隊が5人の活動拠点となっており、復興支援関係者の重要な交流の場でもあった。

九戸村特産「あま茶」の販促支援

岩手県北部に位置する九戸村は、甘茶の国内有数の生産地。東日本大震災津波による風評被害を乗り越え、販路拡大、新商品開発を応援隊が着任当初から全力で支援した。県内外の物産フェアはもとより、復興関連のフォーラムや復興支援員・地域おこし協力隊の研修や報告会等の会場でも甘茶の試飲コーナーを設けるなどPR活動を継続して行い、海外でも高い評価を受けるなど成果を上げていく。



北海道地域おこし協力隊研修会に参加

2013年2月15日に札幌市で開催された「北海道地域おこし協力隊研修・交流会」に応援隊も参加。「地域で活動を進めるには」をテーマにしたワークショップでは、道県の枠を超えた熱いディスカッションが行われた。



洋野町東日本大震災復興講演会開催支援(3月10日)

洋野町民文化会館で開催された東日本大震災復興講演会で、応援隊が人生初の司会を務め、来場者約700人と共に陸前高田市の八木澤商店会長の河野和義氏の「ふるさとを負けない！」と題した復興に向けた講演を聴講。

東日本大震災津波から2年目を迎える地域の様子

野田村の追悼式会場準備や災害公営住宅新築内覧会の様子を伝えた。



全国ほんもの体験フォーラム in 徳島(3月16日～18日)

全国の体験型観光の関係者が集い、情報交換・体験交流による地域振興の推進を目的に開催される第9回目の全国ほんもの体験フォーラムが徳島県徳島市で開催され、洋野町・野田村の応援隊が参加。全国の取り組み事例や課題を学び、関係者との交流を深めた。同フォーラムは、2011年度に開催される予定であったが、東日本大震災発災を受け開催中止となっていたもので、東北の被災地からの参加も含め全国から体験プログラムを提供する関係者が集った。



平成 24 年度第2回いわて復興応援隊研修会を開催(宮古市)

同年度 2 回目となる応援隊研修は、隊員の提案により、3 月 25 日、26 日の両日、宮古市田老のグリーンピア三陸みやこを会場に沿岸での現地開催となった。

1 日目は、いわて連携復興センター事務局長の葛巻徹氏を迎え「県内の復興支援の現状と課題」について講義を受け、続いて隊員企画ワークショップを、講師、事務局も参加して行い、約半年の活動を通して出てきた「応援隊の共通課題とは何か？」をテーマにその原因を洗い出し、今後の方向性を探った。



研修2日目は、午前中、県内外で開催された復興や地域振興関連のフォーラムやイベント等に参加した隊員からの報告を聞き、今後の活動に向けた情報交換を行った。午後は、宮古観光文化交流協会の体験プログラム「田老・学ぶ防災」に参加し、ガイの元田さんから田老地区の被災当時の様子について、現場を巡りながら説明を聞いた。



グリーンピア三陸みやこ(宮古市田老向新田 148)

東日本大震災津波発災直後は、避難所として使用され、その後は広大な敷地内に応急仮設住宅や仮設店舗が立てられ、地域の復興と共に歩んできた総合リゾート施設。

いわて復興応援隊次年度の募集に向けての取組

受入れ体制の強化と採用方法の見直し

2012年10月からスタートしたいわて復興応援隊は、導入を急いだことも要因となり、隊員と受入機関との活動内容のミスマッチや受入体制の課題等が明らかとなり、隊員の配置替えなどの対応に迫られ、翌年度からの採用方法を見直すこととなった。

平成25年度いわて復興応援隊員募集

平手県では約15名の「復興応援隊員」が被災地の3箇市中心に派遣されています。さらには4月から始まる平成25年度隊員の募集が始まります。3箇市の復興と地域の活性化に力を入れて活動する方々の応募を募集しています。被災に際して復興応援隊のセミナーも開催説明会を開催しますのでぜひご参加ください。

地域を元気にし、復興を後押しする人材を求めます！

いわて復興応援隊 セミナー&募集説明会

募集説明会の入場は自由ですが、事前のお申し込みをお勧めします。

平成25年 1月19日(土)
 マリオス183,184会議室
 〒019-621-5000

平成25年 1月25日(金)
 ふるさと国際支援センター
 〒03-6273-4401

平成25年 1月26日(土)
 若手県政実務所分室
 〒03-5212-9162

いわて定住・交流促進連絡協議会 (若手県庁地域復興室内)
 〒020-8570 若手県庁盛岡市内丸10-1 ☎019-629-5194 Mail:AB0007@pref.iwate.jp



いわて復興応援隊 2期生採用に向けての動き

- 11月: 2013年度応援隊配置について、自治体等の意向調査を実施
- 12月: 応援隊受入機関(予定を含む)にヒアリングを実施
- 翌年1月: 応援隊募集説明会を都内2か所、盛岡市内1か所で開催
- 2月: 応援隊採用面接会(都内・盛岡市)実施※各機関受入担当者同席
- 3月: 応援隊採用内定者の事前現地視察を実施。

【3/16】応援隊が活動と制度について全体共有(盛岡市)

【3/17】内定者と受入担当者が一緒に配置先へ移動し、活動予定地域を視察し、現地関係者と交流(沿岸の各配置先)



3/16 盛岡地域交流センター「マリオス」に応援隊採用内定者と受入機関担当者が集合

2013年度は、4月から応援隊活動と当協議会事務局運営を支援する専門支援員が配置され、応援隊のフォロー体制が強化される。また、応援隊2期生着任前の4月10日には、応援隊受入機関担当者研修会を盛岡で開催し、復興支援員制度や応援隊受入体制の重要性を共有し、4月15日の応援隊2期生の着任を迎える。

2013（平成25）年度



県内の主な出来事

- NHK朝の連続テレビ小説「あまちゃん」放送開始(4/1)
- 三陸鉄道南リアス線(盛～吉浜間)運転再開(4/3)
- 1955年に陸中海岸国立公園として指定された区域に、青森県八戸市の蕪島(かぶしま)・種差(たねさし)海岸と階上(はしかみ)町の階上岳・階上海岸の区域を合わせ、「三陸復興国立公園」に名称が改められた。(5/24)
- 三陸ジオパーク(青森県八戸市～宮城県気仙沼市)が日本ジオパークに認定(9/24)
- 県内の三陸沿岸道路で初めて「普代道路」が開通(10/13)
- 岩手県の災害廃棄物処理が終了(2014/3/31)

いわて復興応援隊 17名を任命

2013年4月15日付けで16名、6月1日付けで1名の隊員が着任



平成25年度着任の隊員（配置先） ※敬称省略

- 池 一恵 (久慈市・久慈商工会議所)
- 田村 絵里 (田野畑村・一般社団法人田野畑村産業開発公社)
- 渡邊 悦子 (田野畑村・NPO 法人体験村・たのはたネットワーク)
- 山下 慶子 (山田町・社会福祉法人山田町社会福祉協議会)
- 木村 公介 (山田町・社会福祉法人山田町社会福祉協議会)
- 若田 謙一 (山田町)
- 松岡 雄也 (大槌町・復興まちづくり大槌株式会社)
- 中野 貴之 (大船渡市・一般社団法人大船渡市観光物産協会)
- 佐藤 秀則 (大船渡市・NPO 法人夢ネット大船渡)
- 河野 由佳 (大船渡市・NPO 法人夢ネット大船渡)
- 酒井 菜穂子 (陸前高田市・陸前高田まちづくり協働センター)
- 種坂 奈保子 (陸前高田市・陸前高田地域復興株式会社)
- 佃 実佳 (陸前高田市・NPO 法人陸前高田市仮設住宅連絡会)
- 榎本 英生 (陸前高田市・NPO 法人陸前高田市仮設住宅連絡会)
- 池田 陽一 (陸前高田市・NPO 法人陸前たがだ八起プロジェクト)
- 山口 なつみ (陸前高田市・NPO 法人陸前たがだ八起プロジェクト)
- 美濃 はるか (住田町・住田町観光協会)



2013年4月15日時点の応援隊配置自治体

2013 年度の活動事例

応援隊の配置地域が沿岸を中心に 14 市町村となり、隊員数は 30 人を越えたことから、隊員間の交流・連携がより重要となり、自主的なミーティングやイベント等の企画・実施が積極的に行われた。

新年度新たに隊員を迎えるにあたり、4 月から隊員 1 期生からメンバー全員の自己紹介を公式 SNS でスタートさせ、6 月に隊員 1 名を迎えるまでルー形式で隊員それぞれが投稿を行い、応援隊の存在を県内外に対し PR した。



2013年当時の応援隊公式 Facebook のトップページ

当時の SNS の日常の運営は、隊員間で行っており、活用方法を議論しながら進められた。

投稿については、県(事務局)のチェックが入ることもあったが、その都度、課題を互いに話し合いながら、隊員の活動をはじめ、復興状況や地域の取組み、三陸の魅力などリアルタイムで情報発信を行った。



2 期生着任後は、県内外の被災地復興支援の関係団体との連携もより強化され、応援隊の活動がメディア等で紹介される機会も増え、隊員も積極的に地域に溶け込み、支援活動も幅も広がりを見せていく。

当協議会事務局には、隊員の活動支援を万全にするため、同年 4 月から専門支援員が着任し、隊員の労務管理をはじめ、活動及び生活相談、受入れ先や関係団体との連絡調整、事務局運営などを行う体制を県庁舎内に設置した。

5月

県立高田高等学校進路講演会で応援隊が講演

陸前高田市の県立高田高等学校で「復興応援隊から高生(たかこうせい)へのメッセージ」と題して、応援隊2名が講演。同講演会の様子は、地元紙(東海新報)の取材を受けたほか、仲間の応援隊が地域広報紙「復興ニュース」の記者として「キャリア教育」をテーマに取材し紹介した。

※当時、高田高校は、被災により県立大船渡東高校萱中校舎(旧県立大船渡農業高校)を使用。



復興女子会議に隊員参加

5月25日、遠野市内のホテルを会場に岩手若手会議主催の第2回若手会議 in 岩手「復興女子会議」が開催され、県内の復興や地域づくりに関わる女性7名によるパネルディスカッション(コーディネーター:岡本翔馬氏)により復興を語った。パネリストとして応援隊も登壇し、グリーン・ツーリズムや教育旅行など地域の交流事業に取り組む隊員としての復興支援を語った。

応援隊をはじめ、被災地で支援活動する関係者が多数参加し、交流を深めた。



応援隊自主企画ミーティング in 陸前高田

気仙地域で活動する応援隊が中心となり、陸前高田まちづくり協働センターを会場に、自主企画ミーティングを実施。30人となった応援隊で“今後どう連携できるか、地域の課題や地域が求める支援は何か”について話し合った。

このミーティングは、5月29日と30日の2回に分け、メンバーを入れ替えて行われ、両日の内容はその後全員に共有され、様々な地域との連携活動が展開していく。



6月

- 6月5日、「平成25年度第1回地域活性化ミーティング」が釜石市で開催され、当協議会事務局から専門支援員が登壇し、いわて復興応援隊の活動について報告を行った。(主催:認定NPO法人ジャパン・プラネットフォーム、NPO法人いわて連携復興センター)
- 6月7日、専門支援員が岩手大学において、同大学地域コミュニティ再建支援班といわて復興応援隊の活動状況等の情報共有を行った。



7月

地域企業との連携で山田町と葛巻町をつなぐツアー実施

県北地域で活動する応援隊(野田村、洋野町、葛巻町、岩泉町)が4月から地域ミーティングを開始し、葛巻町の「森のこだま館(株)岩手くずまきワイン」と協働で地域交流イベントを企画。山田町配置の応援隊とも連携し、7月29日、山田町で被災された方々を対象に「くずまきワイナリー見学ツアー」を実施した。海の街「山田町」から高原の街「葛巻町」への交流企画は、運営側も参加者からも「とても楽しい時間を過ごせた」と好評を得た。



8月

平成25年度第1回いわて応援隊研修会を開催(盛岡地区合同庁舎)

応援隊2期生が着任し31名体制となってから初めて応援隊研修会を8月下旬の2日間、盛岡市内で実施。

1日目は、復興支援員や地域おこし協力隊などの制度設計や運営支援に関わってきた(公社)中越防災安全推進機構復興デザインセンター(当時)の稲垣文彦氏が「復興支援員の可能性」について講義を行い、隊員が地域の課題や隊員活動について発表した。2日目は、活動についての意見交換と稲垣氏による全体講評が行われた。また、総務省自治行政局自立応援課の馬場課長が会場を訪れ、応援隊と懇談し、被災地での活動に激励を送った。



9月・10月

現地復興推進会議に参加(大船渡市)

気仙地域で初めて、県の現地復興推進会議が開催され、知事や県の幹部職員が被災地入り。被災地に移住し復興支援に取り組む若者たちと共に住田町配置の応援隊も出席し、復興に関わる意見交換を行った。



三陸ジオパークが日本ジオパークに認定

9月24日、三陸ジオパーク(青森県八戸市から岩手県の沿岸を縦断して宮城県気仙沼市まで、南北約220 km、東西約80 km)が日本ジオパークに認定され、翌年(平成26年)5月から三陸ジオパーク推進協議会事務局への応援隊配置がスタートし、その後、多くの応援隊が三陸ジオパーク推進協議会事務局の運営、地域との連携、周知活動に大きく関わっていく。

いわて復興だより「未来のさんりくびと」で応援隊を紹介

岩手県復興局が定期発行している「いわて復興だより」の三陸の復興に取り組む若者を紹介するコーナー「未来のさんりくびと」に6人の応援隊が紹介記事が掲載された。

いわて復興だよりの応援隊掲載号

第47号(2013年9月1日発行)
若田謙一隊員/山田町配置

第49号(2013年10月1日発行)
町田恵太郎隊員/野田村配置

第52号(2013年11月15日発行)
池一恵隊員/久慈商工会議所配置

第67号(2014年7月15日発行)
松岡雄也隊員/
復興まちづくり大槌株式会社配置

第69号(2014年8月15日発行)
齊藤健祐隊員/
(一社)SAVE TAKATA 配置

第71号(2014年9月15日発行)
木村公介隊員/山田町社会福祉協議会・山田社協復興支援愛センター配置

地方自治体向け情報誌に紹介記事掲載

月刊ガバナンス10月号の復興支援員をテーマにした連載記事「被災地へのエール」で岩手・宮城・福島復興支援員に稲垣文彦氏が取材した記事が掲載された。

いわて復興応援隊は、山田町、野田村、陸前高田市、住田町に配置された隊員と当協議会事務局が取材を受けた。

※ 稲垣文彦氏: 中越越防災安全推進機構復興デザインセンター長(当時)

<p>山田町役場水産商工課 若田 謙一 (わかた けんいち) さん</p>	<p>野田村役場産業振興課 町田 恵太郎 (まちだ けいたろう) さん</p>	<p>久慈商工会議所 池一恵 (いけひとみ) さん</p>
<p>若田さんからのひと言: 町を越え、沿岸を越え、岩手を越え、つながりの中で新たなパワーを!</p>	<p>町田さんからのひと言: 地域として前進!!</p>	<p>池さんからのひと言: 岩手・久慈をまた来たい! と思える場所に。</p>

岩手県復興局発行「いわて復興だより」より

<p>復興まちづくり大槌株式会社 松岡 雄也 (まつおか ゆうや) さん</p>	<p>「一般社団法人 SAVE TAKATA」 齊藤 健祐 (さいとう けんすけ) さん</p>	<p>社会福祉法人 山田町社会福祉協議会 山田町社協復興支援愛センター 木村 公介 (きむら こうすけ) さん</p>
<p>松岡さんからのひと言: 大槌町の復興が少しづつ進む様子をぜひ見に来て下さい。</p>	<p>齊藤さんからのひと言: 地域内の高校生と、地域外の若者を対象にして、これからも、この気仙地域で活動していきたいです。</p>	<p>木村さんからのひと言: 笑顔を増やす!! ワクワク!! ドキドキする山田へ!!</p>

※ 「いわて復興だより」の2011年7月1日の創刊号から現在発行分まで、岩手県のwebサイトから閲覧可能。



街コン「いわてさんりく恋列車」開催

応援隊の提案からスタートし、隊員の受入先をはじめ、岩手県沿岸の NPO や企業、地域支援団体等の合同企画として開催となった地域活性イベント。三陸鉄道の貸し切り列車を利用し、盛駅から吉浜駅を往復して県内外の 20 以上の男女の出会いや交流の場を提供するほか、三陸鉄道沿線の魅力を発信し、地域経済やコミュニティ再生に狙いを置き、参加者とともに地域や運営側も一緒に楽しむイベントを目指した。

初回開催から高評価を受け、SNS やマスコミでも話題となり、開催数を重ねる中、ドラマ制作のモデルとなり、2016 年 2 月に NHK 地域ドラマ「恋の三陸列車コンで行こう！」として放映され、地元大船渡での NHK のドラマ撮影には、地域住民や恋列車関係者とともに応援隊もエキストラとして参加するなど、被災地に明るさと元気をもたらした応援隊自主活動の成果の一つである。



いわてさんりく恋列車
愛の機軸

恋し浜
KOISHIHAMA

平成25年10月13日(日)開催!
列車で街コン!?

【開催日時】10月13日(日)13:30~17:50
【会場】三陸鉄道貸切列車および恋し浜駅会場
※盛岡駅~吉浜駅で所定し、恋し浜駅~盛岡駅
【当日受付時間】12:30~13:20 ※要予約申込み
【当日受付場所】三陸鉄道 盛岡ふれあい待合室
(盛岡駅南口徒歩約10分)
【参加対象】20歳以上40歳未満の未婚の方
(要予約) (男女比2:8、女性20名)

◇お申し込み方法◇
メールにてお申し込みください。
koiressha2013@gmail.com
宛てに「お名前」「年齢」「性別」「ご住所」「電話番号(携帯)」「ご記入の上、送信してください!」
こちらのQRコードからも応募OK!
※開催費をメールにてお申し込みください。

11月



洋野エモーション開始(洋野町)

JR 八戸線で運行するレストラン列車「東北エモーション」の乗客に、沿線から大漁旗を振って歓迎する活動「洋野エモーション」を応援隊が地域住民と共に開始。

東日本大震災津波からの JR 八戸線早期復旧を願う地域住民の願いが後押しとなり、2012 年 3 月八戸線全線運転再開、多くの町民が旗を振って祝福。2013 年 10 月に東北エモーションの運行開始となり、応援隊が地域の取組として「洋野エモーション」をスタートさせた。

2023 年 11 年、洋野エモーションは 10 周年を迎え、洋野町広報紙に JR 八戸線の歩みとともに特集が掲載された。

平成 25 年度第 2 回いわて復興応援隊研修会(11 月 26 日・盛岡市(エスポワール))

2013 年 11 月 26 日開催の応援隊研修会では、前半、冬季の安全運転セミナーを実施(講師:インターリスク総研・宮川幸男氏)。応援隊の多くが首都圏や関東以南からの移住者であったこともあり、冬道運転の安全を図る目的で実施された。後半は、「業務も、必要な情報もばらばらな、いわて復興応援隊の中で、それぞれが抱える課題を共有し、共通の対策を分析し、具体的なアクションへとつなげていく」を目的に、応援隊企画のワークショップを行い、いくつかのテーマで、応援隊や事務局との間で議論し、今後の活動への展開を共に考えた。



12月

山田町第1回100円商店街開催

応援隊が商店街と連携し、地域を盛り上げ地域と一緒に楽しめるイベントを企画・開催。



愛媛県の中学・高校で講演

隊員が故郷・愛媛で中・高校生に三陸の復興について講演。

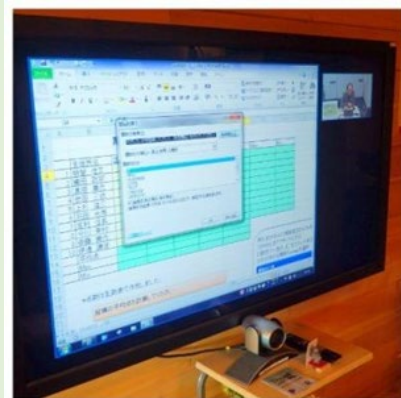
陸前高田復興マップの発行

一般社団法人 SAVE TAKATA が、震災後再開した商店や施設等を掲載した陸前高田市の街のマップを2012年4月から継続して発行してきたものを応援隊が担当を引き継ぎ、更新版を発行。



住田町でクリスマスイベント開催(12/22)

地域の子ども達のために廃校となった小学校で「アリスの不思議なクリスマス」を隊員が中心になって企画・開催。



女性就業支援・パソコン講座サポート

陸前高田市内のコワーキングスペースで行われたパソコン講座で講師アシスタントとして参加。前職の経験とスキルを活かして、女性就業を支援。



応急仮設住宅でクリスマスイベントの石けんづくり

大船渡市の山馬越仮設住宅集会所で、クリスマスイベントの石けん作りを実施。応援隊が仮設住宅の支援で行っている『はっぴいクラブ』の一環で実施した。

1月～3月

岩手県復興実施計画に参画

岩手県第2期復興実施計画に対する若者との意見交換会が県庁で開催され、住田町配置の隊員を含む10人の沿岸地域の若者が現場からの提言を行った。

**「復興実施計画（第2期）」に若者、女性の視点を！
～若者、女性との意見交換会が開催されました～**

岩手県は、東日本大震災津波からの本格復興を目指し、策定を進める「復興実施計画（第2期）」（平成26年度から平成28年度まで）について、若者や女性の意見を

参加した佐賀 敏子さん（山田町立山田南）は、「いわて復興だより」を、

恋するフォーチュンクッキー

「三鉄南リアスバージョン」が再生回数37万回超え！」

YouTubeの「AKB48公式チャンネル」で配信されていた岩手県・三陸鉄道南リアスバージョンの再生回数が、2014年2月時点で37万回を超え話題となる。この動画には、応援隊も多数参加し、三鉄全線開通の機運醸成に協力した。

いわて復興だより

第58号
(平成26年2月15日号)
岩手県

「恋するフォーチュンクッキー 岩手県・三陸鉄道南リアス線バージョン」の再生回数が37万回突破！

三陸鉄道、4月の全線運転再開に沿線市民らの機運高まる

災害ボランティアリーダー養成講座で講演

東日本大震災被災地で、ボランティア活動が抱える課題を考える講演会が群馬県庁で開催され、群馬県太田市出身の応援隊が「被災地から見た災害ボランティアと今後の復興支援」と題して講演。震災から現在のボランティアの活動の推移、現在の現地ニーズについて情報提供を行った。（毎日新聞の地方版にも掲載）

平成 25 年度復興支援員研修報告会参加(2月5日、6日)

東北自治総合研修センターにおいて、総務省主催の岩手・宮城・福島合同の復興支援員研修会が開催され、3県から 140 人を超える関係者が一堂に会し、ワークショップや懇親会で交流を図り、岩手県からは、いわて復興応援隊(陸前高田市配置)が事例発表を行った。3県とも次年度以降の開催を望んだが、残念ながら大規模な合同研修はこれが最初で最後となった。



1日目(公開)

【講演】稲垣文彦氏/「復興支援員の可能性と課題」

【報告】各県担当者、復興支援員から、事業運営・活動報告

《パネルディスカッション》

多様な担い手による地域復興の可能性/コーディネーター: 藤沢烈氏

2日目(非公開)

《分科会》

・マネジメント分科会、復興支援員分科会

《全体会》

分科会情報共有、講評

山田町の復興支援員制度導入を支援

山田町で復興支援員(3名)の募集を開始し、同町に配置している応援隊が全面サポート。(3/14 毎日新聞掲載)
同応援隊は、2014年5月末で退任し、同町の復興支援員をマネジメントする立場として活躍することとなる。

震災から3年を迎えた陸前高田市を伝える

3月11日を迎え、応援隊が今の陸前高田市を伝えた。「大切ないのちを一人でも多く守れるよう、後悔しないよう、備えをしつかりしてください。その為にも、震災があったことを忘れないでください。ここで見た景色、聴いた話を、忘れないでください。そして、ぜひまた来て、元気をわけていってください！ 今日で震災から3年です。追悼の想いととも、ぜひ、防災について考える日に。」



2014（平成26）年度

県内の主な出来事

- 三陸鉄道南リアス線(吉浜～釜石)運行再開で全線運行再開(4/5)
- 三陸鉄道北リアス線(小本～田野畑)運行再開で全線運行再開(4/6)
- 7月、普代浜(普代村)、荒神(山田町)、吉里吉里(大槌町)の海水浴場が4年ぶりに再開
- 12月、机浜番屋群(田野畑村)完成、震災からの復興・再建をとげる
- 鶉鳥神楽(普代村)が国の重要無形民俗文化財指定に内定(1/16)
- 県立高田高等学校(陸前高田市)の新校舎が完成(3/19)



いわて復興応援隊に新たに2名を任命

5月1日付けで、宮古市と陸前高田市に応援隊が着任

杉本伸一（三陸ジオパーク推進協議会事務局配置）

柿元恵美（NPO 法人陸前高田市支援連絡協議会 Aid TAKATA 配置）

三陸ジオパーク推進協議会事務局へは、2014年度以降2022年度まで10名の応援隊を配置し、他の応援隊も加え、同事務局の運営から地域との連携と三陸ジオパークの推進を全面的に支援することとなる。

また、Aid TAKATA へは、ラジオパーソナリティの経験豊富な人材を配置し、陸前高田市災害FMを通してコミュニティ支援を目指した。

2014年度の応援隊活動

地域おこし協力隊等の交流会や研修会に地域を超えて参加する機会が増え、県政懇談会(7月、12月)に出席し知事や地域の若者と意見交換をするなど復興支援員の存在が地域に認識され、応援隊の活動も広がりをを見せていく。

4月

三陸鉄道南リアス線、北リアス線全線運行開始

4月6日、北リアス線再開で沸く地域の様子を田野畑村と洋野町配置の隊員が取材し、それぞれ地域ブログや応援隊公式 SNS で伝えた。



隊員が地域の消防団に入団

4月1日、洋野町消防団本部ラッパ隊に、応援隊が入団し同日辞令が交付された。(4/4のデーリー東北に掲載)

5月

列車イベントを開催

昨年に続き、気仙地域で活動する応援隊が地域と連携し企画・運営する三陸鉄道イベント「☆ホタテに願いを☆いわてさんりく恋列車」を5月の連休に開催。

県立高校のIT支援

陸前高田市配置の隊員が、5月27日、岩手県立大船渡東高校情報処理科の授業の一環でWeb制作教室の講師をつとめ、地域のIT推進を支援した。



6月

いわて復興応援隊活動報告会開催(6月5日・盛岡市)

盛岡地域交流センター『マリオス』でいわて復興応援隊活動報告会を開催。12名の応援隊が、日頃の活動を通して感じたことや課題、地域に今必要な支援、これからの地域の在り方などを発表。

この他、釜石市の復興支援員(釜援隊)や二戸市、西和賀町の地域おこし協力隊の活動紹介も行われ、複数のマスコミ取材もあり、会場は大入りとなった。同報告会は、翌年から地域おこし協力隊との合同開催となり、その後は「地域づくり人材活動事例発表会」と形を変えて開催されていく。



7月

県政懇談会「がんばろう！岩手」意見交換会で応援隊が提言(7月8日・宮古市)

宮古地区合同庁舎で開催された県政懇談会に、田野畑村の NPO で活動する隊員が出席し、宮古地区で復興に取り組む企業や団体の代表者と共に知事や県関係者と意見交換を行った。隊員は、田野畑村の体験民泊等の受入れ状況や10月に再建となる机浜番屋群や地域の魅力を伝える活動への思いについて発言したほか「復興支援員として活動する中で、隊員同士の連携の機会が必要なことや、公務ということで様々な点で規制されると活動がし難い現状について改善が必要」と提言した。



その後、この提言が関係者に共有され、応援隊の自主的活動について改めて検討されることとなった。



参考:岩手県 HP<<県政懇談会「がんばろう！岩手」意見交換会(平成26年7月8日宮古地区)>>

地域住民を対象にした復興の現場見学会に参加(7月25日・陸前高田市)

岩手県主催の「復興の現場見学会」が陸前高田市で開催され、市民活動や自治会の支援に関わる応援隊も参加し、SNSで復興の様子を伝えた。



8月・9月

岩手大学被災地学修ワークショップで事例発表(8月5日・田野畑村)

田野畑村で開催された「岩手大学被災地学修ワークショップ(岩手大学地域と創る“いわて協創人材育成+地元定着”プロジェクト)」で、同村配置の応援隊が移住の決断と応援隊活動を通して感じる地域づくりについて発表。



陸前高田市高田町「うごく七夕祭り」に参加(8月7日)

前年は観覧参加だった応援隊(陸前高田市配置)が、山車制作からお囃子まで参加し当日の様子をレポート。



陸前高田復幸マップ冊子版から Web版へ

震災後、復興が進む陸前高田市内 8 地域を案内する「復幸マップ」の8月号が発行となった。同紙は、一般社団法人 SAVE TAKATA が発行する情報紙で、同法人に配置の応援隊が中心になり編集・発行を行った。

この8月号を最後に冊子版から Web 版へ変わり、後の「高田旅ナビアプリ」の誕生につながっていく。

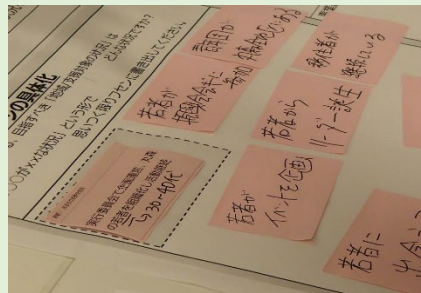


連絡会通信発行一周年

陸前高田市仮設住宅連絡会が発行する「連絡会通信」13号が発行となり、同通信の発行一周年を迎えた。陸前高田市内で進む、災害公営住宅建設予定地の定点観測(写真撮影)や「陸前高田まちづくり情報館」の案内など、市内の復興状況を解りやすく紹介。取材・編集・発行と応援隊が支援しており、復興の経過を記録した資料でもあった。

宮城県主催の復興支援員・地域おこし協力隊活動中間報告会に参加(9月2日)

仙台市(TKP ガーデンシティ仙台勾当台)で開催された宮城県主催「平成 26 年度復興支援員・地域おこし協力隊活動中間報告会」が開催され、参集 170 人の中に応援隊と専門支援員6名も参加。地域の課題、活動の悩みに共通することが多く、つながりが出来たことで、その後幅広い交流が生まれるきっかけともなった。



三陸チャンネル(YouTube)に応援隊が登場

岩手県北広域振興局の公式 YouTube「三陸チャンネル」に野田村、九戸村で活動する応援隊が登場し「北三陸を復興応援隊が行く。」をテーマに地域の特産等を紹介。



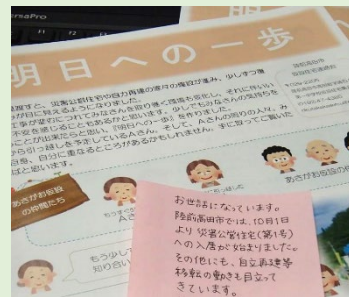
三陸チャンネル⇒



10月

住民へのメッセージ「明日への一步」を発行

10月1日、陸前高田市では、災害公営住宅への入居が開始となり、自主再建による住民の移転の動きも進み始めてきた。応急仮設住宅の自治会サポートを行っていた陸前高田市仮設住宅連絡会の支援員たちと応援隊が、復興とともに変わりゆく時間の中で様々な不安を感じている住民に向けたメッセージをまとめた「明日への一步」を発行。



JICA特別研修で応援隊が活動発表(10月20日)

観光振興政策策定・実施に携わる海外からの研修員(JICA 研修)8名が来県し、応援隊3名が岩手県庁で県の観光政策と被災地の観光振興等に関わるいわて復興応援隊の活動について発表し、通訳を交えて、和やかに交流した。



11月

第2回いわて復興応援隊活動報告会 (11月25日、平成26年度地域コミュニティ活性化セミナー併催)



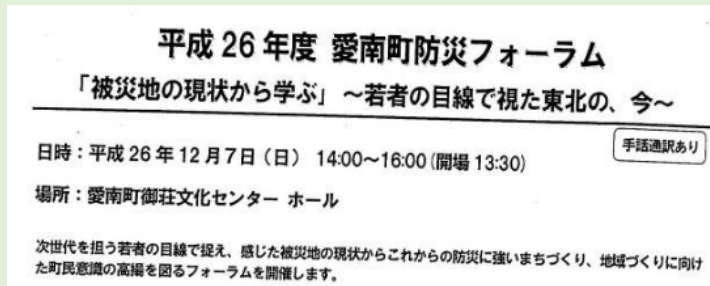
盛岡市(サンセール盛岡)で岩手県主催「地域コミュニティ活性化セミナー」との併催により、平成26年度第2回いわて復興応援隊活動報告会が開催され、復興支援員や地域おこし協力隊、まちづくり団体など100名を超す関係者が参加した。

総務省地域力創造アドバイザー五十嵐経氏による秋田県大館市釈迦内サンフラワープロジェクトの活動紹介や北上市のNP Oから活動事例発表の後、県内の地域おこし協力隊・復興支援員の活動紹介、いわて復興応援隊13名が分野ごとに活動報告を行った。全体の司会進行は、この年5月に着任し、陸前高田市災害FM運営団体で活動する応援隊が務めた。

12月

愛媛県愛南町「防災フォーラム～被災地の現状から学ぶ」に参加(12月7日)

町ぐるみで防災に取り組む愛南町の防災フォーラムに、発表者として招待された岩手県関係者に応援隊が同行。登壇者の元応援隊(愛媛県出身)をはじめ、愛媛県関係者と交流を深めた。



県政懇談会(久慈地区開催)に応援隊が参加(12月12日・久慈市)

県政懇談会「がんばろう！岩手(久慈市)」に応援隊(洋野町、野田村配置)が参加。

机番番屋群が復活(田野畑村)

東日本大震災津波により全壊した田野畑村の漁師のなりわいの場「机番番屋群」が完成。同所を運営するNPO法人体験村・たのはたネットワーク配置の応援隊も、活動の拠点を北山崎ビジターセンターから同所に移し、サップ船など体験型ツアーや教育旅行の受入を支援。



1月



若者・女性の活躍と支援に関する意見交換会に参加(1月8日)

岩手県公会堂(盛岡市)で開催された「若者・女性の活躍と支援に関する意見交換会」に応援隊(大船渡市配置)が参加。応援隊として岩手に移住した体験から“若者の定住に必要なこと”について「医療体制が整っていること」と意見を述べた。

いわて三陸復興フォーラム報告会登壇(1月16日)

岩手県公会堂で開催された岩手県主催「いわて三陸復興フォーラム」の第4報告会(つながりの力による復興)で、応援隊が配置先(NPO法人陸前たがだ八起プロジェクト)の取組について事例発表を行った。

【全体会】1月15日・アイーナ(盛岡市)

【報告会】1月16日・盛岡市内及び大船渡地区合同庁舎



2月

葛巻町・岩泉町・野田村の特産品パック販促支援

各地域に配置され、活動する応援隊の連携により始まり、自治体単位ではなく広くつながって地域を盛り上げようと企画。地域の企業(岩手くずまきワイン(葛巻町)、岩泉産業開発(岩泉町)、道の駅のだ観光物産館ぱあぶる(野田村))に提案し3町村の特産品をセットにした「塩の道&くずまきワイン頒布会」の実施につなげた。



宮城県復興支援員・地域おこし協力隊活動年度末報告会に参加(2月5日・仙台市)

宮城県内で活動する隊員の活動報告、分科会(事業終了後に向けた地域の取組、定住するための将来ビジョンの共有)と全体会。聴講参加のいわて復興応援隊も、主催側の好意で分科会に「岩手グループ」として飛び入りで参加し、全体会で発表も行うなど、宮城県の隊員や関係者と復興支援、地域支援の課題共有や交流を図ることができた。

【主催】宮城県 【企画・運営】せんだい・みやぎ NPO センター、みやぎ連携復興センター



一関市大東町の「大原水かけ祭り」に参加(2月11日)

陸前高田市のNPOで仮設住宅入居者支援等を行っている応援隊が、江戸時代からつく天下の奇祭ともいわれる、「一関市・大東大原水かけ祭り」に参戦。厳冬の街中を腹にさらしをまいた参加者達と駆け抜け、沿道から容赦なく冷水を浴びせられながら、陸前高田の早期の復興を祈願した。

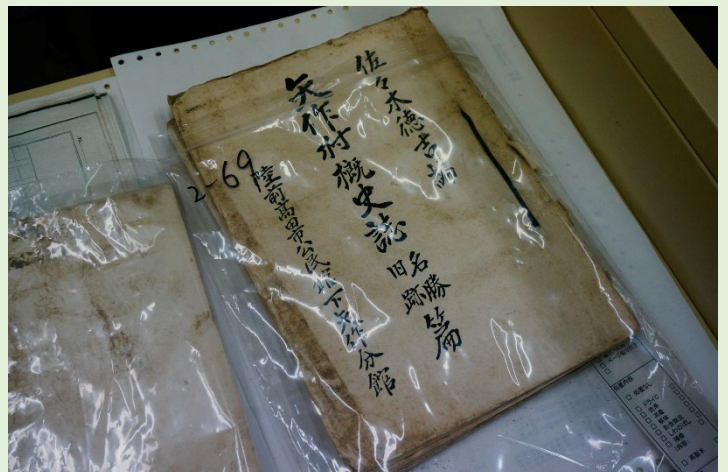
大東大原水かけ祭り

1657年明暦の大火をきっかけに火防祈願・無病息災を願い始まったとされる祭り。2017年岩手県無形民俗文化財に指定。

大津波からよみがえった郷土の宝(東京都立中央図書館)の取材

東日本大震災により被災した陸前高田市立図書館の郷土資料等の蔵書を、東京都立中央図書館が受け入れ、第一次受け入れ分の修理が完了し、同市へ返還前に展示会を企画。この展示を応援隊が帰省の際に取材した。

応援隊の投稿より 被災資料は解体、ドライクリーニング、消毒、洗浄、補修、再製本など多くの工程を経て修復されます。何十ページとある資料を1枚1枚、キレイにしていく作業は、地道でとても根気がいる作業です。展示会場を案内して下さった、資料保全専門員である眞野節雄さんが「これらの書物はなにか…亡くなった図書館職員の大げな形見のように思うのです。私たちは被災地へ行って復興支援をすることはできませんが、本の修復作業は私たちにしかできない支援です」と話されていたのがとても印象的でした。



備考)東京都立中央図書館で修復を終えた第一次受け入れ資料は、2015年3月に陸前高田市に返還された。

2015（平成27）年度

県内の主な出来事

- 再建された小袖海女センター（久慈市）がオープン（4/26）
- 釜石市の橋野鉄鉱山を含む「明治日本の産業革命遺産」世界遺産に登録（7/8）
- 県内で初めて、大船渡市の仮設商店街が本設移転オープン（7/12）
- 岩手県知事選挙（8/20無投票）、岩手県議会議員選挙（9/6投票）
- 小本津波防災センターが完成し、岩泉小本駅と一体化となる（12/23）



いわて復興応援隊に新たに6名を任命



三陸ジオパーク推進協議会事務局（4/1）

関 博充、熊谷 誠、船越 麻知子

三陸総合振興準備室（5/1）

千田 里佳

陸前高田まちづくり協働センター（6/1）

山本 健太

三陸ジオパーク推進協議会事務局（2016/2/1）

林 ちはる

2015 年度の活動

東日本大震災津波発災から4年目となり、被災した沿岸の観光施設のオープンや本設の商店が増え始め、7月には、橋野鉄山鉄鉱山（釜石市）が「明治日本の産業革命遺産」の一つとして世界遺産となるなど、沿岸に少しずつ活気が見えてきた。

新規採用者6名が加わり、三陸ジオパークの推進など復興のフェーズに合わせた分野にも活動を広げていくこととなった。隊員の自主企画として地域と連携して実施してきた「いわてさんりく恋列車」をモデルに、NHKがドラマ化した「恋の三陸列車コンで行こう！」が2016年2月に放映されるなど、地域の中で活動する応援隊の活動成果の一つとなった。

陸前高田市においては、応援隊やその配置先を含め復興支援に関わるNPOが協働で、首都圏において被災地の情報発信を行うなど、地域と共に歩む復興支援員の活躍が著しくなってきた。

また、当初の「復興支援員任期5年」を前に任期終了後の活動を考える機会が増えるとともに、隊員の被災地支援の取り組みや復興支援員等の活動の課題がメディアに取り上げられることも多くなった。

4月

ニコニコ超会議 2015 に応援隊出演（4月26日）

千葉県幕張メッセで開催された「ニコニコ超会議 2015」会場から生配信された「いわて希望チャンネル」に応援隊（洋野町、野田村、田野畑村配置）が出演し、岩手県ブースから岩手の魅力をPRした。岩手県公式 YouTube「いわて希望チャンネル」でも公開。



[いわて希望チャンネル\(アーカイブ\) ➡](#)



復活！机浜番屋群お披露目体験会（4月23日）

前年12月に復旧した机浜番屋群（田野畑村）で5月の連休から観光客受入が始まる前に県観光関係者を招きお披露目体験会を開催。

番屋管理者の NPO 法人体験村・たのはたネットワークで活動する応援隊からの呼びかけで、田野畑村産業開発公社配置の応援隊が参加。新しい体験メニュー「塩づくり番屋」での塩づくりと震災前から人気の「サッパ船ツアー」を体験取材。



5月

県政懇談会「がんばろう！岩手」に出席(5月19日)

「若者や女性による復興や復興支援等の取組」をテーマに宮古地区合同庁舎で開催された県政懇談会で、応援隊(田野畑村産業開発公社配置)が、観光分野における生業の創出と復興支援に関わる若者の定住、復興支援員任期後のフォロー体制について意見を述べた。

参考:岩手県 web サイト<県政懇談会「がんばろう！岩手」意見交換会(平成17年5月19日宮古地区)>



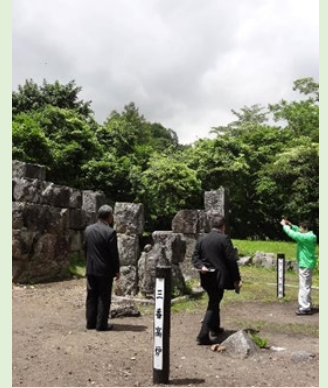
6月

世界遺産登録勧告を受けた橋野高炉跡を紹介

2015年5月にイコモス(国際記念物遺跡会議)が、橋野鉄鉱山を含む「明治日本の産業革命遺産」を世界遺産一覧表への記載が適当と勧告。勧告から一か月で6,000人が訪れたと報道された橋野高炉跡を訪ね、現地ガイドの案内を受けた様子をSNSで紹介。

橋野鉄鉱山(世界文化遺産)

ドイツ・ボンで開催された「第39回世界遺産委員会」において、橋野鉄鉱山を含む『明治日本の産業革命遺産 製鉄・製鋼、造船、石炭産業』の世界遺産一覧表への記載が同年7月5日に決定された。



7月

陸前高田 NPO キャラバン in 東京開催支援(7月11日)

陸前高田市内で復興・まちづくりに取り組むNPO11団体による「陸前高田 NPO キャラバン in 東京」が立教大学池袋キャンパスを会場に開催され、複数の応援隊が受入団体とともに登壇者や運営スタッフとして参加。

戸羽太陸前高田市長(当時)の基調講演に続き、「これからの4年、NPOは他のアクターとどう連携していくか」をテーマに戸羽市長とNPOがディスカッションを行った。また、「地域コミュニティ」と「リピーター・ファンの獲得」について、現場のNPOから報告があり一般参加者とともに被災地の現状と課題を共有し、今後のまちづくりはどうあるべきか NPOと行政それぞれの視点から活発な意見交換を行った。

■主催:陸前高田NPOキャラバンin東京実行委員会、共催:陸前高田市、協力:立教大学

■日時:2015年7月11日 13時~17時30分、会場:立教大学池袋キャンパス9号館(大教室)

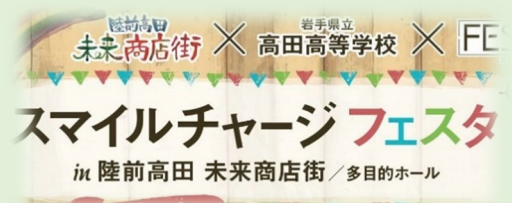
■シンポジウムには、いわて復興応援隊((一社)SAVE TAKATA 配置)の齊藤健祐隊員をはじめ、応援隊受入関係者など5人が登壇し「地域コミュニティ」「リピーター・ファンの獲得」について議論した。



「スマイルチャージフェスタ in 陸前高田未来商店街」開催支援(7月17日~19日)

岩手県「いわて三陸 復興のかけ橋事業」の一環で「平成26年度第1回沿岸交流会 in 盛岡」で出会った県内企業、地元事業者の連携で企画されたイベントが、7月17日から19日までの3日間開催された。

2015年6月から活動開始した応援隊(陸前高田まちづくり協働センター配置)が陸前高田市の仮設商店街を支援する中での企画が実現したもので、被災地で復興を目指す商店街「陸前高田未来商店街」に盛岡駅ビルの人気ショップの出店や、高田高校の美術部と書道部の生徒がデザインを手がけたオリジナルTシャツの展示会と人気投票コンテストの開催、地元のゆるキャラ「たかたのゆめちゃん」が登場するなど街の賑わいを創出する取組みの一つとなった。



平成27年度第1回いわて復興応援隊活動報告会開催(7月22日)

第1回いわて復興応援隊研修会と岩手県地域活性化セミナーとの併催で盛岡地域交流センター「マリオス」を会場に開催。

前半は、黒沢惟人氏(NPO 法人 wiz 理事)の講演「定住交流の取組について」と、県内の復興支援員、地域おこし協力隊の活動発表が行われた。

後半は、参加者全員が5つのテーマ毎のグループでワークショップを行い、それぞれの活動に対する思いや課題等について共有した。

復興支援員・地域おこし協力隊の他、県・市町村の担当職員や隊員受入れ等の関係者も参加し、熱い議論が飛び交う交流の場となった。



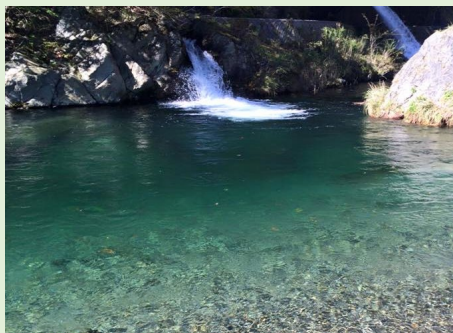
10月

いわて復興応援隊1期生が任期4年目を迎える

2012年10月から応援隊1期生として活動してきた応援隊9名が任期4年目を迎えた。既に同期の応援隊5人が新しい道に進んでおり、任期終了を見据えた活動を意識する年となる。

住田町の魅力を発信

10月から住田町観光協会に活動場所を移し、地域の魅力発信を支援を開始した応援隊が、住田の秋をSNSで紹介。同じ配置先の応援隊仲間と住田町観光PRキャラクターの「すみっこ」と共に住田町から気仙地域の復興支援に貢献していく。



いわてさんりく恋列車(第3回)開催(10月17日)

応援隊と応援隊配置先団体、地域企業、自治体等との連携で共同企画したイベント「いわてさんりく恋列車」開催。地域経済の活性化、観光資源の活用、交流人口の拡大、若者によるコミュニティ再生によるまちづくりを目的に隊員が中心となって企画・運営し3回目を迎えた。

翌2016年2月放送となるNHK特集ドラマ「恋の三陸列車コンで行こう!」の監督及びディレクターが実際に参加し、同イベントがどのような流れで実施されるか綿密に取材している。



地域おこし協力隊全国サミットinひょうご (11月28日、29日)

兵庫県神戸市において総務省主催「第2回地域おこし協力隊全国サミット」が開催され、協力隊や自治体関係者など約800名が参加。いわて復興応援隊及び当協議会事務局からも8名が参加した。

1日目は、主会場の神戸ポートピアホールで全国の協力隊の活動発表やパネルディスカッションが行われ、2日目は兵庫県内(篠山市、丹波市、南あわじ市、朝来市)の協力隊活動地域で分科会が開催され、参加者との交流を図った。



総務副大臣から激励(12月17日)

陸前高田市コミュニティセンターにおいて、視察中の総務省副大臣から同市を拠点に活動する応援隊6名が激励を受けた。

住田町上有住「新そば収穫祭」

12月の暮れに住田町上有住(かみありす)坂本集落で行われた「新そば収穫祭」に隊員が参加し、初めてのそば打ち体験など地域の食と伝統について紹介。



応援隊コメント(Facebookより)

地域のみなさんが地元の風景や伝統・文化を「宝」と認識していて、大切に守り残そうとしている。しかし、集落の住民が高齢化しているため受け継ぐ人がいないという危惧も同時に抱えていらっしゃるのでは。

1月・2月



黒森神楽(くろもりかぐら)と小正月

田野畑村机(つくえ)地区の小正月飾り「みずき団子」と同地区に巡行した「黒森神楽(宮古市の黒森神社に伝わる民族芸能・国の重要無形民俗文化財)」について紹介。

NHK特集ドラマ「恋の三鉄列車コンで行こう！」放送

2013年10月から応援隊が三陸鉄道をはじめ地域と連携して企画した「いわてさんりく恋列車」がモデルとなった、NHK特集ドラマが2016年2月から3月にわたり放送された。2015年12月に大船渡市で行われた撮影には、応援隊が婚活パーティー参加者などのエキストラで参加し、地元の新聞でも紹介された。

- 第1回放送「再会」2016年2月27日
- 第2回放送「告白」2016年3月5日
- 第3回放送「旅立ち」2016年3月12日

応援隊 Facebook より

「舞台は、岩手県西大船渡市(大船渡市ではなく)、主人公役の松下奈緒さんを中心に松坂慶子さん、村上弘明さん、安藤政信さん、南海キャンディーズのしずちゃんなど豪華キャストで繰り広げられる恋愛コメディです。私もちゃっかり(とりあえずオファーがあったので)いわて復興応援隊代表としてエキストラで参加しています。」



平成27年度復興支援員・地域おこし協力隊合同報告会開催(2月15日)

盛岡地域交流センター「マリオス」を会場に、県内復興支援員と地域おこし協力隊の合同報告会を開催。

午前中は、ゲストアドバイザーの稲垣文彦氏(公益社団法人 中越防災安全推進機構)が、新潟中越地震の事例から東日本大震災被災地域への人的支援の在り方について講演し「地域はどうなりたいのか?住民達はどうなりたいのか?」住民に寄り添い時間をかけて共に考える必要性を説いた。

午後は、県内で活動する応援隊をはじめ復興支援員、地域おこし協力隊が活動報告を行い、それぞれの発表の後に会場からの質問や稲垣氏からアドバイスを受けた。



平成 27 年度第 2 回いわて復興応援隊研修会実施(2月16日)

2月15日の合同報告会の翌日、当該年度第2回の応援隊研修会を実施。午前中は、県の3人の講師から「復興状況」「県の取組事例」「産学官の連携」について講義を受けた。

- ① 復興の現状と今後の計画(県復興局復興推進課)
- ② 三陸総合振興準備室の取組(県政策地域部三陸総合振興準備室)
- ③ 岩手県の産学官による地域創生の取組(県政策地域部地域振興室)



《会場》盛岡地域交流センター「マリオス」

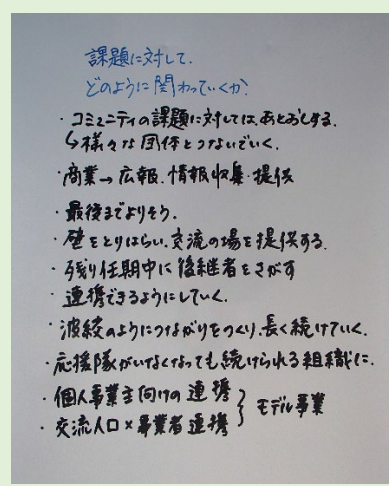
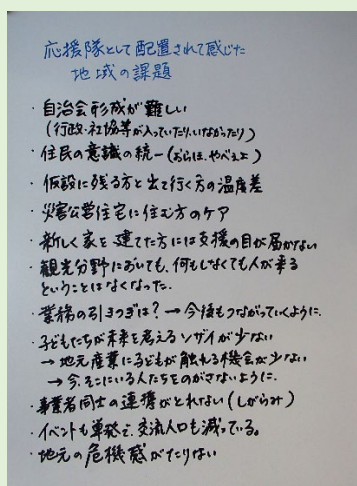
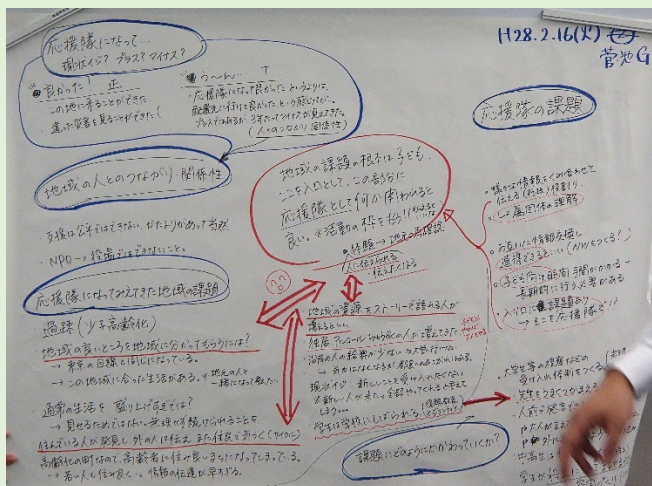
午後の前半は、稲垣文彦氏(公益社団法人中越防災安全推進機構)のコーディネートで、隊員5名と当会事務局長によるパネルディスカッションを3つの項目について行った。

地域の復興に向けた温度差、住民の危機意識の希薄さ、新しいコミュニティ形成の難しさなど課題が山積する中、隊員がどこまで寄り添うことが出来るか、任期期間中にどこまでつなげることが出来るか、それぞれの立場から模索する現状、まだこれからできること、目指す方向について討論が行われた。

- ① 応援隊として感じた地域の課題
- ② 課題に対してどのように関わっていくか
- ③ 応援隊の課題・目指すところ



後半は、パネルディスカッションで出された意見をもとに、活動分野で3つのグループに分かれ、多様な議論を展開。研修の総括として、稲垣氏から「復興支援員の1期生としてこれまで苦労した活動の中に次に続く隊員達のノウハウがあり、これを次へ活かさないまま終わることのないよう一緒にがんばっていこう」と隊員に向けエールが贈られた。



3月

応援隊勉強会「写真実技講習」(3月23日)

三陸鉄道配置でプロカメラマンでもある応援隊を講師に、情報発信のスキルアップを目的に隊員同士の自主勉強会を陸前高田市で実施し、より効果的なカメラ撮影のテクニックを学んだ。

応援隊 Facebook より

「日々の業務において写真を撮る機会が多く、写真のクオリティーアップを目指す隊員向けに、プロカメラマンでもある小石川隊員より写真講座を開催して頂きました。イベントでの人物の撮影、商品・料理等の撮影、風景の撮影など、目的にあわせたカメラの使い方や構図の決め方など、個々の疑問を解決する写真講習会でした。」



ふじのくに三陸復興応援フォーラムに参加(静岡市)

3月26日、静岡市で開催された「東日本大震災5年の集い・ふじのくに三陸復興応援フォーラム」に、地元出身の応援隊が参加。

約400人を超える参加者に向け、被災支援に取り組む岩手県内のNPOからのメッセージ、岩手県の遠野市、大槌町、釜石市、陸前高田市のリーダーが語る記念シンポジウムが行われた。

主催：東日本大震災5年の集い実行委員会
後援：静岡県、静岡県教育委員会、
岩手県、いわて定住・交流促進連絡協議会
会場：静岡県勤労者総合会館(静岡市)



うれいら商店街のっとり計画(岩泉町)

岩泉町配置の応援隊と同町中心商店街の若者達が、商店街の活性化を目的に行う企画。若者の自由な発想で、親世代に挑戦する新しい活動は、行政やマスコミでも紹介され、岩泉の魅力を県内外に発信する大きな流れにとなった。

応援隊 Facebook 投稿より

岩泉町の龍泉洞の近くにある「うれいら商店街」にて「うれいら商店街のっとり計画」というのを開催しています。各店の子供世代(次世代)が、「親(店主)の経営方針の制約を受けずに『本当はこれが売りたいんだこの野郎』というものをつないしー区画プロデュースすることで各店を乗っ取る、という企画です。



2016（平成28）年度

県内の主な出来事

- 久慈地下水族科学館「もぐらんぴあ(久慈市)」営業再開(4/23)
- 盛岡市にいわて内陸避難者支援センター開所(5/20)
- 県内最大規模の県営災害公営住宅柗ヶ沢アパート(陸前高田市)の入居開始(8/1)
- 台風10号が岩手県に上陸(8/30)
- 県立山田病院(山田町)が再建し診療をスタート(9/1)
- 三陸鉄道北リアス線新駅「十府ヶ浦海岸駅(野田村)」開業(3/25)



総務省の復興支援員推進要綱の一部改正

2016年6月、総務省の復興支援員推進要綱が一部改正され、これまで最長5年としていた復興支援員の活動期間が「東日本大震災復興特別会計の設置期間中」に延長となった。

いわて復興応援隊1期生(2012年10月採用)の任期は1年を残すところとなり、6月に国から復興支援員の制度上の活動期間延長が通知されたが、当県においては、沿岸市町村等への応援隊配置は、当初の予定通り任期5年で終了することが示された。1期生に限らず新たな道を模索し、任期満了を待たずに退任する隊員や配置換えを希望する隊員が徐々に増えていった。

応援隊の活動が地域で認識され、配置先の事業等を通し成果が認識されるようになり、外部人材としての応援隊と復興支援活動の紹介と併せてマスコミ等で多く紹介された。

- | | | |
|-------|---|---------|
| 4/29 | 岩手日報「ここで輝く・自然と一緒に暮らす環境は都会にない魅力」 | 田野畑村配置 |
| 5/30 | 岩手日報「三陸人紀行・基石海岸インフォメーションセンターとみちのく潮風トレイルの取組」 | 大船渡市配置 |
| 7/14 | 岩手めんこいテレビ「輝け！復興の槌音・高田旅ナビアプリの紹介」 | 陸前高田市配置 |
| 7/21 | 岩手めんこいテレビ「輝け！復興の槌音・荒海団(荒海ホタテ)の取組」 | 野田村配置 |
| 9/30 | 岩手日報「ここで輝く・周囲のおかげで自分は生かされている」 | 洋野町配置 |
| 11/29 | 岩手日報「ここで輝く・地域をつなぐ潤滑油でありたい」 | 野田村配置 |
- (2016年度一例)

いわて復興応援隊を新たに1名任命

5月15日付けで、三陸ジオパーク推進協議会事務局に隊員1名(佐藤凌太)を配置し、2016年度は、隊員28名の体制でのスタートとなった。

また、4月に公益財団法人さんりく基金内に「三陸DMOセンター」が設置されたことから、三陸総合振興準備室に配置の応援隊はDMOの推進にも関わることとなる。

※ 2021年3月、(公財)さんりく基金(三陸DMOセンター)は、観光地域づくり法人(DMO)として登録される。



5月

世界お茶まつり2016 春の祭典に出展支援(5月13日～15日)

静岡県富士山静岡空港等を会場に開催された世界お茶祭り2016春の祭典で、応援隊が九戸村特産“あま茶”のPR支援。

東日本大震災による風評被害を乗り越え、甘茶の知名度を上げ、販路拡大、新商品開発に向け、県内外の各地を訪れ、地域とともに応援隊が支援した。復興支援員や地域おこし協力隊の報告会等でも会場に甘茶の試飲コーナーを設置するなど、どこに行くにもPRを欠かさなかった。

甘茶(あまちゃ)

アジサイ科の落葉低木アマチャの若葉を茶にしたもの。九戸村は国内有数の産地で、農薬や化学肥料を使用せず栽培されている。



市民・コミュニティのエンパワーメントプログラム事業「大人の遠足2016年5月便(一関市)」を支援

NPO 法人陸前たがだ八起プロジェクトが実施する“大人の遠足”は、復興が進む被災地で仮設住宅、復興公営住宅、自立再建による移転などに伴う、新しいコミュニティを支える活動の一つで、同法人配置の応援隊が中心となって支援。

同事業は、陸前高田市まちづくりプラットホーム Web サイトの2016年6月24日の記事でも紹介されている。

6月

地方創成・観光地域づくりセミナー in 久慈開催支援(6月1日)

地方創生の実現に向け、魅力ある観光地域づくりの推進役として期待される「日本版DMO」について理解を深めることを目的に、久慈市で開催され、応援隊も周知から当日の運営まで支援するとともに、DMOによる地域経営と観光マーケティングについて学んだ。

- 宮城県主催「ミーティング・ファシリテーション研修～参加者同士でつくりあげる場を目指して」に参加(南三陸町)
- 長野県茅野市における野生鳥獣肉活用の取組を応援隊が視察
- 応援隊(野田村配置)と野田村の復興支援員(のだむら復興応援隊)の共同企画ダンスイベント「ねま～るdeオド～ル」の様子をのだむら復興応援隊のSNSで紹介。
- 東日本大震災はじめ被災地の災害(復興)公営住宅のこれからを考えるシンポジウム参加(仙台市)



7月

岩手めんこいテレビ「響け！復興の槌音」で応援隊が支援する取り組みを紹介

【7月14日放送】

陸前高田市の「高田旅ナビアプリ」が取り上げられ、アプリ開発に取組む応援隊(SAVE TAKATA 配置)が同アプリを紹介した。

【7月21日放送】

応援隊(野田村配置)と『岩手 野田村 荒海団(あらうみだん)』※との取組みが紹介された。「荒海ホタテ」の魅力を野田村から発信し、首都圏を中心に販促支援、生産者、飲食店関係者、消費者との交流支援を積極的に行っていた。

※ 野田村の「荒海団プロジェクト」で地元漁師らにより結成された団体

- NHK朝ドラ「マッサン」応援推進協議会の活動を視察(北海道札幌市、余市町)
- ドリンクジャパン展示会「あま茶」出展支援(東京ビックサイト)
- 大船渡市基石海岸キャンプ場利用促進キャラバン隊支援(岩手県及び宮城県内)
- 東北ジオパークフォーラム参加(秋田県八峰町)
- ジオパーク新潟国際フォーラム参加(新潟県新潟市)



いわてで暮らそう！
シンポジウム

平成 28 年
8月8日
14:00～17:00

人口減少社会に立ち向かうため、都会から岩手へ、人の流れを創り出す「ふるさといわて」を考えるシンポジウムです。ぜひ、ふるってご参加ください！

開催内容

- 開会 「ふるさと回帰の現状について」(※) ふるさと回帰、UIターン促進の取り組みについて
- 基調講演 「ふるさと回帰の現状について」(※) 認定NPO法人ふるさと回帰支援センター 代表理事 高橋 公氏
- 事例紹介 「地域創成や団体の主体となった移住促進の取組について」(※) 長野県大田市定住促進アドバイザー 前川 浩一氏
- UIターン促進の実践者へ聞く！

定住・交流に興味のある方、地域づくり団体、行政職員などどなたでもご参加いただけます。

会場 ホテルルイズ 3階 万葉の間 8月4日(木)17時

※ 定員は100名です。申し込みは先着順です。申し込みは8月4日(木)17時までにお願いします。

お問い合わせ先：岩手県盛岡市盛岡駅前通1-1-1 ホテルルイズ 3階 万葉の間 電話：019-629-5194

主催：岩手県、いわて県民・交流促進連絡協議会 後援：NKS(岩手ネットワークシステム)

県主催シンポジウムのフライヤーを作成(周知支援)

県、いわて定住・交流促進連絡協議会主催の「いわてで暮らそう！シンポジウム」のフライヤーを応援隊(陸前高田まちづくり協働センター配置)が作成し開催周知を支援。

当日は、応援隊をはじめ、県内の地域おこし協力隊、自治体職員、地域づくり団体等約100人が参加し、岩手のUIターンについて活発な討論が繰り広げられた。

開催日：2016年8月8日、会場：盛岡市・ホテルルイズ

基調講演：「ふるさと回帰運動のこれまでとこれからを語る」

認定NPO法人ふるさと回帰支援センター代表理事 高橋 公氏

事例紹介：「住民による町づくりと定住促進・地域づくりとコミュニティ・スクール・移住」

長野県大田市定住促進アドバイザー 前川 浩一氏

トークセッション：「UIターン促進の実践者に聞く！」

牛崎 志緒氏(ジョブカフェいわて)、小山 貴史氏(一関市まちづくり推進部)、

黒沢 惟人氏(NPO法人Wiz)、永井 尚子氏(元二戸市地域おこし協力隊)

「地域活性化セミナー-in 住田」開催(7月25日 復興支援員・地域おこし協力隊研修併催)

県といわて定住・交流促進連絡協議会の共催で、地域づくりの担い手の先進事例を紹介するセミナーと県内の復興支援員及び地域おこし協力隊の活動を紹介する研修会を併せて、住田町役場町民ホールを会場に開催。

元いわて復興応援隊で一般社団法人 SUMICA 副代表の佐々木敦代氏が「地域住民と外部人材との協働による地域づくり」と題して講演。隊員の活動発表は、大槌町・陸前高田市配置の応援隊と遠野市と一関市の協力隊が行い、応援隊受入団体でもある陸前高田市の一般社団法人 SAVE TAKATA 代表の佐々木信秋氏が「若興人家プロジェクト」の取組を紹介した。セミナー終了後は、古民家(町屋)を保存改修した住田町住民交流拠点施設「まち家世田米駅」で施設見学とお茶を飲みながらの情報交換会を行い、多くのセミナー参加者や関係者が和やかに交流をはかった。



平成 28 年度第 1 回いわて復興応援隊研修会(7月26日)

前日の地域活性化セミナーに続き、応援隊研修会を開催。午前中は、大船渡市及び陸前高田市において、同地域で活動する隊員が案内役となり、復興状況の現地視察を行った。

午後は、陸前高田市コミュニティホールを会場に、県や隊員受入団体代表の皆さんから気仙地域の地域振興とコミュニティ支援についての講義を受け、その後、隊員によるワークショップを行い、それぞれの活動を通しての支援の在り方を考えた。



8月

「平成28年台風第10号」が岩手県に上陸

8月30日夕方、大船渡市付近に上陸した台風10号は、宮古市から久慈市に猛烈な雨を降らせ、岩泉町では、小本川が氾濫し川沿いにあった高齢者施設の入居者9人が犠牲になるなど、東北地方から北海道地方にかけて広い範囲で河川の氾濫、住宅被害や孤立地域の発生など大きな傷跡を残した。

久慈市では、県外へ帰省中の隊員の自宅アパートと業務用車両が水没したため、帰省先から戻った隊員と合流した当協議会事務局職員と沿岸南部の隊員達が現地に入り、被災した隊員のアパートの泥だしや家具の洗浄を行った。また、応援隊は作業後、地元のボランティアセンターへ活動地域から預かった支援物資を届けている。応援隊員配置先である久慈商工会議所も被災したが、隊員アパートの廃棄物処理や当面の宿泊先の提供など寄り添った支援を頂いた。

久慈市配置隊員のコメント

(応援隊 Facebook より一部抜粋)

「すごく便利で快適だった我が家も中心市街地であり、久慈川の目の前にあったので、床上浸水されてしまいました。家は1mちょっと水に浸かり、公用車も水没。何より悔しいのはやっぱり、思い出のものが全部なくなったことです。割り切ろう！と思ってもやっぱり切れないものは切れない！家の片付けや泥かきは、本当にありがたいことに応援隊の仲間や県庁の方、職場の方のお陰で迅速に片付けました。1人じゃなんにも出来てないし、呆然としてたから本当に感謝しかないです。この場を借りて、みんなにありがとうございます！本当に本当に1人だとなにもできなくて、みんながいてくれて良かったです」



9月・10月

- 県工業技術センター及び盛岡スコール高等学校との連携でイワテヤマナシの加工商品開発(九戸村)
- アルゼンチン出身の写真家アレハンドロ・チャスキエルベルグ氏が、2012年から始めたプロジェクト「大植未来の記憶」の写真展を紹介。津波によって奪われた町の記憶を、写真によって取り戻そうという取組みで、震災後、同氏数回に渡り大植町を訪れ、地域の人たちと交流する中で完成した作品をはじめ、同町のアマチュアカメラマンや生徒・児童たちが撮影した写真約250点が展示された。(大植町)
- 三陸・大船渡東京タワーさんままつり運営支援(9/21～23・東京都)
- 平成28年第10号台風被害調査に同行(9/27・野田村ほか)
- 「商店街と地方都市との交流物産展」への出展支援(10/26～29・東京都)

いわて復興応援隊1期生(2012年10月着任)が任期5年目スタート(10月1日)

2012年14人からスタートした応援隊期生が任期5年目を迎えた。14人のうち7人がすでに新たな道に進み、それぞれの地域の担い手になっていたが、2期生をはじめ仲間の応援隊、地域の仲間とともに意欲的な5年目をスタートさせた。



11月

- 町内・集落福祉全国サミットin奥会津(福島県金山町)に参加(11/26~27・福島県金山町)
- 日本NPOセンター主催「市民セクター全国会議2016」に参加(11/23・東京都)

地域おこし協力隊全国サミット 2016に参加(11月27日・ベルサール東京日本橋)

総務省主催第3回地域おこし協力隊全国サミットが1,000人を超す来場者を集めて開催され、藻谷浩介氏が「地域の魅力と地域おこし協力隊」と題して講演。「首都圏・大都市で何が起きているか」について、人口の増減の問題を数字が示す事実から解説し、人と天然資源の循環再生の重要性を説いた。最後に「名声ではなく、貴方がやったことが500年残り続いていくことをしませんか？」と会場に問いかけた。パネルディスカッションでは、小田切徳美明治大学教授がコーディネーターとなり、現役・経験者の協力隊が「地域での定住に向けて」をテーマに、定住に向けての課題とどう取り組んだかについてディスカッションし、サブ会場では27地域の協力隊ブースが出展され、隊員の活動をPRしながら、イベントを多いに盛り上げた。



1月~3月

平成28年度第2回応援隊研修会(1月23日、岩手県公会堂(盛岡))

一般社団法人北上観光コンベンション協会・きたかみチョイス事業部プロジェクトリーダーの登内芳也氏を講師に迎え、東日本大震災の支援活動から北上市地域産業連携復興支援員として復興に関わった経緯や、北上市のふるさと納税業務を担う「きたかみチョイス」を立ち上げ、中小企業の支援を通して地域活性化を目指す取組みなどについて伺った。登内氏から「復興支援員という活動は、普通の人々が体験できないこと。自信を持って進んでほしい」とエールをもらった。



- ロケツーリズム先進地視察研修会参加(1/11・神奈川県綾瀬市)
- 東京築地市場いわて4村連携事業参加(1/19～20・東京都)
- 三陸ジオパークフォーラム開催支援(2/1～2・大船渡市)
- いわてわかすフェス出展参加(2/4・東京都)
- 子どもの心とあゆみを支えるシンポジウム参加(2/11・釜石市)
- 持続可能な暮らしの足を考えるフォーラムin岩手参加(2/12・北上市)
- いわてグラフ3月号(2017年)で、岩泉町に定住した元応援隊と地域の人々との街づくりの取組と陸前高田市、野田村の応援隊が支援する地域の取組について紹介される。(県公式SNSでも紹介)
- 全国さるなし連絡協議会担当者会議参加(3/2～3・福島県福島市)
- 東北大学災害科学国際研究所シンポジウム「歴史をつなぐ、人をつなぐ-旧気仙郡における被災史料保全活動-」に報告者(三陸ジオパーク推進協議会推進員)として登壇(3/4・大船渡市)
- 共生社会の実現をめざすシンポジウム参加(3/11・盛岡市)
- 災害公営住宅・顔合わせ会研修会(3/15・山田町)
- 「復興の先を見据えた支援・住民もNPOも育つ復興支援の在り方」シンポジウム参加(3/22・東京都)
- 地方創生☆RESASフォーラム2017参加(3/26・東京都)
- 第3回JCN岩手ミーティング～コミュニティビジネスをコラボレーションする～参加(3/29・盛岡市)

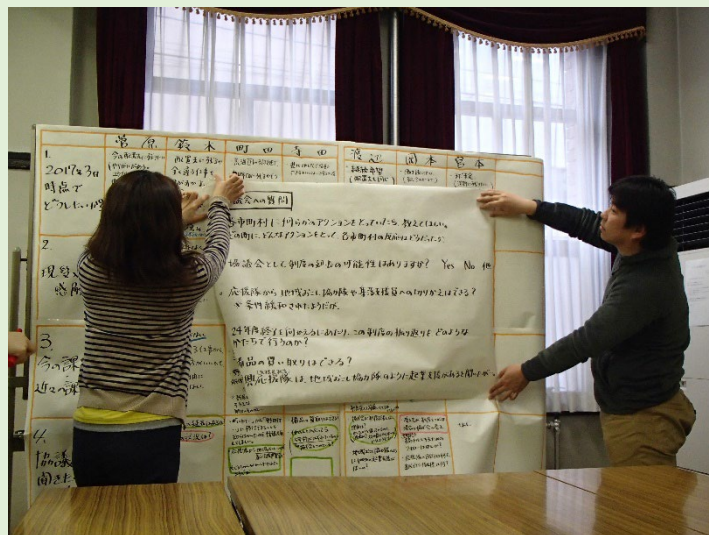


応援隊自主企画研修会開催(3月9日・岩手県公会堂)

2017年は、応援隊1期生が5年の任期を終える年であることから、3月9日、岩手県公会堂を会場に任期終了に向けた「応援隊自主企画研修会」を開催。隊員だけのワークショップを開き、結果報告から県や専門支援員が参加し、質疑応答や意見交換が行われた。

2012年度15名でスタートした応援隊1期生は、この時点で8名が活動しており、現在の不安や疑問、課題などを整理した。

① 現時点でどうしたいか？② 応援隊活動継続対する受入先の意向は？③ 今の課題、近々の課題は？ ほか



総務省復興支援員推進要綱の一部改正(2016年6月)

総務省から復興支援員推進要綱(平成24年1月6日付け総行人第60号)の一部について、「最長5年の期間」としていた活動期間を「東日本大震災復興特別会計の設置期間中」に延長する旨の通知があり、復興支援員が制度上は5年を超えて活動できることとなった。

いわて復興応援隊については、市町村への応援隊配置を当初の5年で終了とし、以降は原則、県及び県事業関係機関への配置とする方針が県から示された。

ほとんどの応援隊は、現在の配置先(配置地域)での活動継続を希望したため、該当する応援隊全員が最長5年の任期満了で活動を終えることとなる。

- 2017年4月採用のいわて復興応援隊(公益財団法人さんりく基金企画事業部配置)の公募を開始(2017年3月)

2017（平成 29）年度

県内の主な出来事

- 陸前高田市に複合商業施設「アバッセたかた」オープン(4/27)
- 大船渡市に商業施設「キャッセン大船渡」オープン(4/29)
- 大阪府から釜石市へ無償譲渡のガントリークレーン供用開始(9/23)
- 陸前高田市の中心部に商業施設「まちなかテラス」と交流施設「ほんまるの家」がオープン(10/28)
- 釜石市民ホール「TETTO」がオープン(12/8)
- 三陸ジオパークが日本ジオパークとして条件付き再認定となる。(12/22)



応援隊 1 期生(2012 年 10 月採用)は、5 年の任用期間終了を迎える年となり、応援隊の活動が三陸沿岸市町村の支援から県の事業(組織)を通しての支援に移行していく一方、隊員が地域おこし協力隊等の交流会や研修会に地域を超えて参加する機会がこれまでより増え、県政懇談会(7 月、12 月)で知事や地域の若者と意見交換をするなど、復興支援員の存在が地域に認識されるようになり、隊員の活動も広がりを見せていく。

いわて復興応援隊に新たに 3 名を任命

- 4月1日付けで、県三陸総合振興準備室に応援隊2名(佐藤 有子、松尾 育恵)が着任
- 5月15日付けで、県三陸総合振興準備室に応援隊1名(阿久津 貴之)が着任
- 4月1日付けで、県三陸総合振興準備室から三陸DMOセンター(公益財団法人さんりく基金DMO事業部)が分離新設され、同室配置の応援隊(田村 絵里)は同センターへ配置替えとなる。
- 復興まちづくり大植株式会社から大植町(観光商工課)へ応援隊(松岡雄也)配置替え
- 出産育児のため活動を休止していた応援隊2名が、それぞれ4月、5月と活動に復帰



4 月

応援隊配置先の陸前高田まちづくり協働センターが担当し、隊員がデザインした顔出し看板(施設玄関ホールに設置)

陸前高田市複合商業施設開業イベントを企画

複合商業施設「アバッセたかた」の開業に合わせ、街をみんなで盛り上げるイベントを市内 NPO の仲間「チーム NPO」と企画し、広く参加を呼び掛けた。

- ReVAボランティアチーム埼玉県上尾総会で陸前高田モビリア仮設住宅の現状報告を行った。(4/9)
- 飲食店のジオフード開発披露会に参加(4/17・田野畑村)
- 未来志向型住民自治を学び合う集い2017に参加(4/22・北上市)



5月・6月

- 全国地域づくり人材塾参加(滋賀県大津市・5/9～13)
- いわて若者交流ポータルサイト「コネクサス」の特集で洋野町配置の隊員を紹介
- 田野畑村の消防大演習(5/28)を応援隊Facebookで紹介
- 岩手日報で応援隊が洋野町内の中学校で行った「町の魅力発信授業」が紹介された。
- 小学校3年生の社会学習見学で、村の特産「荒海ホタテ」や村の水産業について説明し、子ども達と質疑応答(野田村)



7月

- 平成29年度地方創生実践塾in岐阜県高山市に参加(7/20～7/22)
- NHKラジオ番組「旅ラジ！」に隊員(洋野町配置)と元隊員(岩泉町在住)が電話で生出演し、応援隊の活動や地域の魅力を語った。(7/25)
- 第1回全国さるなし・こうわサミットin玉川村に参加(7/30～31・福島県玉川村)

平成29年度第1回地域おこし協力隊・復興支援員研修会参加(地域活性化セミナー共催)

主催:岩手県、いわて定住・交流促進連絡協議会

開催日:2017年7月14日、会場:サンセール盛岡(盛岡市)

- ① 講演:稲垣 文彦氏(公益社団法人中越防災安全推進機構業務執行理事)
- ② 事例発表:地域おこし協力隊(花巻市、雫石町)
- ③ パネルディスカッション:現役の応援隊、地域おこし協力隊及び経験者

講師の稲垣文彦氏(中越防災安全機構業務執行理事)が「復興支援員・地域おこし協力隊と地域のマッチングのために」をテーマに講演。地域おこし協力隊(花巻市、雫石町)の事例発表と、協力隊といわて復興応援隊の現役、OBを交え、「地域の中で気づいたこと考えたこと」についてパネルディスカッションを行い、着任当初、任期中、任期終了後とそれぞれが経験し気づいたこと、今考えていることなどを本音を覗かせながら語り合った。



8月・9月

- 地方創生実践塾in遠野「防災によるまちづくり」に参加(遠野市・8/4~5)
- Honda Smile Mission(ラジオ番組ブログ)で九戸村の「あま茶」と販促支援に取り組む応援隊を紹介(8/18)
- 全国のFMネットワークで作る番組「ニューマン・ケア・プロジェクト」の復興グルメシリーズ・北三陸編で野田村配置の隊員がインタビューを通して荒海団や荒海ホタテを紹介。(8/23)
- 全国ふるさと甲子園への久慈市のPR出展を支援(東京都・8/25~27)
- 県立大学海浜再生授業(陸前高田市立広田小学校)を支援(9/5)
- 釜石中学校防災学習の対応(山田町・釜石市、9/12, 9/19・20)
- 三陸・大船渡東京タワーさんままつり運営支援(9/22~24・東京都)



応援隊1期生(2012年10月採用)任期終了

応援隊1期生の7名が、9月30日をもって5年の任期を終えることから、5人の隊員が来庁し、県ふるさと振興部長に退任の挨拶とこれまで活動できたことへの感謝を伝えた。

任期終了後は、地域に残り活動を継続するもの、県内の団体に転職するもの、一旦故郷にもどり次の活動に備えるものと進む道は異なるが、これからも岩手に関わり続けたいという気持ちは同じだった。

- 菅原久美子(一般社団法人SAVE TAKATA 配置)
- 鈴木麻里子(NPO 法人陸前高田まちづくり協働センター配置)
- 渡邊 博(株式会社九戸村ふるさと振興公社配置)
- 寺田英人(軽米町配置)、町田恵太郎(野田村配置)
- 宮本慶子(洋野町配置)、岡本花織(住田町観光協会配置)



10月・11月

10月1日、陸前高田市・中心市街地まちなか広場がオープンし、応援隊と協力隊が子供たちと一緒に「ガーランドづくり」を実施

- 平成29年度みやぎ地域復興ミーティング「復興の担い手たちの今、共に自立の歩みを進める」に参加(10/18・宮城県石巻市)
- Jリーグ公式浦和レッズホームゲームに大槌町PRブース出展支援(10/14~15・埼玉県さいたま市)
- 地方創生フォーラムin青森に参加(10/19・青森県青森市)
- 全国シティプロモーションサミットin Shinagawaに参加(10/26・東京都)



岩手野田村荒海ホタテが「GI」登録

農林水産省が地理的表示「GI」保護制度に「岩手野田村荒海ホタテ」を追加登録。荒海団の活動支援をはじめ、荒海ホタテのブランド化、GI登録には、関係者とともに応援隊も奔走した。



12月

三陸ジオパークが日本ジオパーク条件付き再認定となる

2017年は、三陸ジオパークにとって、日本ジオパークの再審査の年であった。条件付きでの再認定とはなったが、同協議会事務局には、これまで配置してきた5名が積極的に支援し、各自治体及び認定ガイド、地域の関係者と連携し取り組んだことが結果に結びついている。

2月

平成 29 年度第 2 回いわて復興応援隊研修会(2018 年 2 月 16 日、盛岡市つなぎ温泉「清温荘」)

応援隊 1 期生の9月退任につづき、応援隊2期生(2013 年4月採用)が4月で5年の任期を終えることから、本年度2回目の研修会前半は、これまでの活動を振り返り「被災地支援と自分」をテーマに、これまでの自分とこれからについて意見を交わした。後半は、「地域の今後」について、抱える課題と希望的未来について、全員でディスカッションした。



3月

いわて復興応援隊 2018 年度採用の募集開始

いわて復興応援隊の活動は、2018年度から県事業等への配置にシフトし、県及び県関係機関(三陸ジオパーク推進協議会、三陸鉄道株式会社、三陸DMOセンター、三陸防災復興博実行委員会(仮称))で活動する隊員の募集を3月1日から開始した。

いわて復興応援隊2期生が退任のあいさつ

2013年4月15日採用のいわて復興応援隊2期生が、4月14日で5年の任期が終了となり、任期満了を待たず退任する隊員もいることから、全員が揃う3月29日、県庁に集合し退任の挨拶を行った。



池田陽一 (NPO 法人陸前たがだ八起プロジェクト配置)、渡邊悦子 (NPO 法人体験村・たのはたネットワーク配置)
佃実佳・酒井菜穂子・種坂奈保子 (NPO 法人陸前高田まちづくり協働センター配置)、美濃はるか (住田町観光協会配置)
松岡雄也 (大槌町配置)、中野貴之 (大船渡市観光物産協会配置)、池一恵 (久慈商工会議所)
田村絵里 (三陸 DMO センター配置) は活動継続となり、2015 年 4 月採用の関博充は転職のため 3 月末で退任となった。

2018（平成30）年度

県内の主な出来事

- 東北絆まつり2018盛岡開催(6/2～3)
- 大槌町文化交流センター「おしゃち」開館(6/10)
- 岩手県初のフェリー航路「宮古・室蘭フェリー」出航(6/22)
- 釜石鵜住居復興スタジアム完成(8/19)
- 宮古市中心市街地拠点施設「イーストピアみやこ」供用開始(10/1)
- 陸前高田市立気仙小学校再建(県内被災公立学校全て再建)(12/14)
- 三陸鉄道「リアス線」全面開通(北と南が1本につながる)(3/23)



沿岸市町村の配置から県事業関係機関への配置へ

応援隊1期生(2012年採用)、応援隊2期生(2013年採用)の5年の任期が終了し、2018年度より応援隊の配置先を沿岸被災市町村から県の三陸復興事業(機関)にシフト。沿岸の各広域振興局、三陸パーク推進事業、三陸防災復興プロジェクト、移住・定住事業など広域な支援活動を行うこととなる。

いわて復興応援隊、新たに10名が着任

4月

- 鷲塚 由美子 (三陸ジオパーク推進協議会事務局配置)
- 熊谷 昌夫 (三陸防災復興プロジェクト 2019 推進課配置)

5月

- 町田 恵太郎 (特定非営利活動法人 久慈広域観光協議会配置)

6月

- 新井田 舞 (特定非営利活動法人 久慈広域観光協議会配置)
- 菊池 啓 (県沿岸広域振興局 経営企画部 産業振興室配置)
- 大塚 光太郎 (県沿岸広域振興局 大船渡地域振興センター配置)
- 真部 渉 (三陸防災復興プロジェクト 2019 推進課配置)

7月

- 宇夫方 杏奈 (三陸鉄道株式会社配置)

10月

- 高橋 美紀 (いわて定住・交流促進連絡協議会配置)
- 田高 正博 (三陸ジオパーク推進協議会事務局配置)



2018年度応援隊配置先と隊員の主な活動

既に隊員を配置していた3つの機関のほか、三陸防災復興プロジェクト 2019 推進課、当協議会の定住・交流推進部、沿岸の各広域振興局が新たな配置先となる。県広域振興局への配置は、受入の調整がつかない等の理由により、宮古地域は翌年度からの配置となり、久慈地域は県と連携した地域のNPOへの配置からスタートした。

応援隊配置先	隊員の主な活動(2018年度)
特定非営利活動法人 久慈広域観光協議会(久慈市)	<ul style="list-style-type: none"> 県北広域振興局(久慈地区)との連携事業 県北沿岸地域のツアー造成及び三鉄との連携による観光振興等
県沿岸広域振興局 経営企画部産業振興室(釜石市)	<ul style="list-style-type: none"> 三陸ジオパーク現地推進の支援 三陸DMOセンターとの連携による観光振興 三陸防災復興プロジェクトの現地支援 ほか
県沿岸広域振興局 大船渡地域振興センター(大船渡市)	<ul style="list-style-type: none"> 三陸ジオパーク現地推進の支援 三陸DMOセンターとの連携による観光振興 三陸防災復興プロジェクトの現地支援 ほか
三陸鉄道株式会社(宮古市)	<ul style="list-style-type: none"> 三陸鉄道を活用した観光ツアー企画、沿線企業と連携した特産品開発支援、イベントの画像記録及びポスター・チラシの宣材制作。 公式SNS・HP及び動画サイトによる情報発信 首都圏駅構内映像及び中吊り広告等の企画、ヘッドマークのデザイン企画ほか <p>三陸鉄道には、2015年1月から2023年3月まで、3名の応援隊を配置</p>
三陸ジオパーク推進協議会事務局 (宮古市)	<ul style="list-style-type: none"> 三陸ジオパーク普及啓発活動、県内町中学校でのジオ授業実施 広報紙「さんりくジオだより」編集、公式SNSによる情報発信等の広報活動 三陸ジオパーク認定ガイド養成支援、関係機関との連携推進ほか <p>2018年は6名の隊員を配置したほか、沿岸の各振興局に配置した隊員が現地推進員の役目を担った。同協議会事務局には、2014年5月から2023年3月まで10名の隊員が配置され、振興局配置の隊員をはじめとする多くの隊員が三陸ジオパークの普及、地域及び関係者との協力体制構築を進め支えた。</p>
(公財)さんりく基金 DMO 事業部 (三陸 DMO センター※当時は盛岡市)	<ul style="list-style-type: none"> 三陸観光プランナーの養成支援 三陸観光ポータルサイトの運営支援(情報収集、情報発信) 沿岸各振興局(観光地域づくりコーディネーター等)との連携 <p>2017年4月から2023年3月まで、同センターを通じた支援に隊員1名を配置したほか、沿岸の各振興局に配置した隊員が現地推進の役割を担った。</p>
三陸防災復興プロジェクト 2019 推進室 (盛岡市)	<ul style="list-style-type: none"> 三陸防災復興プロジェクト2019イベント運営支援 関係市町村及び団体、地域住民等との関係づくり 開催記録作成及びプロジェクト事業継承の支援 <p>同推進室へは、2018年4月から隊員4名を配置したほか、他事業配置の多くの隊員が地域と共に同プロジェクトを支援した。</p>
いわて定住・交流促進連絡協議会 定住・交流事業(盛岡市)	<ul style="list-style-type: none"> 定住・交流事業に関する情報発信 移住相談窓口対応 復興支援員、地域おこし協力隊の募集周知及び定住支援

4月

三陸防災復興プロジェクト2019推進室に応援隊を配置

2019年上半期に開催する「三陸防災復興プロジェクト 2019」を支援するため、新たに採用となった隊員を含め応援隊3名が県盛岡合同庁舎に開設された同イベント事務所で活動を開始。

5月

三陸ジオパーク推進協議会事務局へ応援隊を配置

4月に新規採用の隊員1名を配置したほか、同協議会の要請により三陸防災復興プロジェクト2019推進室からジオパークに関する知見を有する隊員1名が同協議会に異動し、三陸ジオパークの推進体制の強化を図る。

- ジオパーク新任者研修会参加(東京都)
- みちのく潮風トレイル(八戸～普代)利用促進協議会総会参加(八戸市)

応援隊1期生が再び応援隊に！

2017年9月末に5年の任期を終えた元隊員が、久慈地域を支援する応援隊として着任し、県庁で行われた着任研修会では、盛岡勤務(三陸防災復興プロジェクト2019、三陸 DMO センター)の応援隊仲間が、それぞれの担当事業の共有を行った。

6月

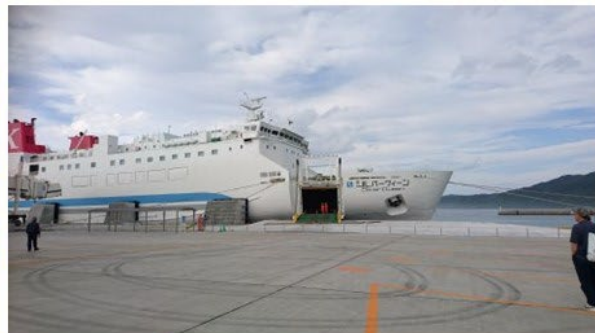
隊員同士の連携活動が始動

6月に新たに4名の隊員が着任し、隊員同士が連携をはかり、隊員自ら三陸を知り、内外に発信する取組が進められ、地域と各事業等(三陸ジオパーク、三陸防災復興プロジェクト 2019、三陸鉄道、三陸DMO)を積極的につなげる取組みをスタートさせた。

三陸防災復興プロジェクト2019

2019.6.1[sat]—8.7[wed]

つながる。ひとつになって 更に前に進む。



- 岩手県初のフェリー航路「宮古・室蘭フェリー」の出航を紹介
- 東北絆まつり2018盛岡で三陸沿岸をPR(盛岡市)
- 県沿岸広域振興局主催「食を活用した地域PRシンポジウムin気仙」に参加(大船渡市)
- 三陸観光プランナートライアルツアーに参加(久慈市、洋野町)

陸前高田市で「海浜植物授業」をサポート(6月～9月)

岩手県立大学の島田直明教授の指導のもと、陸前高田市立広田小学校「海浜植物授業」をサポート。

震災の津波で大きなダメージを受けた陸前高田市の大野海岸の現状を子供たちと一緒に学びながら、失われた海浜植物(ハマヒルガオ、ハマボウフウ、ハマニガナ)を種から育て、砂浜に植え、砂浜の復活を見守る取組みで、授業に参加した子供たちは「海水浴客も地元の人も海浜植物を守っていきたい」と現在もその思いと活動は受け継がれている。



7月

- 三陸鉄道株式会社に隊員1名を配置
- 三陸復興プロジェクト2019関係者との打合せのため県外訪問(兵庫県西宮市、香川県高松市、宮城県石巻市)
- 岩手宮城内陸地震10年メモリアル国際シンポジウム参加(宮城県栗原市)
- 宮古版DMOマーケティング研究会参加(宮古市)
- 「d design travelワークショップ」参加(盛岡市)
- 「教員のための博物館の日in気仙」参加(大船渡市)

浄土ヶ浜自然公園クリーン作戦に参加(宮古市)

7月の連休初日に実施された「浄土ヶ浜自然公園クリーン作戦」に参加した様子を紹介。地域の人たちが、浜に打ち上げられるコンクリート片、木片、プラスチックゴミなど本来自然には混じらないものを人の手で取り除き、白い岩肌の美しい景観を守り続ける地域活動の大切さを伝えた。



8月

三陸ジオパーク北部エリアの現地研修を実施

応援隊と県観光コーディネーターが、三陸ジオパーク北部エリアをより深く知るために自主企画の現地研修を実施。久慈地域で活動する三陸ジオパークの認定ガイドの田高正博さんの案内で北三陸の大地の成り立ちなどについて学んだ。ガイドの田高さんは、同年10月からいわて復興応援隊として活動することとなる。

- 東北ジオパークフォーラムin下北パークに参加(青森県むつ市)
- 「第2回青森フォトロゲイニング大会inおおわに」に参加(青森県大鰐町)
- 三陸鉄道「つながる三陸PRキャンペーン」ラッピング列車披露セレモニーで司会(宮古市)



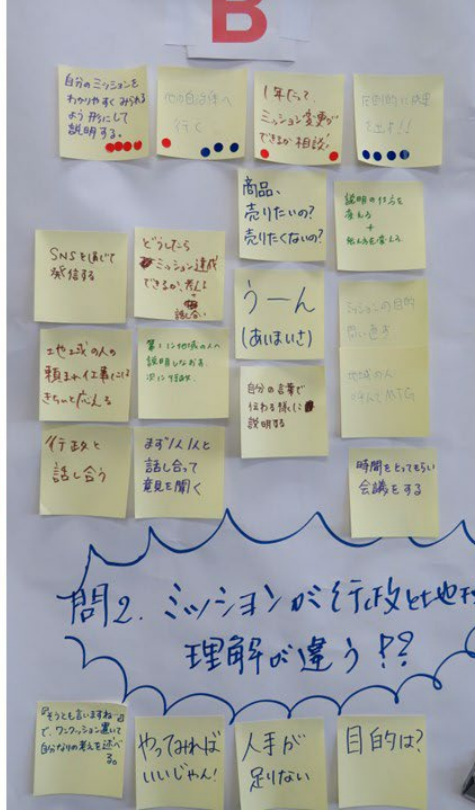
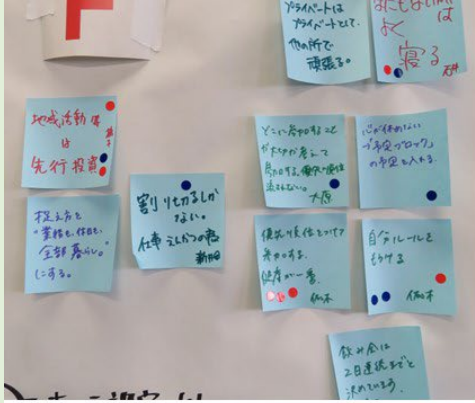
平成30年第1回地域おこし協力隊等研修会開催(8月2日・盛岡地域交流センター「マリオス」)

弘前大学大学院准教授の平井太郎氏を講師に迎え、地域おこし協力隊や復興支援員などの外部人材が地域とどうつながり、地域と共にどのように地域を作っていくのかについて講義を受けた。

花巻市・葛巻町の協力隊活動事例紹介の後、研修後半は、行政や関係団体のグループは別室で意見交換を行い、隊員(現役・元)は、平井氏のコーディネートによるクロスロード形式のワークを行い、活動を通しての疑問、課題、提案など意見を出し合い議論した。

《主催》岩手県、いわて定住・交流促進連絡協議会

《対象》地域おこし協力隊・復興支援員(現役・元)、自治体職員、関係団体ほか



9月

ボランティア休暇を活用し県外被災地を支援

大船渡地域振興センター配置の隊員が、9月10日～14日の5日間、ボランティア休暇(特別休暇)を活用し、大阪北部地震及び西日本豪雨災害等の被災地支援団体協力の下、大阪府箕面市、広島市安佐北区、愛媛県宇和島市、福岡県朝倉市、熊本県益城町等で支援活動を行い、現地の情報を7回にわたりSNSで伝えた。



- みちのく潮風トレイルサイクリング☆トライアルツアーin釜石に参加(釜石市)
- 三陸ジオパーク中部ブロック会議設立総会に参加(宮古市)
- 久慈秋まつりで街中を練り歩く豪華絢爛な山車パレードを紹介(久慈市)
- ツーリズムEXPOジャパン2018(東京ビックサイト)で三陸ジオパークをPR

10月・11月

- 日本ジオパーク全国大会アポイ岳大会参加（北海道様似市、三笠市）
- 「いちログ！～いちのせき防災フォトロゲイニング2018に参加（一関市）
- 三陸鉄道動物ふれあい列車「にゃん鉄」の企画・運営を支援（釜石市～大船渡市）
- 三陸鉄道リアス線全線開通に向けたカウンボードお披露目（宮古市）
- JR八戸駅で開催された東北エモーション5周年記念イベント（八戸駅）で元応援員の宮本慶子さんが1日駅長を務めた。



12月

平成30年度第1回いわて復興応援隊研修会（12月14日・岩手県公会堂）

研修会前半は、県の事業間連携を応援隊が関わりながら進めている「三陸DMOセンター」「三陸防災復興プロジェクト 2019」「三陸ジオパーク」の事業概要や進捗状況等を、改めて県の各事業担当者から説明を受け、隊員それぞれの立場から質疑応答を行い、後半は、応援隊として様々な事業の連携をどのように支援していくべきか、課題はなにかについて話し合った。

応援隊の活動が県事業へシフトする中、メンバーも大きく変わり、隊員同士のコミュニケーション不足を原因とする様々な問題も増えていたことから、隊員間のつながりを強化し、事業や地域の枠を超えて活動していくための提案を行った。



- 大船渡市の基石浜の清掃活動に参加。参加した地域の人達から「基石浜の石は7色ある」と教わったことをSNSで紹介。（12/11）
- 三陸ジオパークのジオサイトを学ぶため、県北ブロックを中心に活動する三陸ジオパーク認定ガイドと一緒に宮古市の浄土ヶ浜を視察。久慈エリア、三陸ジオパーク推進協議会に配置の隊員が、主体的に視察を企画し、地域の認定ガイドと共に学び交流する機会を作った。（12/19）



1月

平成30年度第二回いわて復興応援隊研修会(1月30日、盛岡地域交流センター「マリオス」)

同年度2回目の応援隊研修会を地域づくり人材活動事例発表会と併催。

県内で活動している地域おこし協力隊や復興支援員をはじめ地域づくり活動を行っている人材が一堂に会し、日頃の活動や未来への提案を発表した。

講師に齊藤俊幸氏(イング総合計画株式会社代表取締役)を迎え「地域ビジネス最前線事例紹介」について講義を受けた。その後は、3つの分科会「観光・交流人口の拡大」「起業・地域資源を活用した地域産業の活性化」「地域コミュニティの活性化、移住・定住の促進」に分かれ、いわて復興応援隊(現役・元)を含む21人が発表した。



2月

第5回地域おこし協力隊全国サミット「災害復興と地域おこし協力隊」に参加(東京都)

地域おこし協力隊制度が創設され10年。2004年新潟県中越大地震の支援活動から誕生した「地域復興支援員」が協力隊制度の基となり、2011年に発生した東日本大震災からは、復興支援員が活動を開始した経緯から、その後相次ぐ熊本地震、大阪北部地震、西日本豪雨などの災害に、地域おこし協力隊も復興支援員もそれぞれの地域で支援を行っているという報告がパネルディスカッション冒頭に報告された。

災害に直面したその時何を思い、それぞれの地域の隊員がどう動いたかを、5人のパネリストにコーディネーターを中越防災安全推進機構ムラビト・デザインセンター長の阿部巧氏が務め、これからの協力隊の可能性についてディスカッションした。

隊員同士の日頃のつながりが災害時の連携として機能し、現場の隊員に対し、近隣だけでなく遠方の隊員による後方支援を次々に繰り出し対応してきたことが共有され、災害時の隊員、隊員経験者のネットワークによる新たな可能性を感じるサミットとなった。



3月

応援隊2名(大船渡市、久慈市配置)が1年の任期満了で退職。これにより気仙地域の隊員配置は終了となった。

2019（令和元）年度

県内の主な出来事

- 三陸防災復興プロジェクト2019開幕(6/1)
- 東日本大震災津波伝承館「いわてTSUNAMIメモリアル」開館(9/22)
- ラグビーワールドカップ2019日本大会釜石開催(9/25)
- 台風19号が岩手県に上陸(10/12)
- 県沿岸部の災害公営住宅5,550戸の整備完了(11/5)
- 三陸鉄道、台風19号被害からの全線再開(3/20)



いわて定住・交流促進連絡協議会の組織改正（4月1日）

いわて定住・交流促進連絡協議会は、いわて復興応援隊受入事業を行う復興・地域振興部（ふるさと振興部地域振興室所管）と定住・交流事業を行う定住・交流推進部（商工労働部定住・雇用労働室所管）の共管体制となった。

いわて復興応援隊に新たに1名を任命

5月に県沿岸広域振興局宮古地域振興センターに隊員を1名を新たに配置し、また6月には、久慈市に開設した当協議会現地事務所に、応援隊2名を駐在させ、北三陸地域を中心に広域な復興と地域振興の支援をスタートした。



《5月7日着任》

里館 徹（県沿岸広域振興局宮古地域振興センター配置）

《6月1日配置替え》

町田 恵太郎、田高 正博（いわて定住・交流促進連絡協議会久慈事務所駐在）

久慈事務所開設（6月1日）

久慈駅前開設した久慈事務所には、隊員の活動期間や実績を備え、グリーン・ツーリズムインストラクターや三陸ジオパーク認定ガイド等の資格など十分な経験も持つ隊員2名を駐在させ、隊員の主体性を重視し、管理者は常駐せず、県北広域振興局（久慈）や関係市町村、地域おこし協力隊や地域づくり団体等との連携による地域振興を目的としてスタートした。

管理者が常駐しないことについて、当初は勤怠管理等の問題を懸念する声もあったが、毎朝、盛岡の事務局（専門支援員）とリモートで出勤確認と前日の報告と当日の予定等を確認し、日常にビジネスチャットツールを活用するほか、月1回は事務局が来所して定期ミーティングを実施する方法で運営することで日々の業務管理及び勤怠管理が適正且つ効果的に行うことが出来た。

同事務所には、地域おこし協力隊や三陸ジオパークの関係者、県市町村の職員、地域の事業者などが気軽に立ち寄り、情報交換、ジオパークや地域づくりの自主研修、オンライン会議の会場として対応するなど、地域交流の場としても機能し、応援隊の活動は、沿岸北部から隣県を含めた広域に及び、ジオパークの講師や様々な事業のサポート、ドローンを活用した動画作成の協力、地域ガイドブックの制作や観光掲示・展示方法のアドバイス、地域おこし協力隊等の活動支援など地域に求められる活動を地域に伴走する姿勢で取り組むなど、北三陸エリアの地域振興に貢献し、期待以上の大きな成果を残した。



4月・5月

さんりく駅-1グルメの第14号 2019年特別版

三陸鉄道沿線周辺のおすすめグルメ(飲食店)を紹介するフリー冊子「さんりく駅-1グルメ」を、三陸鉄道を支援する応援隊が「駅-1グルメ調査隊」としてPR。

久慈駅のエモーションを紹介

久慈駅で久慈広域観光協議会が実施している歓迎セレモニーを紹介。洋野町で応援隊が中心となって始めた「洋野エモーション」と同じく、久慈駅を訪れた人たちに大漁旗を振って出迎えるおもてなしを行っている。



三陸防災復興プロジェクト 2019 のプログラムを紹介

さんりく文化芸術祭2019にて上演するオペラ「四次元の賢治-完結編-(7月13日、釜石市で上演)」の紹介とチケット販売等をPR

「インバウンド向けラッピング列車」お披露目会を取材(5月22日)

三陸鉄道リアス線大船渡派出所車両基地で開催された「インバウンド向けラッピング列車お披露目会」を取材。同列車は「三陸地域へ来られた外国人観光客の皆様へ、Welcome メッセージや三陸の魅力を発信し、親近感や好感度の向上を図ること」を目的として岩手県沿岸広域振興局が企画し実施した。



6月・7月

三陸防災復興プロジェクト 2019 開幕(開催期間:6/1~8/7)



- 三陸ジオパークフォーラム&エクスカーションツアー
- 三陸国際ガストロミー会議2019
- 三陸プレミアムランチ列車
- 三陸ジオパークフォトロゲイニングフェスティバル
- さんりく文化芸術祭2019
- さんりく音楽祭2019
- 三陸防災復興シンポジウム2019 他

「三陸がつながる。日本各地や世界とつながる。ひとつになって更に前に進む。」の基本コンセプトのもと、県沿岸の13市町村を会場に、東日本大震災津波からの復旧・復興に取り組む地域の姿と復興支援への感謝を伝え、震災の教訓と防災の啓発を未来に継承するとともに三陸地域の多様な魅力を国内外へ発信し新しい三陸の創造につなげることを目的として開催されたプロジェクト。同プロジェクトの運営には、実行委員会事務局に配置された隊員のほか、沿岸の各振興局や久慈事務所、三陸ジオパーク推進協議会、三陸鉄道、三陸DMOセンター等各事業に配置された隊員や退役隊員も多く関わり、各地で開催されたイベントの成功を支えた。



『シバザクラいっぱいプロジェクト(野田村)』

6月9日、野田村で東日本大震災津波で多くの家屋が流された場所が現在は公園となっており、その遊歩道沿いに地元の子供やお年寄りが、他県からの派遣職員と一緒に、約 3,200 本のシバザクラを植えた。



「三陸・被災地フロントライン研修」

6月10日・11日、三陸鉄道が参加者(団体)のニーズに合わせて企画・実施された三陸沿岸被災地の現地視察研修を応援隊が同行取材し、応援隊 SNS で紹介した。県が沿岸市町村と連携し、各地域の被災・復興状況を防災・減災と三陸鉄道を利用促進も目的に案内する研修プログラム。



御箱崎・千畳敷の魅力を紹介(6月17日)

釜石市商業観光課職員のガイドで、三陸ジオパーク推進協議会のメンバーとともに三陸ジオパークジオサイトの一つで釜石市御箱崎の「千畳敷」を視察。絶景の画像とともにその魅力を SNS で紹介。

三陸グルメ祭り(7月13日・14日)

宮古駅前で開催された「三陸グルメまつり」を当日、現地から SNS で発信

岩手つながる協力隊主催の交流ツアーに参加(7月22日)

県内の復興支援員や地域おこし協力隊の移住定住支援の活動する応援隊が、県南地域で開催された日帰りツアーに参加し、運営側の支援とともに参加した隊員同士の交流を深めた。

もぐらんぴあ水族館「岩手の海とジオの魅力展」紹介

三陸防災復興プロジェクト2019関連事業としてもぐらんぴあ水族館の企画展をクラゲの動画と共に紹介。



岩手県立博物館地層観察会

三陸ジオパーク認定ガイドでもある応援隊が、三陸防災復興プロジェクト2019プログラム「三陸ジオパークわくわくフェスタ」で開催された野田村野田漁港の地層観察会に参加。三陸ジオパークジオサイトに登録されている「大唐の蔵(だいとうのくら)」を見学し、海岸沿いの火山灰に埋もれた立木の化石や純白の地層について SNS で紹介。

「1000km縦断リレー2019」ゴール式(宮古市)

青森から東京まで、東日本大震災被災地をランニングでつなぐ「1000km縦断リレー2019」の3日目の様子を宮古地区合同庁舎前から動画で紹介。

令和元年度第1回いわて復興応援隊研修会開催(7月23日・岩手県公会堂)

同年度1回目の応援隊研修は「いわて定住・交流促進連絡協議会の組織体制の改編」と「久慈事務所開設」について説明を行った後、開催中の「三陸防災復興プロジェクト2019」の状況と今年度の隊員の活動について共有した。

同研修会には、県事務局とオブザーバーとして清水定住・交流促進専門員が同席し、隊員と共に隊員が抱える活動課題と今後の活動の進め方について意見交換を行った。



8月・9月

マリノローズパーク野田玉川で地域資源の勉強会開催

久慈事務所が地域の事業者との連携で、野田村の特産品「マリノローズ」と採掘坑道の観光ガイドのポイントについて勉強会を企画。講師は、三陸ジオパーク認定ガイドでもある久慈事務所の田高隊員が務め、野田村役場と県北広域振興局も参加し、マリノローズパークスタッフと一緒に、地域の宝の魅力伝える方法について学んだ。



三鉄累計乗車人数 5000 万人達成！(8月26日)

1984年の開業から36年目で三陸鉄道の累計乗車人数が 5,000 万人を達成した記念セレモニーを開催。5,000 万人目となった宮古高校3年生がくす玉を割る様子を応援隊がSNSで紹介。

三陸ジオパークの魅力を VR 体験で PR

イベントや商業施設等様々な場所で、三陸ジオパークから地域の魅力を知ってもらうための PR 活動を展開。9月は、イオンタウン釜石で VR ヘットセットによるジオサイトの体験や子供たちとプラスチック粘土でアンモナイトの化石づくりを楽しんだ。



10月

《台風19号(令和元年東日本台風)による被害》

10月12日、岩手県に上陸した台風19号は、三陸沿岸の各地に大きな被害をもたらした。この年の3月に全線開通した三陸鉄道も路盤・盛土の流出やのり面崩壊、土石流等の被害を受けた。

応援隊は、それぞれの活動拠点を中心にSNSで地域の被害状況や復旧が進む様子を発信し、記録として残した。

台風が上陸した翌日の10月13日に、釜石鶴住居復興スタジアムで開催を予定していたラグビーワールドカップ2019のナミビア対カナダ戦は、やむを得なく中止となったが、カナダの選手は復旧ボランティアに参加し、ナミビアの選手はキャンプ地の宮古市で市民と交流するなど三陸を支援したことがマスコミ等で伝えられた。



みちのく潮風トレイルのプロモーション映像制作ロケに協力出演

みちのく潮風トレイル名取トレイルセンターからの依頼を受け、みちのく潮風トレイルのプロモーション映像ロケに隊員が現地ガイド役として協力出演し、岩手県野田村と普代村で撮影を行った。映像は、名取トレイルセンター（宮城県名取市）で公開。

ぼうさいこくたい2019 in名古屋に参加10月19日・20日

内閣府ならびに防災推進協議会、防災推進国民会議が主催する防災推進国民大会「ぼうさいこくたい」が名古屋市を会場に開催され、三陸ジオパーク推進協議会配置の応援隊が防災の観点から三陸ジオパークの取組について紹介した。

岩手県全域合同移住イベントの運営支援(10月20日)

岩手県主催「いわて一風と土の集いーイーハト一部の暮らしと移住の始め方 in 東京」が東京有楽町の東京交通会館で開催され、応援隊が現地の様子をSNSで発信。

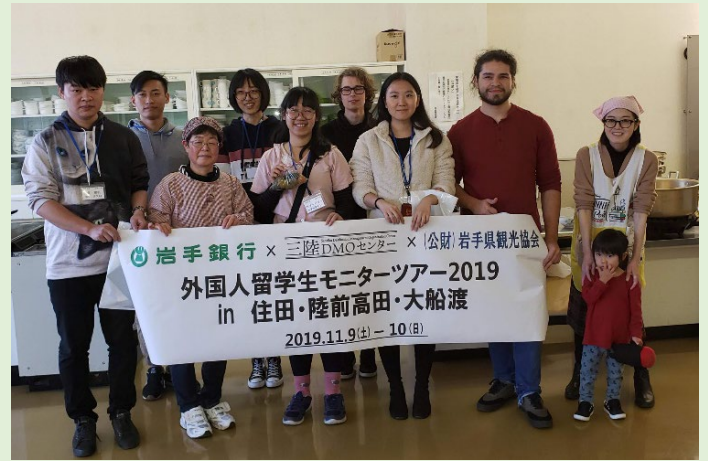


11月

留学生モニターツアー実施

三陸DMOセンターと岩手銀行、岩手県観光協会が協働で県内大学の留学生を対象に、気仙地域の魅力発見につなげるためのモニターツアーを実施し、同センター配置の隊員とともに住田町観光協会が活動する元応援隊が現地での受け入れを支援した。

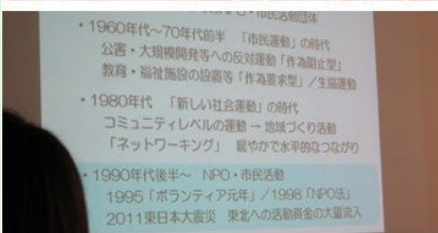
- 11月16日、台風19号で延期になっていた「ジオのカーニバル」が宮古市浄土ヶ浜で開催され現地運営を支援。
- 11月23日、青森県階上町主催の観光ガイド養成講座で隊員(久慈事務所)が講師を務めた。
- 11月26日、久慈市と洋野町の地域おこし協力隊情報交換会に隊員(久慈事務所)が参加。



とうほくNPOフォーラム in 陸前高田 2019 に参加(主催:東北NPOフォーラム in2019 実行委員会)

11月27日、陸前高田市コミュニティホールを会場に、東日本大震災から間もなく9年目を迎える今、NPO、市民、企業、行政など地域の多様な担い手が“復興の先を見据えて何をするべきか”をテーマに開催。神奈川県小田原市長の加藤憲一氏が「持続可能な地域の仕組みとは」と題し講演し、陸前高田市長等とのトークセッションの後、参加者が4つの分科会に分かれ、それぞれの活動紹介や提言、意見交換を行った。

(県の復興支援員は、いわて復興応援隊、いわて三陸復興のかけ橋推進協議会の8名が参加)



12月

三陸鉄道応援企画がスタート(12月2日)

台風19号による被害で一部路線が不通になっている三陸鉄道の利用促進と観光客のリピーター確保につなげる目的で、三陸鉄道、宮古観光文化交流協会、三陸鉄道強化促進協議会のメンバーが宮古駅で三陸鉄道応援企画キャンペーンをスタートさせ、応援隊もメンバーとして参加。

三陸鉄道 FM ラジオ番組を企画・制作・発信

三陸鉄道配置の隊員が提案し、企画制作まで手掛けるエフエム岩手番組内企画「笑顔をつなぐずっと・・・三陸鉄道」は、2019年4月から毎月放送され、2023年10月27日の最終回まで三陸鉄道の情報発信に貢献した。



宮古の師走「宮古市魚菜市场」を紹介

岩手の正月に欠かせない「荒巻鮭」やイクラやナメタガレイ、真鱈など旬の海産物を求める買い物客や観光客で賑わう師走の宮古市魚菜市场の様子を取材し、SNSで紹介。

さんりく駅-1グルメの取材・編集・配架を支援

三陸鉄道沿線の飲食店を紹介するローカルグルメ冊子「駅-1グルメ」の第15号が12月に発行され、同紙発行委員会のメンバーでもある応援隊がSNSで紹介。駅-1グルメは、三陸沿岸の企業、団体、県広域振興局の応援のもと、同発行委員会の会員が取材・撮影を行い、無料配布している。



1月

岩手木炭を紹介

生産量日本一を誇る「岩手の木炭」について、実家で今も活躍している火鉢の利便性、エネルギー効率性についてSNSで紹介。

岩手木炭 岩手県には木炭の原料となるナラが豊富にあり、県北部で生産している木炭は、全国生産量の約3割を占め、全国シェア1位を誇っている。(2021年のデータ)

2020年1月16日、国内で初めて
新型コロナウイルスの感染確認

岩手わかすフェス 2020に参加(1月18日)

東京で岩手に出会うをコンセプトに開催され5回目となる「岩手わかすフェス 2020」に、久慈事務所の応援隊2名が参加し、岩手に関係する多様な人たちと出会い、今後の活動に向け交流をはかった。

三陸観光プランナー養成塾 in 田野畑村に参加(1月23日・24日)

三陸沿岸の豊かな自然や食材の恵み、郷土文化等を活かした体験プログラムを、関係者でブラッシュアップし商品化に取り組む実践研修が田野畑村で開催され、サップ船アドベンチャーや塩づくり体験、豆腐作り・早採りワカメの料理体験などのプログラム作りを検証した。



令和元年度地域づくり人材活動事例発表会 (兼令和元年度第2回いわて復興応援隊研修会)

【開催日】2020年1月31日

【会場】盛岡市のマリオス18階(盛岡市地域交流センター)

総務省地域力創造アドバイザーの稲垣文彦さんを講師に迎え「地域づくり・地方創生と地域おこし協力隊の意義」と題し講演いただき、後半は3つのテーマに分かれ分科会形式のプレゼンテーション大会を開催した。

いわて復興応援隊の田高正博さんといわて復興応援隊の寺田英人さんを含め、18人がプレゼンを行った。

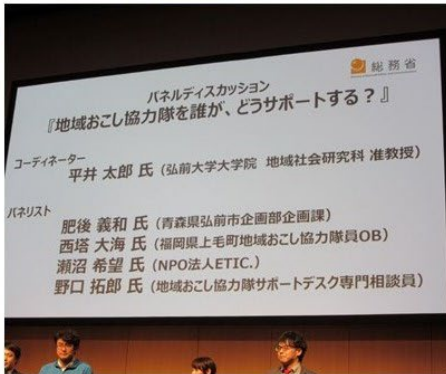


- 岩手県立大学で隊員(三陸ジオパーク推進協議会配置)が講師を務めジオパーク授業を実施(1/7・滝沢市)
- 三陸ジオパーク南部ブロック会議研修会で隊員(久慈事務所)が講師と進行役を務める(1/21)
- 2020世界災害語り継ぎフォーラムに隊員(三陸ジオパーク推進協議会配置)参加(1/23~26・兵庫県神戸市)
- JOIN移住・交流&地域おこしフェア出展支援(1/25~26・東京都)

2月

第6回地域おこし協力隊全国サミットに参加(2月2日・東京ミッドタウン)

東京ミッドタウンで開催された第6回地域おこし協力隊全国サミットに参加。越後妻有アートリエナーレや瀬戸内国際芸術祭などの総合ディレクターを務めた北川フラム氏が「アートによる地域づくりの実践」をテーマに講演し、パネルディスカッションでは、弘前大学の平井太郎氏がコーディネーターを務め「地域おこし協力隊を誰が、どうサポートする？」をテーマに4人のパネリストとともに協力隊等の受入れの課題とあるべき姿について闊達な議論が繰り広げられた。



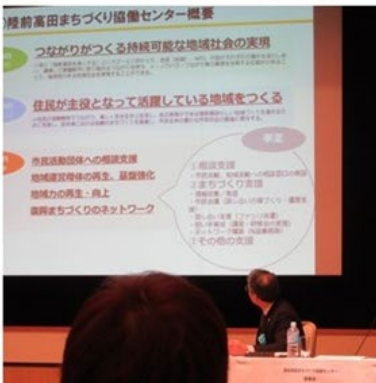
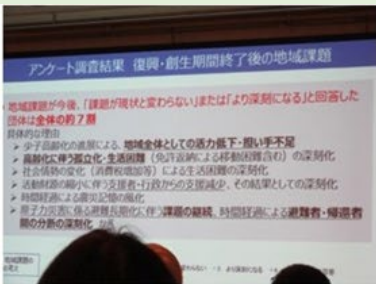
令和元年度「新しい東北」交流会～東北の未来を考えよう～に参加(2月14日・仙台サンプラザ)

復興に携わる被災地内外の多様な主体によるネットワークで、情報共有・連携・協働を進めてきた「新しい東北」官民連携推進協議会が主催する交流会に参加。まもなく10年となる東日本大震災の復興支援のあり方、今後も想定される災害時の支援の取組について考え、議論し交流を深めた。

《基調講演》「復興から地方創生へ」: 澤谷浩介氏(株)日本総合研究所主席研究員)

《パネルディスカッション》阪神・淡路大震災から熊本地震、首都直下地震の復興支援関係者が登壇

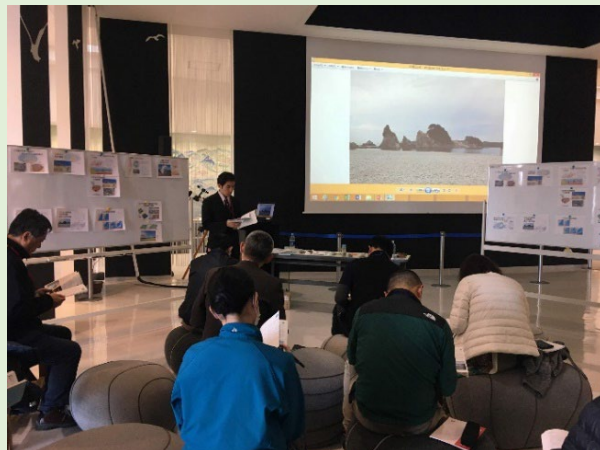
《その他》分科会ごとのワークショップ、講演、事例発表、企業による産業復興事例と顕彰式、活動紹介ブース



三陸ジオパーク検定勉強会を実施(2月19日・宮古市)

浄土ヶ浜ビジターセンターを会場に、三陸ジオパークの普及を目的に毎年開催される検定に向けた勉強会を応援隊(久慈事務所)が企画し、浄土ヶ浜ビジターセンターのスタッフをはじめ、いわて復興応援隊、宮古市・山田町・洋野町の地域おこし協力隊、高校教員、県観光地域づくりコーディネーターなど11名が参加し実施。

三陸ジオパーク検定は、出題範囲が幅広く受験者から事前勉強を希望する声が多く、ジオパークの人材育成も兼ね久慈事務所の支援活動の一環として行われ、三陸ジオパーク認定ガイドの資格を持つ応援隊の田高正博隊員が務めた。



みちのく潮風トレイル「トレイルミーティング in ふだい」に参加(2月22日・普代村)

普代村観光協会主催で開催されたトレイルイベントに参加。トレイル関係者のほか、山岳ガイドや地域住民など90名が参加。タレントのなすび氏もゲストとして参加し、前年の台風19号の被害が残るコースを自然の壮さを感じながら慎重に歩いた。



3月

地域おこし相談会 in 北いわてに参加(3月2日・二戸市シビックセンター)

県北広域振興局主催の地域づくり関係者を対象とした相談会が、二戸市シビックセンターで開催され、応援隊のほか洋野町、野田村、八幡平市、葛巻町、西和賀町、青森県八戸市の地域おこし協力隊や担当職員が参加し、隊員の地域への定着に向けた取組や日頃の活動に関する課題を共有した。

〈講師〉平井太郎氏(弘前大学大学院地域社会研究科准教授)

陸前高田市モビリア仮設住宅の仮設図書館が閉鎖

陸前高田オートキャンプ場「モビリア」内(陸前高田市小友町)の仮設住宅北集会所に2012年4月に開設された「陸前高田コミュニティー図書館」が、2020年3月15日で閉鎖される記事が3月6日の東海新報に掲載された。

2017年8月に当初の設置団体から引き継ぎ運営を行ってきたNPO法人陸前たがだ八起プロジェクトには、2013年4月から応援隊が配置となり、隊員の任期終了後も同法人職員として“最後の入居者まで”との思いで支援を続けていたが、同仮設住宅の撤去が決まり、隊員は、応援隊任期を含め7年間の活動を終え岩手を後にした。(同NPO法人は2020年6月解散)



3月20日の三陸鉄道全線再開に向けて

台風19号の被害により最後の不通区間である三陸鉄道・陸中山田一釜石(28.9キロ)の3月20日運転再開に向け、隊員の活動拠点の一つ県宮古合同庁舎のエントランスホールに三鉄応援ディスプレイが飾られた様子をレポート。

2020年5には、新田老駅が新規開業となり、三陸鉄道の駅数は41となり、盛駅から久慈駅までの路線距離(163.0km)は、日本の第三セクター鉄道では最長距離である。

2020（令和2）年度

県内の主な出来事

- 三陸鉄道リアス線「新田老駅」開業(5月18日)
- 久慈市情報交流センター「YOMUNOSU」オープン(7月5日)
- 災害公営住宅県営南青山アパート(盛岡市)が完成。これにより岩手県における災害公営住宅の整備が完了(12月7日)
- 陸前高田市で実施していた土地区画整備事業による宅地造成工事が終了。これにより岩手県における震災からの復興の宅地造成工事が全て完了(12月31日)
- 岩手県内の応急仮設住宅最後の住人が退去(2021年3月30日)



新型コロナウイルス感染症発生による様々な制限

2020年2月に国内で新型コロナウイルス感染症の発生が確認されたことにより、首都圏等への移動から徐々に県外への移動も制限され、イベントの中止やオンラインに切り替えての開催が増えていった。

県内では、7月29日に同感染症の発生が確認されるまでは、ほぼ通常通りに活動を続けていた応援隊も打合せや研修等の現地参加も難しくなったことから、当協議会事務局や応援隊のコミュニケーションをよりスムーズに図る目的で、メッセージアプリや Web 会議システムの活用を開始した。

前年度から新年度はじめまでに5人の応援隊が活動を終え、8月までに新たに3名の応援隊を迎え11名の体制となり、これまで以上に隊員間の連携が重要となった。



2020年度のいわて復興応援隊配置（2020年8月18日時点）

配置地域	配置先	隊員氏名
久慈市	いわて復興応援隊 久慈事務所	町田 恵太郎、田高 正博
宮古市	県沿岸広域振興局 宮古地域振興センター	里舘 徹、田川 深青(2020.8.18 着任)
〃	三陸鉄道株式会社	鷲塚 由美子
〃	三陸ジオパーク推進協議会事務局	林 ちはる、阿部 智子(2020.8.18 着任)
〃	県沿岸広域振興局 経営企画部 産業振興室	菊池 啓
盛岡市	いわて定住・交流促進連絡協議会 定住・交流推進部	高橋 美紀
〃	県ふるさと振興部 県北・沿岸振興室	及川 理香子(2020.4.1 着任)
〃	(公財)さんりく基金 DMO 事業部	田村 絵里

4月🌸

応援隊が三陸沿岸の桜前線を SNS で発信

三陸沿岸を北上する桜前線の様子を応援隊が活動地域からSNSで発信し、桜と共に各地の名勝や撮影スポットを紹介。



新型コロナウイルス感染症拡大による在宅勤務開始(4月30日)



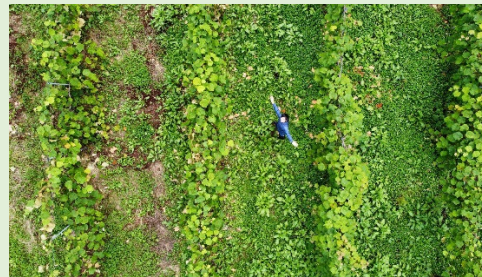
新型コロナウイルス感染症の感染拡大防止のため、応援隊の活動についても4月30日から5月6日まで交代(在宅)勤務となり、隊員の現地活動もこれまで以上大幅に制限される状況が続く。(その後も岩手緊急事態宣言に合わせて、在宅勤務等の対応を行うこととなる)

新型コロナウイルスの感染が収束する日に向けて、応援隊も各地域の情報や魅力を積極的に発信し、web会議システムやオンラインツールをフル活用し関係者との情報共有を図りながら、地域活動を前向きに進める手立てを探り続けた。

5月

いわて復興応援隊久慈事務所の YouTube アカウント開設

応援隊が小型ドローンを使い、三陸ジオパークの絶景、山ぶどう農園全景、沿岸の復興状況を空撮した映像を投稿。動画は、自治体や地域振興関係団体のPR等にも提供。(撮影については、事前に関係機関の許可を得て行っている)



三陸鉄道「新田老駅」開業をPR

5月18日の三陸鉄道の新駅「新田老駅」の開業セレモニーの様子や地域住民へのインタビューを、5月25日エフエム岩手「タララジオ」の三陸鉄道情報コーナーで放送。

当日のインタビューは、三陸鉄道配置の応援隊が担当し、開業した新駅については、他の応援隊が現地取材し、応援隊や配置先のSNSで紹介した。



6月

震災メモリアルパーク中の浜をレポート



2014年、三陸復興国立公園内で初めて“震災遺構を活用した公園”として開園した「震災メモリアルパーク中の浜」をレポート。2019年10月に発生した令和元年東日本台風による土砂災害の跡も残る画像は、自然災害の威力をあらためて伝えた。

・三陸ジオパークのジオサイトの一つで、みちのく潮風トレイルのコースにも組み込まれている震災遺構
 ・現在、公園内の令和元年東日本台風土砂災害からの復旧は完了している



いわて復興応援隊 2020年度公募を開始

2020年度、三陸沿岸の4つの拠点で活動する応援隊を募集。これがいわて復興応援隊の最後の募集となった。

7月

「燕島とウミネコの乱舞」動画配信

久慈事務所の応援隊が約3万羽ものウミネコが繁殖する国の天然記念物「燕島」の様子を動画で配信。ウミネコの子育て真っ最中で燕島全体が縄張りをめぐる異様な緊張感につつまれる様子を発信するとともに、ウミネコの繁殖地であった燕島を人間が後から開発した過去から、保護活動が盛んになった現在までの経緯を伝えた。



野田村地域おこし協力隊との連携

応援隊と野田村地域おこし協力隊が、地域の特産である山ぶどうの実をはじめツルに至るまでの徹底した活用について検討を重ねた。その記録を野田村観光協会が動画で紹介。山ぶどう以外にも交流施設の活用や交流イベントの企画運営など、近県も含めた北部の協力隊と応援隊との連携交流は盛んに行われた。



8月

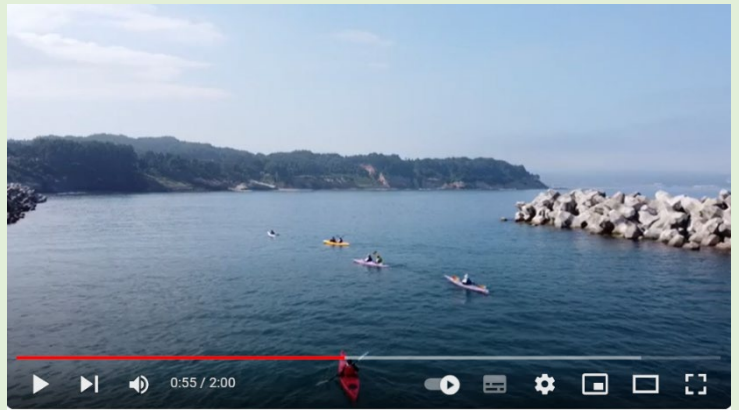
地域の魅力をより積極的に発信

8月に2名の応援隊が加わり、宮古地域を中心に、三陸ジオパークに関することや水産をはじめ地域産業に関わる情報発信がより積極的に行われた。コロナ禍の行動制限があるものの、応援隊は自身で取材を行い、取材対象者との対話からリアルな情報を県内外に発信した。



地域資源を活用したトライアルツアーにチャレンジ

三陸DMOセンター主催「野田村シーカヤック体験」の実施支援と併せて、当日の様子をドローンで空撮し北三陸の絶景を動画で発信した。



シーカヤック体験 / 岩手県野田村

※撮影については、事前に関係機関の許可を得て行っている

新・三陸防災復興プロジェクト web サイトをPR



2019年のイベントサイトから一新した同プロジェクトのwebサイトを応援隊が主となり担当。他の応援隊との連携により、三陸の情報発信に積極的に取り組んでいく。

9月

2020年度第1回いわて復興応援隊研修会開催(9月15日)

新しい応援隊3名を迎えて2020年度1回目の応援隊研修を盛岡市のエスポワールいわてで開催。

前半は、応援隊久慈事務所の田高正博隊員が講師となり「ジオの視点から三陸を学ぶ」をテーマに三陸の成り立ちからジオパークの基本を学んだ。

後半は、日頃の活動から疑問に感じること、知りたいこと、活動への提案などを出し合い意見交換を行い、隊員間の連携のやり方などを話し合った。(新型コロナウイルス感染症予防のため、研修会終了後の懇親会などの交流会は行わず日帰りとなった。)



いわて復興応援隊現地ミーティング実施(9月25日)

「応援隊の連携」をテーマに、宮古市のイーストピアみやこで応援隊現地ミーティングを実施。配置先や活動内容が異なる応援隊がそれぞれどのような活動をし、日頃どんなことを考え悩み業務にあたっているのかを共有し、隊員間でどんな連携ができるかを話し合う場とし、その後も継続。

これ以降、応援隊連携を通して、それぞれの事業支援やイベント企画などが進められるが、新型コロナウイルス感染症の感染拡大により、しばらくは開催方法の変更や中止が余儀なくされる。しかし、様々な困難を乗り越え、互いに議論を重ね、関係者を巻き込みながら進めた連携活動は、それぞれの配置先事業はもとより、応援隊の活動成果に結びついていく。



三陸ジオパーク推進を支援（2020年9月から12月の活動事例）

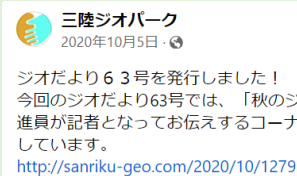
三陸ジオパークの推進に係る支援は、2014年5月に三陸ジオパーク推進協議会事務局に最初に応援隊を配置してから、2020年8月時点まで、10人の応援隊を配置し支援してきた。2019年以降、県の広域振興局等に配置となった応援隊も支援体制に加わり、2023年3月まで、多くの応援隊が関わることとなる。

三陸ジオパーク定期通信「さんりくジオだより」への寄稿

北部（久慈）、中部（宮古）、南部（釜石）を活動拠点とする応援隊が三陸ジオパーク現地推進員として、三陸ジオパークの魅力伝えるコーナーを担当し、交代で寄稿。2020年10月発行のさんりくジオだより第63号では、久慈事務所の応援隊が岩手県北部の普代村「黒崎」を紹介している。

宮古市三陸ジオパークガイドブック作成支援

宮古市三陸ジオパーク推進協議会が発行するガイドブック作成を応援隊久慈事務所が支援。その活動の一つとして9月28日に宮古市重茂地区ドケ崎灯台周辺の現地調査には、久慈・宮古で活動する応援隊3人が参加。東日本大震災津波の痕跡がまだ残る本州東端の壮大な自然の造形を応援隊Facebookでも紹介し、寄せられたコメントには専門家として解りやすく楽しく解説をしている。



三陸ジオパーク認定ガイド養成講座で応援隊が講師を務める

10月7日に開催されたジオパーク認定ガイド養成を目的とした現地見学ツアー「ジオ発見！見て、触れて、食べて、三陸鉄道でめぐる旅！」で、三陸鉄道車内での解説を三陸ジオパーク認定ガイドでもある応援隊が担当。

「ジオのカーニバル in 田老」の開催支援

10月31日、道の駅たろうを主会場に開催されたイベントで、宮古市地域おこし協力隊が企画した「タロウィン」を支援。応援隊任期終了後も協力関係は続いており、2023年度も継続開催となった。

「ヨムノスでみるのす！三陸ジオパーク」を開催

11月15日、久慈市駅前の交流施設「YOMUNOSU」で、三陸ジオパーク内の各地域を360度見られるVRゴーグルでの映像体験や、ヨムノス屋上で周辺の景観を解説し、ジオパークに親しんでもらうことを目的に同施設と連携して開催。

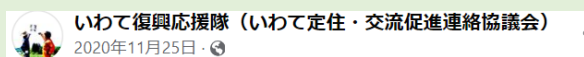
ジオトレイルツアー「ひろの海と人の歴史ウォーク」

洋野町で「海と人」をテーマにしたウォーキングイベント「ひろの海と人の歴史ウォーク（主催：岩手県北広域振興局）」を11月28日開催に向け、関係団体とともに企画、運営準備をしていたが、新型コロナウイルス感染症拡大により開催は中止となった。「みちのく潮風トレイル」を歩きながら「三陸ジオパーク」や洋野の歴史を学び、商店街の人たちとふれあい、街の魅力を発見してもらうものだったが、この連携実績がその後の北三陸の連携に結びついていく。

三陸ジオパーク認定ガイド筆記試験対策勉強会で講師として協力

12月15日宮古市三陸ジオパーク推進協議会が主催するガイド勉強会で、三陸ジオパーク認定ガイドでもある応援隊が講師を務め、三陸ジオパーク認定ガイドを目指す人たちに支援。

いわて復興応援隊で三陸ジオパーク認定ガイド有資格者として活躍しているのは、2023年3月時点で3名。



【中止のお知らせ】

11月28日（土）に開催を予定しておりました「ひろの海と人の歴史ウォーク」は、新型コロナウイルス感染症拡大を受け、残念ながら中止となりました。

岩手をはじめ全国的に大変な状況ですが、地域の皆さん、関係者のさんと準備を進めてきた企画を、またの機会に活かし、多くの皆様岩手に来て頂けるプログラムにつなげて行きたいと思っております。

基本的な感染予防をしっかりと、皆さん頑張りましょう！

いわて復興応援隊久慈事務所

#頑張りろ #岩手県 #洋野町



10～12月

岩手県立盛岡第三高等学校総合学習を取材(10月13日)

県立第三高等学校一年生の総合学習プログラム「三陸総合探求」に応援隊が同行取材。7つあるコースの内、大槌町コースの様子を応援隊 Facebook で紹介。

東京大学大気海洋研究所国際沿岸海洋研究センターや大槌ジビエソーシャルプロジェクトで、SDGsの取組を学ぶ高校生 40 人の様子を伝えた。同校の三陸実習への同行は、三陸DMOセンターからの協力依頼により、同センター配置の隊員ほか沿岸配置の応援隊 4 名が参加し、同センター運営の「さんりく旅するべ」にレポートを寄稿している。



三陸国際ガストロミー会議 2020 に参加(10月26日・27日)

10月の2日間、大船渡市民文化会館を主会場に、三陸の「食」についての魅力を再発見する目的で「三陸国際ガストロミー会議 2020」が開催され応援隊 4 名も参加し、オープニングの様子を伝えた。



フォトゲイニング三陸シリーズ～白亜の灯台で愛を叫ぶ 青の国ふだい編～に参加(11月8日・普代村)

前年度「三陸防災復興プロジェクト2019」で県内初開催となったフォトゲイニングを受け継ぐ形で、11月8日に県北広域振興局主催で開催。

当時は参加が叶わなかった応援隊が、初めて、配置先職員と共に参加し、フォトゲの楽しさを伝えた。

※2021年2月21日に宮古市で開催予定の同イベントは、新型コロナウイルス感染症拡大により、中止となった。



三陸ぐるっと食堂in陸前高田に参加(11月14日・15日)

11月の両日、陸前高田市のアバッセたかた前駐車場で開催された「三陸ぐるっと食堂 in 陸前高田」を現地からリアルタイムで伝えた。

宮古の真鱈グルメフェア開催をPR

2020年12月3日から年明け1月24日まで開催される宮古の真鱈グルメフェアをSNSでPR。

県宮古地域振興センター配置の応援隊が、同宮古水産振興センターの事業を支援しているもので、参加店との調整や広報等の企画から運営まで関わっており、同イベントの公式 SNS は応援隊が投稿を担当

ワットして、さつぷり 2020年11月 10,000	620円・3P	9 藍なべ・3P 岩手でも有名な藍なべの汁。この汁、朝5時から30分、岩手県産の新鮮な魚介類をじっくりと煮込み、朝の7時から10時までの限定販売です。お土産にもおすすめです。 電話 岩手県 100-2000 〒100-2000 岩手県宮古市 Tel.0193-42-5254
10 ドムみやこ マツロ・ホウライ・タコ・たまごの汁。この汁は、岩手県産の新鮮な魚介類をじっくりと煮込み、朝の7時から10時までの限定販売です。お土産にもおすすめです。 電話 岩手県 100-2000 〒100-2000 岩手県宮古市 Tel.0193-42-5254	275円	11 真鱈カツ丼 1.5倍のボリュームで、新鮮な真鱈をじっくりと煮込み、朝の7時から10時までの限定販売です。お土産にもおすすめです。 電話 岩手県 100-2000 〒100-2000 岩手県宮古市 Tel.0193-42-5254
12 藍だらフライ定食 イラン・イランの定番であるカツカツを、岩手県産の新鮮な魚介類をじっくりと煮込み、朝の7時から10時までの限定販売です。お土産にもおすすめです。 電話 岩手県 100-2000 〒100-2000 岩手県宮古市 Tel.0193-42-5254	1,650円	13 藍のテラコッタ焼き イラン・イランの定番であるカツカツを、岩手県産の新鮮な魚介類をじっくりと煮込み、朝の7時から10時までの限定販売です。お土産にもおすすめです。 電話 岩手県 100-2000 〒100-2000 岩手県宮古市 Tel.0193-42-5254

いわて水産女子コミュニティ立上げ

自身も漁家である応援隊が、岩手県内の漁家女性を対象に、水産について学んだり、互いの意見交換を行う“女性をつなぐコミュニティを提供する場”の立ち上げを支援。



1月～3月

沿岸各地の応援隊が年明けの三陸の様子を発信



野田村役場前で行われた小正月行事「どんと焼き」



宮古市田老町漁協魚市場の衛星管理検査に特別に同行



洋野町種市海浜公園の窓岩(まどいわ)の氷の芸術



久慈市の小袖海岸とつりがね洞を空撮した動画で伝えた

東日本大震災津波の発災から10年となる日を迎えて

当時、久慈市で津波を経験した応援隊が当日のことを Facebook で伝えた。「異常に長時間続く大揺れの中、直感的に大津波が来ると感じました。そのうち自衛隊の哨戒機が見たこともない超低空で自分の真上を飛行していくのを見て津波の観測をしているなと思い、いよいよここは危ないなと思いました。どこかからバーンという爆発音が聞こえて、地震でプロパンガスのボンベが外れて引火したのかと思いましたが、後に津波の海鳴りだと知りました。」



津波により流されてきた瓦礫と JR 八戸線久慈川鉄橋



災害派遣の自衛隊

- 2021年3月11日、岩手県・陸前高田市合同追悼式が、高田松原津波復興祈念公園公営追悼・記念施設と陸前高田市民会館「奇跡の一本松ホール」の2会場で執り行われた。

2021（令和3）年度



県内の主な出来事

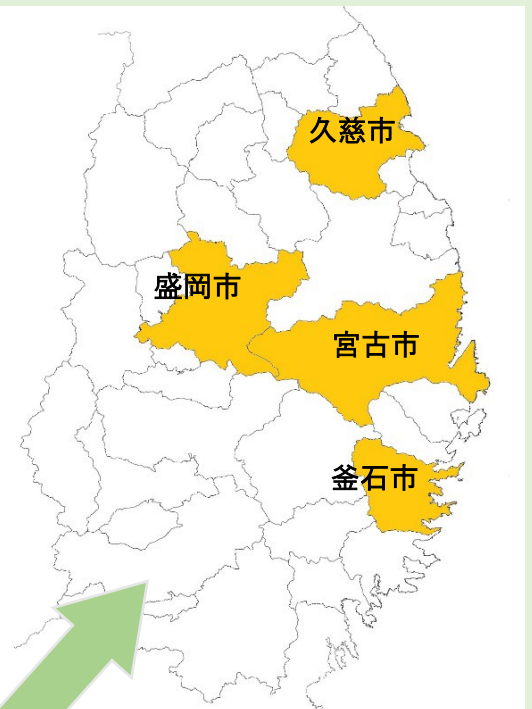
- 陸前高田市の高田松原海水浴場の砂浜を一般開放(4/1)
- 田野畑村の「道の駅たのはた」グランドオープン(4/22)
- 陸前高田市の震災遺構「旧気仙中学校校舎」と「旧道の駅高田松原タピック45」の一般公開開始(5/1)
- 一戸町の御所野遺跡を含む「北海道・北東北縄文遺跡群の世界遺産登録が決定(7/27)
- 新型コロナウイルス感染症拡大により岩手緊急事態宣言発出(8/12)
- 普代村の「道の駅青の国ふだい」がオープン(9/25)
- ぼうさいこくたい2021が釜石市で開催(11/6、7)

2021 年度、9 名の応援隊でスタート

前年度末に応援隊2名が退任し、2021 年度は応援隊9名の体制となる。

新型コロナウイルス感染拡大を受け、7月9日の岩手警戒宣言につづき、8月12日に岩手緊急事態宣言が発出され、応援隊の活動も原則在宅勤務となり、前年度に引き続き、イベント等の中止や事業企画や運営の変更を余儀なくされる。

全国的に厳しい状況である中「コロナ禍でも出来ることをしよう！」と応援隊同士の連携を密にするため、オンライン会議や定期ミーティングを実施し、コロナ禍明けに向けたイベントや研修等の企画を提案しながら、各地域のPRを積極的に行い、応援隊を通じて地域連携、事業間連携を進めていった。



いわて復興応援隊の配置

- 【久慈市】町田 恵太郎(いわて復興応援隊 久慈事務所)
- 【宮古市】里舘 徹、田川 深青(県沿岸広域振興局 宮古地域振興センター)
阿部 智子(三陸ジオパーク推進協議会事務局)
鷲塚 由美子(三陸鉄道株式会社)
- 【釜石市】菊池 啓(県沿岸広域振興局 経営企画部 産業振興室)
- 【盛岡市】田村 絵里(公益財団法人さんりく基金 DMO 事業部)
及川 理香子(県ふるさと振興部 県北・沿岸振興室)
高橋 美紀(いわて定住・交流促進連絡協議会 定住・交流推進部)



コロナ禍後を見据え、岩手県沿岸各地の魅力を積極的に発信

4月～6月

一般開放された高田松原海岸を動画撮影

4月1日に一般開放となった陸前高田市の高田松原海岸で撮影した動画を応援隊SNSにアップ



「マリンローズパーク野田玉川」リニューアルの紹介

リニューアルオープンした三陸ジオパークのジオサイト登録施設と地下アイドル「マンガンボーイズ」をPR



田野畑村の新しい道の駅「思惟の風」を紹介

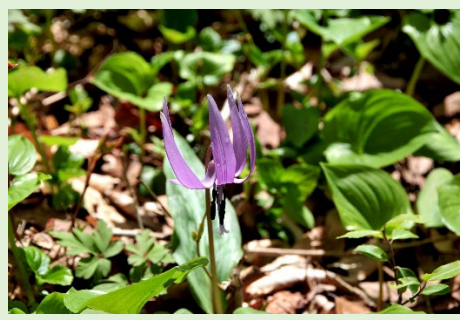
グランドオープン前の「道の駅たのはた・思惟の風」で館内の様子をSNSで紹介。

宮古市「臼木山」の桜を紹介

宮古市浄土ヶ浜近く、約800本の桜が咲き競う公園「臼木山」を紹介。

新緑の早坂高原の自然を紹介

三陸の美味しいを応援する「駅-1グルメ」の取材と併せて、岩泉町の早坂高原ビジターセンター周辺の春を紹介



4月にオープンした「おおつち海の勉強室」を紹介

東日本大震災津波で被災した旧センター跡地(大槌町赤浜)に開設された東京大学大気海洋研究所国際沿岸海洋研究センターの展示施設「おおつち海の勉強室」。地域と研究者の交流を深め、三陸の海の昔と今を見つめ陸の未来を考えることを目的としている。



地域おこし協力隊に「応急仮設住宅」を案内

洋野町地域おこし協力隊の野田村視察を、野田村で5年活動した経験を持つ応援隊がアテンド。岩手県第2分類の伝承施設である野田村の旧安家地区応急仮設住宅や、野田村の特産品「のだ塩」や「荒海ホタテ」の生産現場などを紹介。



宮古湾の新造船お披露目を取材

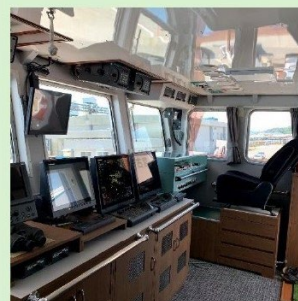
遠洋マグロ漁船竣工のお披露目入港が宮古市で行われ、宮古地域振興センター配置の応援隊が取材。特別な許可を得て、船内も見学した様子を紹介した。

取材した応援隊のコメント

「岩手県とマグロって、なじみがないように感じますが、実は岩手県には 15 隻の遠洋マグロ漁船があるんです。マグロ漁船が停泊する漁業基地や水揚げ漁港が県外であることが多いので、あまり知られていないようです。」

三陸ジオパーク北部エリア現地視察(青森県八戸市)

三陸ジオパーク認定ガイドの研修会企画を目的に、北部エリアの視察と活躍中の認定ガイドの活動取材(動画撮影)を実施。(久慈、宮古、釜石で活動する応援隊 4 名が参加)



野田村『シバザクラいっぱいプロジェクト 2021』に参加

6月27日、三陸防災復興プロジェクト2019で初めて実施され、三陸鉄道に引き継がれて3回目となる植栽イベントを体験取材。

野田村十府ヶ浦公園の遊歩道沿い 380mに約 3,000 株のシバザクラの苗を多くの参加者と一緒に植栽した。

参加した応援隊のコメント

「シバザクラの見頃は GW あたりだそうです。来年のその時期に野田村を訪れる方は、村民の手で作られている車窓からの景色も、是非楽しんでもらいたいと思います。」

洋野町「ひろの歩き～洋野町の美味しいウニの秘密を知ろう！」開催を支援

地域の特産品を学びながら、みちのく潮風トレイルを歩くイベント「ひろの歩き(洋野町観光協会主催)」が開催され、応援隊が企画から当日の開催を支援。また、三陸ジオパーク認定ガイドの元応援隊がガイドを担当し、同町の特産のウニをテーマに特産品となった理由、本州一の水揚げ量をほこる地域の取組について、楽しくわかりやすい話を展開した。



7月～9月

明日の浜人発掘事業「宮古水産高校体験入学」の実施を支援

7月29日に県宮古水産振興センターの「明日の浜人発掘事業」で実施された「県立宮古水産高校体験入学」の、準備から当日の運営を応援隊が支援。体験入学実施前に、岩手県内陸の中学校2校(雫石町、滝沢市)で行われた出前授業にも同行し、中学生たちに参加を呼び掛けるなどコミュニケーションをはかりながらの支援を行った。

同事業には、宮古市配置の応援隊と盛岡市配置の応援隊が連携し、沿岸と内陸を繋ぐ役割も担っている。

岩手県公式 Facebook「いわてのわ」でも「いわて復興応援隊連携活動」として紹介された。



みちのく潮風トレイルのルートを紹介

新型コロナウイルス感染症拡大により「岩手緊急事態宣言」が8月12日に発出される中、三陸の美しい景観を伝えようと、応援隊が洋野町のみちのく潮風トレイルのルートにそって画像を配信。

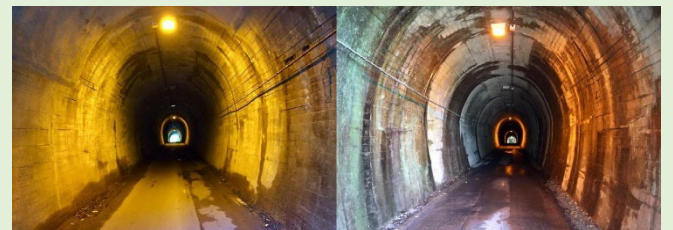
野田村では、復興工事が終了した十府ヶ浦海岸の防潮堤を上空からドローンで撮影した画像で紹介。



昭和の時代に造られた釜石市内の4つの隧道(ずいどう)を紹介

釜石市に昭和2年から40年代に造られた半島や小さな集落を結ぶ古い隧道を造られた経緯から現在の様子について、現地でも撮影した画像とともに紹介。

- ① 鳥ヶ澤隧道:1927年竣工、296メートル、県道242号
- ② 桑の浜隧道:1961年竣工、156メートル、箱崎半島
- ③ 仮宿隧道:1970年竣工、230メートル、箱崎半島
- ④ 佐須トンネル:1972年竣工、200メートル、尾崎半島



いわて三陸復興のかけ橋・マッチング事業の事例紹介

県立大学サークル「復興 girls&boys」と「みちのくココ・コーラボトリング」のコラボ企画“三陸地域の特産品を使用したオリジナルモクテル～pono lino～”が商品化され、盛岡市内の飲食店で提供開始となり、支援の事業概要から商品開発の様子を紹介。

※ モクテル＝ノンアルコールカクテル

10月～12月

岩手県立岩泉高等学校「郷土芸能同好会」を支援

県宮古地域振興センター配置の応援隊が、中野七頭舞の指導者かつ応援隊支援活動の一環として、同校を支援。10月に北上市で開催された「第44回岩手県高等総合文化祭郷土芸能発表会」において、同校が優秀賞一席に選ばれ、翌年の全国大会への出場が決まった。東京都出身の隊員が岩手の郷土芸能に魅せられ、岩手に移住した経緯と高校生達の活躍を伝えた。

隊員のコメント(Facebook から一部抜粋)

「芸能を通して全国・世界の人達と交流できる術を持てるというのはとても素敵なことだと思っています。この学生時代の経験が、生徒たちの後の人生を豊かにできるよう、引き続き一緒にがんばります！そして、中野七頭舞が、子供たちが岩泉町に残るきっかけになれば一番ですが、もしこの地域を離れたとしても、戻って来たら踊れる場所を作って行きたいと思っています」



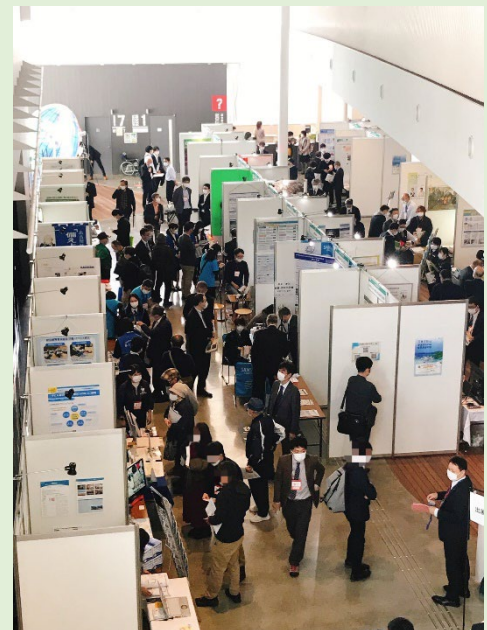
岩手県立盛岡第三高等学校「総合探求授業」三陸沿岸実施を支援

10月に実施した同校1年生の総合探求授業(現地開催)を、三陸DMOセンターを通して応援隊等が全面的に支援。岩泉町、宮古市、大槌町、釜石市の各コースの現地サポートを行い、同センターが運営するwebサイト「さんりく旅するべ!」には、各コースを支援した応援隊がそれぞれ当日のレポートを提供した。



「ぼうさいこくたい 2021」現場からの情報発信

11月6日、7日と釜石市で開催された第6回目の防災推進国民大会(通称:ぼうさいこくたい)で、岩手県主催の「いわて・かまいし防災復興フェスタ」の開催を支援。同大会は現地参加とオンラインのハイブリット形式で開催され、東日本大震災から10年を振り返り、あらためて今後の復興と防災、震災の伝承を考える機会となった。



ぼうさいこくたい 2021の様子は、応援隊が担当する三陸防災復興プロジェクトのSNSでリアルタイムで伝えており、展示ブースや各セッション、2日目に陸前高田市で実施された防災復興エクスカージョンの様子を発信した。

また、翌年神戸で開催された「ぼうさいこくたい 2022」にも応援隊が参加し、同プロジェクトのSNSでレポートしている。

陸前高田市「3.11 仮設住宅体験館」を視察

東日本大震災津波被害により、陸前高田市立旧米崎中学校に設置された応急仮設住宅を活用した研修施設をオープン後まもなくの11月初旬に応援隊が視察。施設担当者と語り部によるガイドプラン(有料)を応援隊3人が体験し、三陸ジオパークや震災学習などとの連携の可能性などについて検討することとした。(同日は、大船渡市内で翌年実施予定の三陸ジオパークオンラインイベントの関係者との打合せを行った。)



みちのく潮風トレイルブロックフォーラム in 洋野(NPO 法人みちのくトレイルクラブ主催)の運営支援

12月11日に、洋野町で実施されたみちのく潮風トレイルブロックフォーラムの運営を応援隊がサポート。約40人の参加者を迎え、廃校となった旧宿戸中学校校舎を活用した交流施設「ヒロノット」での講演や同町のトレイル本線を歩くツアー、宿戸大浜では「洋野エモーション」の旗振りを参加者全員で体験するなど、洋野の魅力を伝えた。



NPO 法人みちのくトレイルクラブ
当時、元いわて復興応援隊が同法人の総括本部長としてみちのく潮風トレイルの推進に取組んでいた。

洋野エモーション
元いわて復興応援隊が洋野町で地域住民等と始めた JR 八戸線「東北エモーション」への歓迎の旗振りイベント

イーハトーブ写真展～JR 釜石線・三陸鉄道沿線編～の開催支援

JR 釜石線と三陸鉄道沿線の地域の魅力を広域で発信する目的で、2021年12月17日から翌年1月10日までイオンタウン釜石で開催された写真展。応援隊が県広域沿岸振興局等関係機関とともに関係者への協力依頼や写真データの収集など全面的に支援した。

主催：イオンタウン釜石
展示コーナー：三陸鉄道編、JR 釜石線編、SL 銀河編、三陸鉄道沿線地域編、宮沢賢治と三陸の旅編、釜石大観音仲見世編、大槌湾からのメッセージ編



三陸観光プランナー養成塾 in 宮城に参加

三陸鉄道全線開通を控え、今後連携を強化していく必要がある宮城県の観光関連事業者を訪問し、学びと交流を深めることを目的に実施されたフィールドワークに応援隊3名が参加。

主催：三陸 DMO センター
12月9日、10日の2日間、岩沼市、名取市、東松島市、石巻市、気仙沼市で実施。



1月～3月

三陸沿岸の大寒の様子を伝える

寒さが最も厳しくと言われる大寒の1月20日、三陸沿岸にも雪が積もった。雪の中宮古駅を出発する三陸鉄道(動画)と新雪に覆われた釜石市鷗住居復興スタジアムの様子を伝えた。

久慈市小袖海岸・男岩のてっぺんについて紹介

NHK 朝ドラ「あまちゃん」の舞台となった久慈市小袖海岸の夫婦岩。片割れの男岩のてっぺんに祀られている赤磯明神をドローンの空撮画像とパワースポットといわれる理由を紹介。



三陸ジオパークオンラインセミナーの連携企画及び運営

応援隊が中心となり、三陸ジオパークを考古・歴史遺産としての観点から、縄文をテーマにジオパークの魅力を探るセミナーをメイン会場の浄土ヶ浜ビジターセンター(宮古市)、是川縄文館(青森県八戸市)、大船渡市立博物館と3会場を Web 会議システムでつなぎ開催。同セミナーの企画から関係機関との調整、広報(周知及びチラシ作成)、当日の運営まで、6人の応援隊が全面的に関わり、約70名の参加者を集め、メイン会場での総合司会は、ラジオパーソナリティの経験がある応援隊(三陸鉄道配置)が務めた。

応援隊久慈事務所には、近隣の認定ガイドや地域おこし協力隊など関係者が集まり、一緒に聴講した。また、当日の様子は、岩手日報(2月18日掲載)でも紹介され、応援隊がコメントしている。

《開催名》ジオサイトから見る世界遺産「是川遺跡」と「崎山貝塚」・「気仙縄文遺跡」オンラインセミナー

《開催日》2022年2月16日

《主催》三陸ジオパーク北部ブロック会議・同中部ブロック会議・同南部ブロック会議



防災観光アドベンチャーゲームに参加(大船渡市)

3月13日、県事業「防災を学習する場づくりプロジェクト」の現地視察プログラムに応援隊3名がモニター参加。キャッセン大船渡の周辺を回りながらスマホを利用し津波被害の疑似体験から防災を学ぶ取組み。ゲーム上では、3分の遅れで津波に飲み込まれた応援隊もあり、一瞬の判断が生死を分けると言われる災害の本質を学んだ。

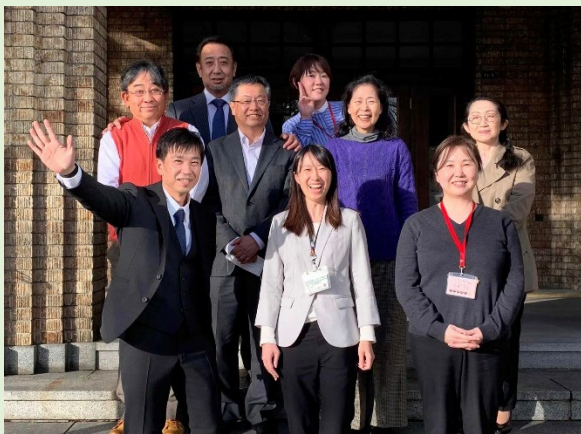
キャッセン大船渡 JR 大船渡駅の近く、飲食店や御菓子屋、雑貨屋などを中心とした約30店舗が集まった復興商業施設として、2017年4月29日にオープンした。



2022（令和4）年度

県内の主な出来事

- 1月23日発出の岩手緊急事態宣言解除(5/30)
- 宮古市の新しい遊覧船「宮古うみねこ丸」が運航開始(7/18)
- 東日本大震災津波伝承館「いわてTSUNAMIメモリアル」が来場者60万人達成(9/12)
- 陸前高田市立博物館11年7カ月ぶりに開館(11/5)
- 仕事と学び複合施設「イコウェルスみた」完成(2023/1/6)
- 東日本大震災津波 岩手県・釜石市合同追悼式が執り行われ、県と被災自治体との合同追悼式はこれが最後となった。(3/11)



いわて復興応援隊の最終年度を迎える

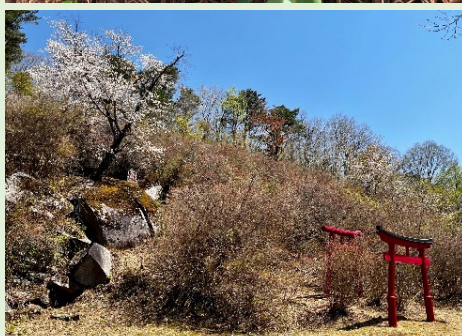
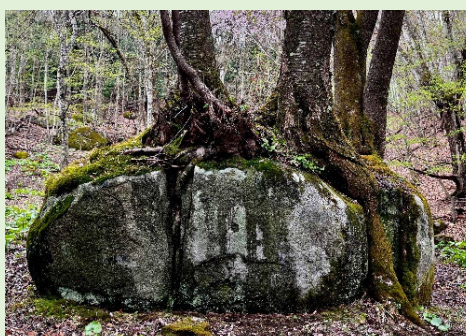
前年11月に県から応援隊及び専門支援員に対し、2022年度が応援隊活動の最終年度となること告知された。突然の知らせで隊員には動揺があったが、2012年10月から“いわて復興応援隊”が10年目となる年でもあり、在任中の応援隊9人は、それぞれが活動の集大成として最後の1年に向き合った。

応援隊最終年度スタート！

4月・5月

三陸沿岸各地から、隊員が春を発信

2022年1月23日に発出されていた「岩手緊急事態宣言」が5月30日に解除され、新型コロナウイルス感染症の感染拡大は徐々に収束する様子が見られる中、応援隊が一齐に三陸の春をSNSで発信した。



岩手県指定史跡「久慈城跡」の紹介

戦国時代、久慈地域を領地とした武士一族「久慈氏」の居城跡が、2022年4月8日に岩手県指定史跡に登録された。城跡近くにある東北屈指の慈光寺の杉並木も紹介しながら久慈地域の歴史を紹介。

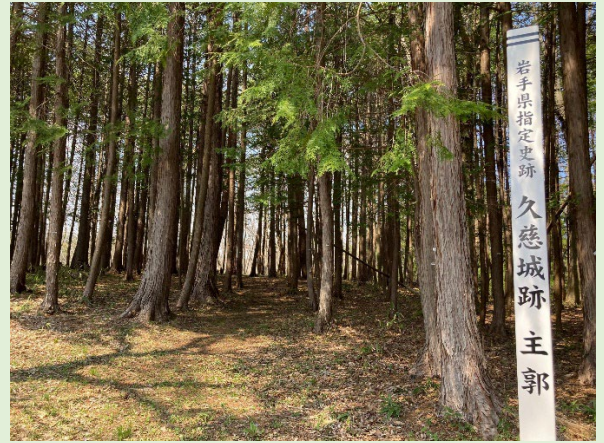
普代水門(ふだいすいもん)と企業研修をレポ

普代村の「普代水門」で実施された県外企業の被災地研修会の様子と案内役の三陸ジオパーク認定ガイドの長坂さんを紹介。

景観整備された陸中黒崎灯台の絶景

2022年3月、環境省との協議の上、普代村で黒崎灯台周辺の樹木伐採が行われ、素晴らしい景観が見えるようになった。

普代村では、同年度9月、応援隊現地研修会を実施。



6月

大船渡市地域おこし協力隊の活動を体験取材

三陸町越喜来泊地区で養殖漁業に取り組む大船渡市地域おこし協力隊の岡田真由美さんを訪ね、ホタテのかご替え作業を体験取材。大きさ3cm程の稚貝をかごに振り分ける作業をしながらインタビュー。

大船渡市地域おこし協力隊の岡田さんについては、岩手県のwebサイト(令和3年度地域おこし協力隊活動紹介)でも紹介している。⇒



宮古市三陸ジオパークガイドブック GEO 入門編が完成(宮古市三陸ジオパーク推進協議会発行)

2021年3月まで、いわて復興応援隊久慈事務所で三陸ジオパークの推進や地域をつなぐ活動を支援していた応援隊が在任中から編集に携わっていた宮古市三陸ジオパークガイドブックが完成。

宮古市シティプロモーション動画公開

岩手県宮古市で活躍する映像クリエイター3人が作った同市シティプロモーション動画が公開された。3つの動画の内、井田裕基さんが制作した“テーマ「人」”は、宮古地域振興センター配置の応援隊が家族で出演し、漁家の暮らしと地元の郷土芸能を守り育てる人々を紹介する内容となっている。((YouTube 宮古市公式チャンネルで公開中))

7月



ウミネコ繁殖地と植生管理について

三陸ジオパークの北部のサポートを担当する応援隊が、国の天然記念物に指定されている「蕪島ウミネコ繁殖地(青森県八戸市)」の植生管理についてレポートをSNSで発信したほか、三陸ジオパーク通信「さんりくジオだより第83号」に寄稿している。

蕪島全体に繁茂する植物“ナタネ”がウミネコの繁殖の妨げとなることから、定期的なく草刈りやナタネ株の除去等の保護活動を行っている。鮮やかな黄色のナタネは、戦後、観光目的で植えられたもので適正な保全活動の重要性を伝えた。

さんりくジオだより(三陸ジオパーク推進協議会)⇒



明日の浜人(はまひと)発掘事業を取材(7月13日・滝沢市)

宮古水産振興センターと宮古水産高等学校が連携し、海との関わりが少ない内陸の生徒を対象に水産業の魅力を知ってもらう機会を創出する取組である明日の浜人発掘事業。前年と同様、滝沢南中学校3年生(約240人)に対し「いわての漁業・水産業について、県宮古水産振興センターと宮古水産高等学校がプレゼンを行ったほか本職の漁師さんも講演し、中学生に水産業の魅力をPRした。同事業については、宮古と盛岡それぞれで活動する応援隊が継続支援を行った。



根浜海岸海開きで三陸ジオパークをPR(7月18日・釜石市)

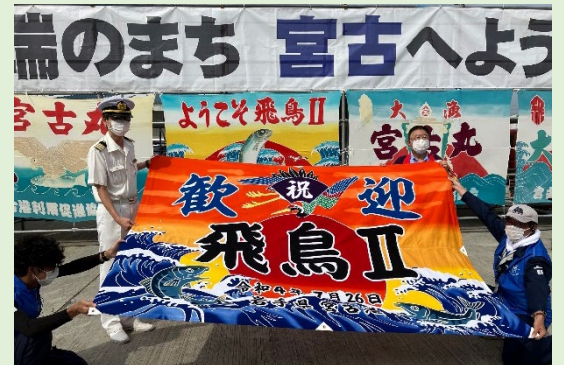
開催前の大雨により、16日(土)・17日(日)の根浜海岸の海開きイベントは中止となったが、ようやく晴れ間が覗いた18日(月・祝日)に規模を縮小し三陸ジオパークPRブースを設置。体験ブースで、ジオサイトのVRやアンモナイトレプリカづくりを体験を子供たちと一緒に楽しんだ。



宮古市の藤原埠頭に飛鳥IIが寄港(7月26日)

クルーズ客船「飛鳥II」が宮古市の藤原埠頭に寄港し、市民や観光関係者が行う歓迎のセレモニーに隊員も参加。

下船した観光客に「北山崎や震災の様子を見に行きたい」と声をかけられ、おおよその移動時間や途中の見どころなどを伝え会話を楽しんだ。

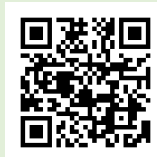


震災・防災学習現地研修会に参加(7月下旬・陸前高田市)

東日本大震災津波伝承館と県立野外活動センターの共催で校外学習や修学旅行での利用の一層の促進と学校教育と連携した震災伝承、防災文化の醸成を図ることを目的に、復興教育担当教員等を対象にした研修会「震災・防災学習現地研修会」に応援隊が参加。その様子を応援隊配置先が運営する「さんりく旅するべ」に寄稿している。

(公財)さんりく基金 DMO 事業部運営 web サイト ⇒

※「さんりく旅するべ」には、多くの応援隊が協力し、沿岸各地域の紹介やイベントに関する多くの寄稿を行っている。



8月

三陸ジオパークセミナー開催を支援(8月25日・青森県八戸市)

世界ジオパークの基礎や現状、国内の取組を学び全国のジオパーク関係者との交流をはかる目的で「三陸ジオパークセミナー」が八戸プラザホテルを会場に開催され、応援隊が現地の運営を支援した。鳥海山・飛鳥ジオパーク推進協議会事務局次長兼主任研究員の 大野希一氏が「ユネスコ世界ジオパークが目指すもの」と題して講演したほか、活動報告として三陸沿岸各地域の三陸ジオパーク認定ガイドが活動発表を行った。

翌26日はエクスカッション・ジオツアーが2コース開催され、参加者に三陸ジオパークの魅力をアピールした。



9月

令和4年度第1回いわて復興応援隊研修(9月7日～8日・田野畑村及び普代村)

応援隊現地研修会を沿岸の田野畑村及び普代村で実施。

東日本大震災から11年が経過する沿岸地域において、災害への取り組みや三陸ジオパークなど地域資源の魅力と活用を学ぶ研修を応援隊と一緒に企画し、1日目は、三陸ジオパーク認定ガイドの赤坂広太さん(NPO 法人体験村・田野畑ネットワーク)、長坂孝志さん(北三陸認定ジオガイドクラブ)のお二人にそれぞれ田野畑村と普代村のガイドをお願いした。

《前半》

赤坂広太さんのガイドで、三陸鉄道田野畑駅をスタートし、平井賀漁港、明戸海岸防潮堤、机浜番屋群を回り、3.11の被害状況と三陸ジオパークの魅力について学んだ。

1日目

《後半》

田野畑村から普代村に移動し、長坂孝志さんのガイドで、普代水門、普代村緊急避難路、太田名部防潮堤、黒崎漁港を回りながら、明治三陸津波(1896年6月)、昭和三陸津波(1933年3月)等の三陸の災害の歴史を防災に生かした3.11以前からの地域の取組について学んだ。



2日目

普代村のくろさき荘を会場に、元応援隊で山形大学地域教育文化学部講師の熊谷誠さんに「地域防災と岩手の地域(まち)づくり」と題し、岩手県沿岸を軸に前日の野外研修の解説も加えながらお話頂いた。地球の変動がもたらす地震・津波・水害など遥か昔から繰り返されてきた災害は、今日も明日も続いていくものであること、その災害に地域の人々が悲しみ苦しみを乗り越えて、知恵を結集しながら歴史をつないできたことを改めて学んだ。



- 普代村緊急避難路は、普代中学校校舎の脇から三陸道に上がるように東日本大震災津波発災の後に整備された。同研修の際は、事前に管理者である三陸国道事務所の許可を得て、実際に避難路を登る体験をした。
- 同研修会実施については、三陸国道事務所久慈出張所、普代村、普代村教育委員会、普代中学校、普代小学校、くろさき荘、NPO法人体験村・たのはたネットワーク、北三陸認定ガイドクラブほか関係者に多大なる協力を頂いた。

10月・11月

「ジオさんぼなのだ」を企画・運営(10月1日・野田村)

10月2日開催の県主催「三陸ジオパークフォトロゲイニング in のだ」に合わせ、同イベント前日に三陸ジオパーク認定ガイドと野田村を巡るまち歩きツアー「ジオさんぼなのだ」を実施。応援隊が企画から当日の運営まで支援し、三陸ジオパーク推進協議会主催・県北広域振興局共催で開催した。翌日のフォトロゲイニングイベントにも応援隊が運営を支援。他の隊員も一般参加者として県外からの参加者ととも秋の野田村を楽しんだ。



「ぼうさいこくたい 2022in 神戸」に参加(10月22日~23日・兵庫県神戸市)

神戸市で開催された「ぼうさいこくたい」に応援隊が参加し、岩手県のプレゼンブース出展等の支援を行った。

当日イベントや神戸市の震災に関する施設や設置された祈念碑等を配置先事業である三陸防災復興プロジェクトのSNSでレポートした。



三陸ジオパークの支援

応援隊は、2014年から継続して三陸ジオパークの推進を支援しており、2022年度は、翌年の日本ジオパーク再認定審査に向け、三陸ジオパーク推進協議会を地域とともに支援する様々な取組みを行った。

- 県外のジオパーク視察や地域ごとの研修会、商業施設等でのイベントを開催。
- 同協議会が発行する広報紙「ジオだより」では、三陸ジオパークの北部・中部・南部をそれぞれ支援する応援隊が交代で、ジオサイトの紹介や地域の歴史、イベントのレポートなどを寄稿している。

ジオだより第81号より

ジオだより第86号より

ジオだより第88号より

推進員が記者となってお伝えするコーナー

記者: 菊池 啓 (いわて復興応援隊/岩手県沿岸広域振興局配置)

ついでに並ぶ場所~
らした大津波の襲
規模や状況等)、
なというメッ
と、あるいは亡
するために石に文

ジオサイト

大槌の津波記念碑 (明治・昭和) 両石の津波記念碑 (明治・昭和)

ジオパークのサイト、今回は金石市唐3つ時代の津波波を紹介いたします。

三陸ジオパーク・現地推進員が記者となってお伝えするコーナー

毎回いろいろな情報を掲載いたしますので、どうぞお楽しみに!

今回の記者: 町田 恵太郎 (いわて復興応援隊)

塩から始まる地域のつながり

今回は10月2日(日)に野田村で開催される「三陸ジオパークフォトロゲイニングinのだ」に関連して、新釜直煮製法で作られる野田村の特産品『のだ塩』のお話を書きたいと思っています。私が塩作りの説明をする際には、まず下記のようにお話しします。

沿岸部は夏になると太平洋側から『やませ』という冷たい風が吹いて昔は冷害が多く発生し、農作物などが育ちにくい地域でした。冷蔵がない時代は、食べ物を保存するのに大量の塩が必要なので、当時は北上山地を越せば塩一升が米一升に変わる価値も持っていたため、沿岸部の人たちは鉄鍋で海水を煮詰めて塩を作り、牛の背に乗せて盛岡市などの内陸へ行き、米などの穀物と物々交換をしていたのです。

三陸ジオパーク・現地推進員が記者となってお伝えするコーナー

毎回いろいろな情報を掲載いたしますので、どうぞお楽しみに!

今回の記者: 里館 徹 (いわて復興応援隊/宮古地域振興センター)

第12回日本ジオパーク全国大会 白山手取川大会

取川大会に参加しました。
ジオパーク全国大会が10月21日~石川県白山市で開催されました。会式と分科会として23日のポスターに参加してきました。オープニングセレモニーは「か」と「御酒(ごんしゅう)」から始まりました。郷土に伝わる指定無形文化財としてこれもジオなのだと思えるのでスタートしました。セレモニーのあと真鍋真氏による基調講演「約100万種の動植物が数十年で絶滅を迎えている」という話が印象に残りました。

分科会①
午後からは「ジオパークから文化」に参加しました。金沢工業大学連携事務局福田次長様を中心に記念を取り組み再編集してエコノミーを上げていこうと言う事で経済環境のキーワードで繋ぐという早達7つの班に分かれ、それぞれにはどうすればよいか意見交換をします。私の班はそれぞれの地域の問題点の一つにして内容をまとめていき、のリーダーとなった福島県磐梯町のDXに詳しくまた色々なアイデアを

- 三陸ジオパーク構成市町村長が参加するジオツアーを実施。応援隊が中心となって、三陸ジオパークの北部・中部・南部ごとにツアーを企画し、各市町村や三陸ジオパーク認定ガイドと協力し当日のツアー運営をサポートした。



12月

『防災を学ぶ場づくりプロジェクト 学び合いワークショップ』参加(12月6日陸前高田市)



陸前高田グローバルキャンパスで行われた防災のワークショップに参加。避難所体験プログラムでは、陸前高田第一中学校での事例をもとに、避難所での一人あたりのスペース(3㎡)で実際に寝ころびながら、いかに隣同士の距離を確認した後、地元の住民の方々と屋外で炊き出しを体験。炊き出しは、レンガを組んで簡易的な釜戸から作りから行い、米を炊き上げ、自分のスペースに戻って防災食品とともに実食した。(コーディネートは、一般社団法人トナリ)

令和4年度第2回いわて復興応援隊研修会実施(12月15日・岩手県公会堂)

2022年の活動を振り返り、隊員それぞれが「これ!」という推しの取組を選び、その取組の背景、経緯、地域や関係者との連携について共有。応援隊(復興支援員)としての取組をどのようにして地域や支援事業につなぐのか、どう展開していくのかなどディスカッションした。この研修が、いわて復興応援隊の最後の研修となった。



栗駒山麓ジオパーク現地視察(12月16日～17日、宮城県栗原市)

2008年の岩手・宮城内陸地震で発生した産地災害の経験をもとに、自然災害や防災の教育に力をいれている栗駒山麓ジオパークを応援隊が視察し、同推進協議会事務局関係者や山形大学の熊谷誠さん(元応援隊)とジオパーク推進の取組と課題、特にジオガイドの養成やガイド会の運営について情報を共有した。(三陸ジオパークの課題解決に向けた視察)



『龍泉洞のジオストーリーを作ろう!』に参加(岩泉町・12月21日から全3回)

岩泉町の龍泉洞をテーマに、ジオストーリーを作る研修会にガイドやジオの関係者と共に参加。「龍泉洞の地底湖はなぜきれいなのか?」「龍泉洞の水はどこから来るのか?」「龍泉洞はなぜここにできたのか?」「龍泉洞はどのようにして観光地となったのか?」の4つテーマにわかれ、班ごとのWSでストーリーを組み立てていく作業を行った。WSのほか実際に龍泉洞に入り、ガイドに説明を受けながらイメージを確認する作業も班ごとに実践し、年明け2月の発表までにストーリーの完成を目指した。



1月・2月

三陸ジオパークだよ!～ジオタウン@釜石～開催支援(1月7日・8日)

応援隊が企画から準備、調整、当日の運営、開催周知に至るまで中心となり、関係機関の協力を得て開催した三陸ジオパークPRイベント。イベントのチラシほかイベントマップ、各種POPも制作も応援隊が全面協力を行った。

会場:イオンタウン釜石

主催:三陸ジオパーク推進協議会

共催:NPO 法人日本ジオパークネットワーク、公益財団法人イオン環境財団

協力:イオンタウン釜石、イオンスーパーセンター釜石店

内容:三陸ジオパークに関する「クイズラリー」「アンモナイトレプリカ作り」「さんりくジオパークかわらばん作品展」岩石標本展示「ご当地キャラクターとの写真撮影」他

三陸ジオパークだよ!
～ジオタウン@釜石～

参加無料
2023.1.7(土)・8(日) 10:00～16:00
イオンタウン釜石 (岩手県釜石市港町2丁目1-1)

(会場) 館内全域
三陸ジオパークでクイズラリー
三陸ジオパークエリア沿岸16市町村からのクイズ問題が館内のあちこちに登場!
参加者は「さんりくジオパーク」の子どもたちが集めた三陸ジオパークの魅力～

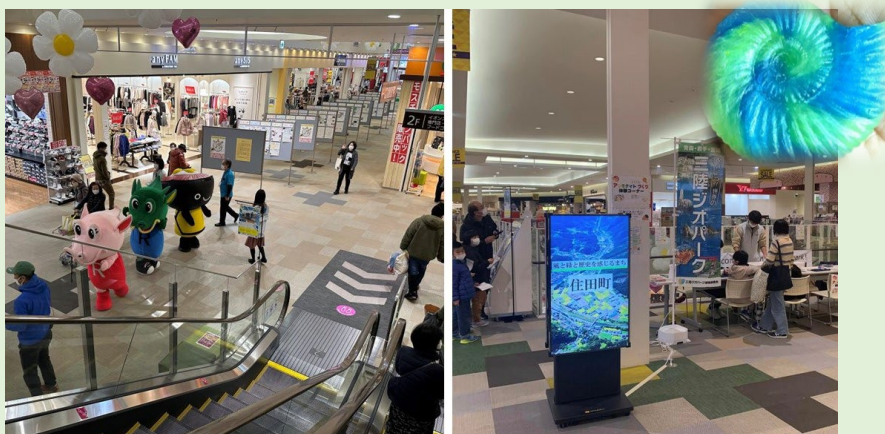
(会場) 2階 センター通路
さんりくジオパークかわらばん2022作品展
子どもたちが集めた三陸ジオパークの魅力～

(会場) 2階 3階フロア全域
プチ体験! 三陸ジオガイドツアー
ジオタウンでジオパーク体験!
三陸の有名な景勝地やどこにも見つかるお話を聞いてみよう!

(会場) 2階 コインロビー
アンモナイトレプリカ作り
このおもしろい! 身だけのオリジナルアンモナイトを作ってみよう! ※材料がなくなり次第終了

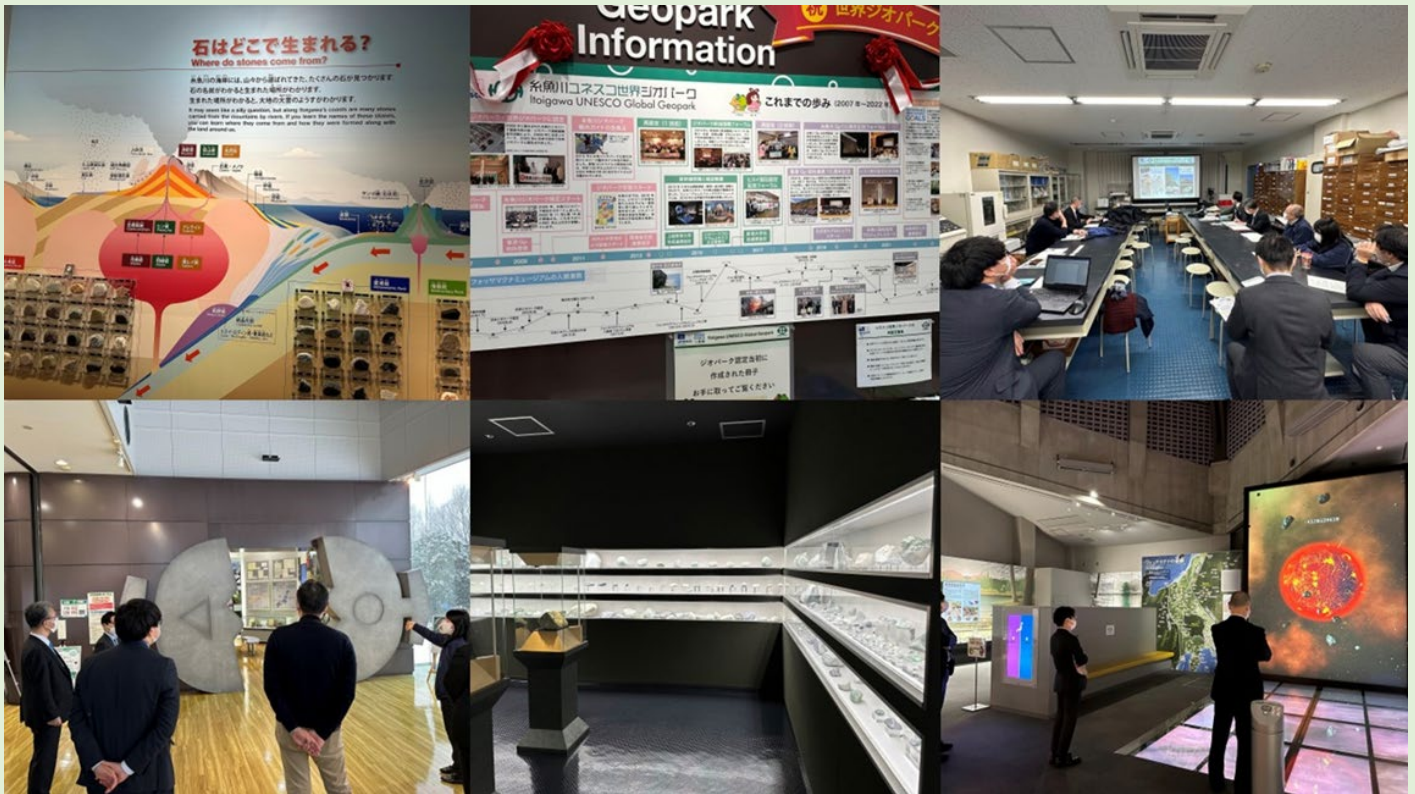
(会場) 2階 3階フロア全域
ご当地キャラクターと写真を撮ろう!!
イオンタウン釜石内のごとくにゆるキャラが出没!
あなたのお気に入りのキャラクターと会えるかな?

お問い合わせ先 三陸ジオパーク推進協議会 (岩手県釜石市港町2丁目1-1) ☎ 0193-64-1230
三陸ジオパーク Sanriku Geopark AEON イオン環境財団 日本ジオパークネットワーク AEON TOWN イオンタウン



糸魚川ユネスコ世界ジオパークを視察(1月24日～25日・新潟県糸魚川市フォッサマグナミュージアムほか)

次年度の三陸ジオパーク再認定審査に向け、前回の日本ジオパーク委員会からの指摘事項の一つである化石・鉱物等の保全の在り方を検討するため、三陸ジオパーク認定ガイドで北部エリアを担当する応援隊が三陸ジオパーク内の採掘・販売事業者と三陸ジオパーク推進協議会事務局職員、県北沿岸振興局担当職員と共に糸魚川ジオパークを視察し、情報共有のほか再審査に向けての助言を受けた。(応援隊の活動を地域につなげていくため取組み)



龍泉洞のジオストーリーを作ろう！発表会を報告(2月17日・岩泉町)

岩泉町の龍泉洞をテーマにジオストーリーを作る研修会が12月21日から全3回開催され、3回目のこの日、ジオストーリー完成の発表会が行われた。ジオパークが地域に根付いていく大切な取組の一つとして応援隊が参加し発信した。

応援隊のコメント 互いへの労いの言葉や参加して良かったという感想が飛び交う、とても良い雰囲気の中で今回の取組みは(一つの)幕を閉じました。同様の取組みが三陸ジオパーク全体に広がっていけばいいなと切に思いました。



3月

人気映画の聖地「山田町」のスポットを紹介

大ヒット上映中の人気映画に出てくる場所(聖地)として、「三陸鉄道織笠駅」「後ろ戸がある山田湾展望広場」「主人公の実家跡地にある電波塔付近の後ろ戸」を実際に辿りながらSNSで紹介した。

応援隊のコメント 後ろ戸はかなりリアルに作られていて早速戸を開いて写真を撮りました。宮古では偶然にも三陸鉄道の職員さんが来ていてお話を聞くと映画の効果で織笠駅は多くのファンの方が訪れているそうです。これを機にさらに三陸を訪れてくれる事を期待したいです。最後はしっかり戸を閉めて帰りました。何事も最後はしっかりと閉めたいですね。



宮古市移住定住情報ポータルサイトで応援隊が紹介される

日々の暮らしを楽しむ人々を紹介しながら、地域の魅力を伝える、宮古市の移住定住情報ポータルサイト「住めば宮古」が公開され、同市に移住した応援隊が紹介された。

三陸観光プランナー養成塾実施支援(3月8日・陸前高田市)

2022年度最後の三陸DMOセンター主催「三陸観光プランナー養成塾」の実施を支援。新規のプランナーを中心に15名が参加し、陸前高田市で体験交流プログラム等、様々な活動を行う特定非営利活動法人 SET の視察研修とプランナーによる活動発表会を行った。大船渡市観光物産協会の職員として活躍する元応援隊もプランナーとして参加し「大船渡の観光問題をみちのく潮風トレイルで解決する」と題し発表した。

三陸観光プランナー養成塾には、これまで応援隊や地域おこし協力隊など観光やまちづくりに関わる多くの人材が参加。過去の実施報告は、三陸DMOセンターが運営する「さんりく旅するべ・三陸取材レポート」で閲覧できる。



いわて復興応援隊の現地活動終了

2012年10月からスタートして10年6か月。岩手県沿岸を中心に地域とともに活動してきた「いわて復興応援隊」の活動は、2023年3月31日をもって終了となった。

最終年度活躍した隊員が応援隊SNSで感謝のメッセージを投稿した。

いわて復興応援隊公式 Facebook の投稿からメッセージを一部紹介

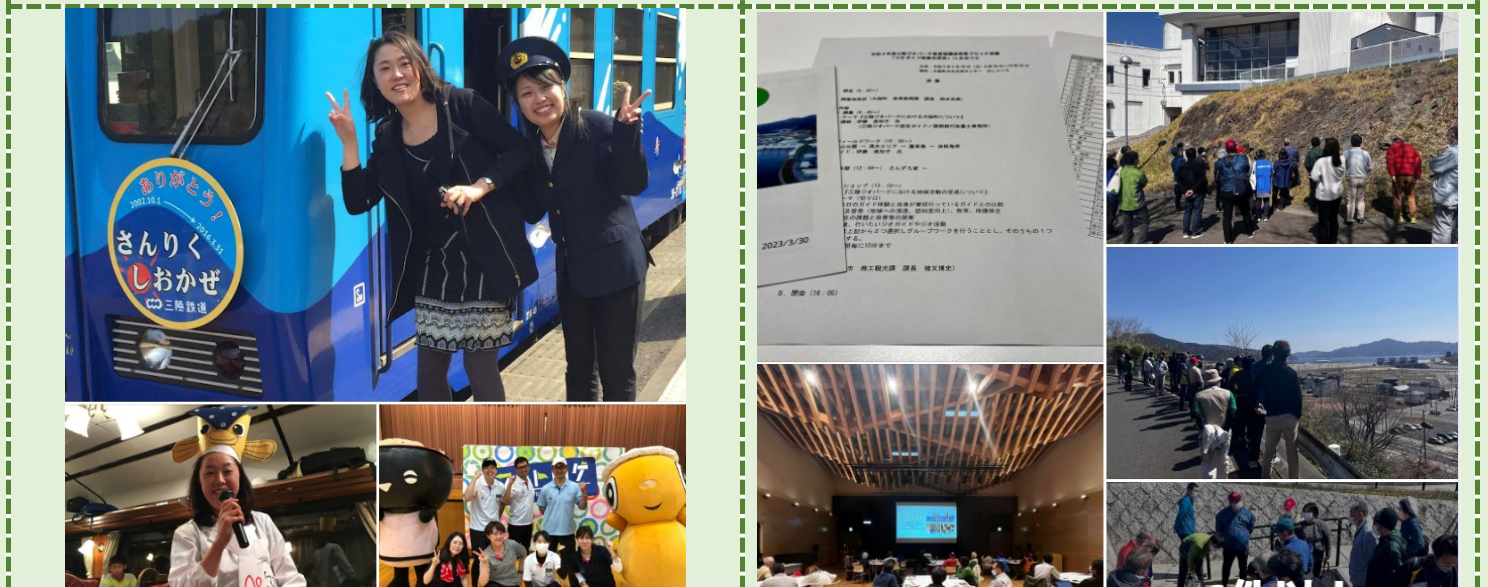
<https://www.facebook.com/iwate.fukko.ouen>



自分には何ができるか、何をすべきか、何をしたいかを真剣に考える日々でした。今後は応援隊の活動を通して得た知見と人脈を大切にしながら移住して来たこの地で生まれた子供が誇れる地元になるよう三陸漁家の一員として、大人としての役割を果たして行きたいと思います(田川 深青)

応援隊になる以前は、いわて沿岸地域の市町村名さえ碌に把握していない”ド素人”だったので、この2年間は沿岸に貢献できたぞ！という気持ちよりも、自身の学びの方が多かったなあと感じます。

とても楽しい2年間でした！(及川 理香子)



田野畑村産業開発公社にて販促サポート、その後盛岡市マリオス内にあった三陸総合振興準備室を経て岩手県庁観光プロモ室に異動し約10年。最近では三陸地域での人材育成養成塾等の進行サポート、又観光ポータルサイト「さんりく旅するべ」での取材・WEBライティング業務等を通じ、三陸地域を駆けずり回り、地域の魅力を県内外の方にお伝えしてきました。大変な時もありましたが、三陸地域の活性化に少しでもお役に立てましたら幸いです。(田村 絵里)

2018年6月の着任以来、釜石市と大槌町を中心に活動してまいりましたが、三陸地域の皆様との出会いはわたしにとって大きな財産となりました。これまで誠にありがとうございました！(泣)

この4月からは、株式会社かまいし DMCにてお世話になることとなりましたので、今後ともどうぞよろしくお願い申し上げます！(菊池 啓)

岩手県 移住ポータルサイト
「イーハトー部に入ろう！」

いわて暮らし移住定住ポータルサイト



IJU.PREF.IWATE.JP

いわて暮らし移住定住ポータルサイト「イーハトー部に入ろう！」

これまで、沿岸地域を含む岩手県全体の移住に関する支援をさせていただきました。たくさんの方々にお会いする機会をいただき、これまでにない経験をさせていただきました。お役に立てたかわかりませんが、精いっぱい取り組ませていただきました。ご指導いただきました皆様、本当にありがとうございました。私は退任いたしますが、今後も、いわて復興応援隊を宜しくお願いいたします。(高橋 美紀)



在職中は公私にわたり大変お世話になりました。約4年に渡った活動も一区切りつきました。応援隊でしか経験出来なかった事も多くあり、また関係する皆様のお力添えがなければここまで来る事が出来なかったと思います。

生まれ育った三陸に恩返しの意味を込めてこれからも関わっていききたいと思います。(里館 徹)



これまで、三陸鉄道に席を置き三陸鉄道の情報を発信してまいりました。これも多くの方々のご協力、地域の皆様の温かいご声援、ご支援をいただいたからこそだとあらためて感謝いたしますとともに御礼申し上げます。

復興応援隊は退任いたしますが、立場は変えて引き続き三陸鉄道から情報を発信してまいります。今後とも、よろしくお願いたします。(鷲塚 由美子)



1枚目の写真は先日、野田村の漁師さんの所へご挨拶をしに行った時の風景です。プカプカとゆっくり揺れる船の上で、漁師さんと雑談をしている時間は何か懐かしくもあり、私が岩手県に来て沢山新しい事を教えてもらった場所でもあります。

私の今までの三陸での活動や繋がりをもとに、今後も引き続き岩手県と関わりながら一緒に地域を盛り上げていきたいと思っています。(町田 恵太郎)

Facebook に頂いたコメント

「大変お疲れ様でした。有難うございました。(大槌町・I様)」

「大変御世話様になりました!! 感謝感謝です本当にありがとうございました。どうぞ益々お元気でね新しい挑戦をして下さいませ。ご発展を心より祈念申し上げます。(S様)」

「おつかれさまでした。新しいところでもご活躍を祈念申し上げます。(広島県 S様)」



《三鉄ジオトレイン》で早春の碁石へ

今回の三鉄ジオトレインは震災学習列車を体験し、南リアス線で大船渡市へ。車内では震災以前の写真を見比べて、山の形が同じという手がかりから現地を確認しました。欲張りツアーでしたので、急ぎ足となりましたが、絶好の天気にも恵まれて碁石海岸の景勝地を認定ガイドの案内で周遊しました。



盛駅からの参加者と合流し、皆さんで「さんてつだいすきー」パチリ



自生している梅の花を見ながら、認定ガイドの説明に「なるほど」



まっすぐなトンネルを登っているので入口の光が見えています。震災当時の写真と合わせて撮りました。



浜海防波堤が目立つことに気が付きました。磯遊びをくると幸せになれるとか？次回にはサップ船で行きましょう。

《震災から12年経って知ったこと》

田野畑村の明戸海岸には、津波で激しく破壊された防潮堤の震災遺構があります。以前は明戸キャンプ場などがあり、賑わっていた場所です。今は、新しく建設された防潮堤と園地が整備され、キャンプ場はその陸側に守られるような位置に再建されました。今回初めて聞いたのですが、明戸海岸は震災前、原子力発電所の建設の候補地になったことがあったそうです。しかし地域の女性の方を中心に建設に反対する住民運動がおこり、つくられることはなかったのですが、もしもそのまま建設されていたならば、今回の津波災害では非常に大変なことになるのではないかという事でした。この話も地域の歴史で大切な事実の一つです。知らなければ、そして伝える人がいなければ気づかないことです。他の地域に比べて三陸は津波災害が多く、深く入り組んだ地形に押し寄せる津波は高く過します。自分たちの住む地域のことや過去にあった出来事、それにつながる大地の成り立ちを理解し、先人の思いが詰まった土地と自然の上に、いまの私たちの生活があるということを忘れないように伝えていきたいと、改めて思った一日でした。

《こんさち！いわて》

いわてマンガプロジェクトには、たくさんの漫画家さんたちによって岩手県にまつわるエピソードが紹介されています。→「コミックいわてWEB」すぐ読めます！
→ <http://comiciwate.jp/>
その最後のページに《こんさち！いわて》というコーナーがあります。岩手県公認のV-Tuberの岩手さちが三陸に関する話題や、ジオパークやジオサイトの紹介もしています。



最近公開されて、アクセス数が急上昇の新作アニメもこちらからどうぞご覧ください。↓↓
[アニメ『ゴールデンゴッド』第5話「巡れ！黄金に輝く海の巻」](#) - YouTube



配置先が三陸ジオパークということで、たくさんご縁と新たな出会い、そしてジオの観点で地域の魅力を実感し再発見し、とても楽しく業務にあたることができました

地域の皆さま、ジオパーク関係の皆さまには大変お世話になり、ありがとうございました。ジオパークの現地推進担当の隊員のみなさんとは特に一緒にさまざまな取り組みがありましたが、「ジオだより」の発行やジオタウンのイベント開催においては、この応援隊メンバーでなくてはできなかったと思うことが多々あり、大変感謝しています。

最後に発行した「ジオだより」をここで紹介させていただきます。

私は、引き続きジオパーク推進員として、三陸ジオパークの事務局に在籍することになりました。どうぞ宜しくお願いいたします。(阿部 智子)

編集後記：春は別れと出会いの季節です。三陸ジオパークの現地推進員として紙面を毎回担当してきた「いわて復興応援隊」の隊員も、今号で卒業することになりました。
町田隊員「皆さまお世話になりました。来年度からは認定ガイドとしても頑張ります！」
菊池隊員「ジオパークを通して、より広域のより多くの方々と接することができて、わたしの財産となりました。また、何処かでお会いしましょう！合言葉は“みんな大好きジオパーク！”」
里館隊員「取材していて地域の事が良くわかりました。ジオパークは面白いのでこれからも勉強します。」
阿部隊員「知識が変わって、景色が変わりました♪」
新たなステージにてお会いしましょう！ ~と~

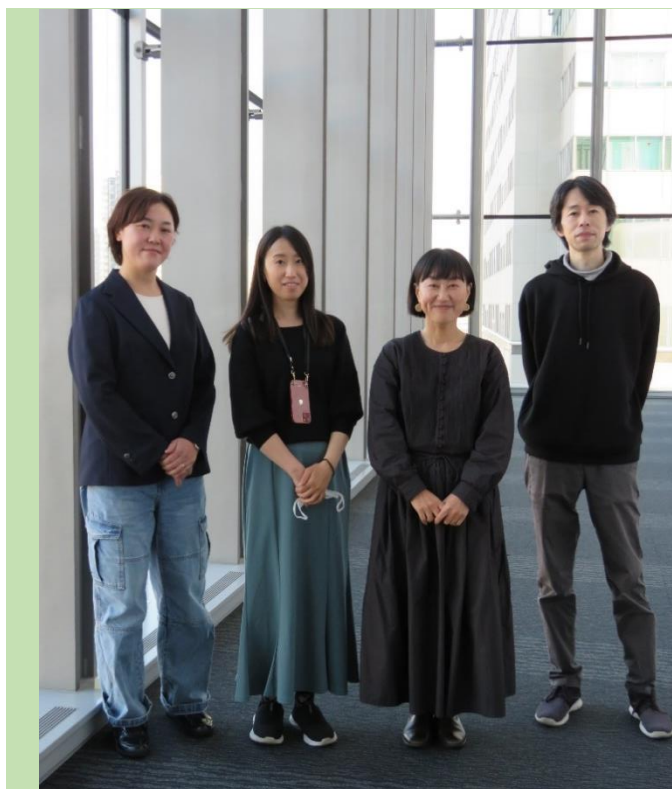
応援隊が支援する最後の「さんりくジオだより第90号」の編集後記に隊員からのメッセージが記されている。



Until We Meet Again

いわて復興応援隊
インタビュー

いわて復興応援隊インタビュー【盛岡編】



-左から-

峠館 絵里さん(旧姓:田村・雫石町在住)
活動期間:2013年4月15日~2023年3月31日
配置先:田野畑村産業開発公社
三陸総合復興準備室
(公財)さんりく基金DMO事業部(三陸DMOセンター)

及川 理香子さん(盛岡市在住)
活動期間:2020年4月1日~2023年3月31日
配置先:岩手県ふるさと復興部県北・沿岸復興室

佐藤 有子さん(盛岡市在住)
活動期間:2017年4月1日~2020年3月31日
配置先:三陸防災復興プロジェクト2019推進室

真部 涉さん(盛岡市在住)
活動期間:2018年6月8日~2019年8月31日
配置先:三陸防災復興プロジェクト2019推進室

インタビュー場所:いわて県民情報交流センター「アイーナ」

— ご多忙の中お時間いただきましてありがとうございます。まずは皆さんの近況をお聞かせください。

(佐藤) 応援隊を辞めてから3年になるんですね。

今は(株)PUBLIQという会社に所属して、公民連携事業を行っています。2017年の都市公園法改正が契機となり始まったPark-PFI制度(※)などを活用し、行政と連携して都市公園経営に取り組んでいます。紫波町のオガールが先進事例として全国的に注目されていますが、弊社が参画する盛岡市中央公園でも年間30組程度の視察を受け入れていて、遠くは宮崎や沖縄など県内外からお越しいただいています。

※ Park-PFI: 公募設置管理制度。公園に施設を設置して運営する民間事業者を公募により選定する制度。



(真部)



プロジェクトの終了後まもなく、応援隊を辞めて盛岡で起業しました。立ち上げ当初は、地域の経営課題を解決するコンサルタントのような会社で、潰れかかった英語塾の立て直しや、青森の方で学生のスタートアップを支援したりしていましたが、気がついたら自分で塾を経営するはめになっていて。

なんかご縁があって盛岡で高校生が幅広い選択肢をもって勉強して欲しい、様々な選択肢を持って欲しいという事を目指して運営しています。キャリア形成を目的として、生徒がやりたいことを伸ばしてあげたいと思っていますので、受験塾ではありませんとは言っています。

それにプラスして、いわて地域おこし協力隊ネットワークの理事をやっていて、理事の多くは協力隊経験者なのですが、応援隊(復興支援員)の経験はちょっと色が違うので、また違う視点で見られるのではないかと考えています。

(及川) 私は以前にも携わっていた土木関係の仕事に戻ったような形です。
測量をしたり図面を書いたりする仕事で、今は主に山に行き、舗装道路を作るために必要な材料の計算をするための測量を行っています。鉋と測量道具をもって、道路から外れた藪の中にずんずん入っていくんですよ。虫とか熊とか怖いんですけど、なかなかできない経験なので、今のところは楽しくやっています。
実は、応援隊時代にポスターやパンフレットで協力させていただいた方々から、今年もどうですか？と数件お声がけがあったんですが、こういう仕事なので締切などの確約ができず、お断りしたのが申し訳なかったという感じです。
応援隊を終えてからも、急に海が見たくなったり、美味しいものを食べたくなったりして、休日沿岸方面に車を飛ばしたりしています。



一 峠館さんは、応援隊として10年の活動をやり切りましたね。



はい10年ですよ。
応援隊の最終任期を県から伝えられてから、この次はどうしようかなと思って就活していたんですが、ここのアイーナ5階の環境学習交流センターを運営している環境パートナーシップいわてというNPOにお世話になっています。
主な担当は、温暖化防止いわて県民会議が設置している「いわてわんこ節電所」というサイトの運営、環境学習交流センターのwebサイト内の、いわて環境情報板の情報収集や、新設した先進企業取材レポートのコーナーを担当していて、県内の環境先進企業に取材して記事を書いています。
今の業務は、応援隊時代に担当した「さんりく旅するべ」(※1)の取材や編集の経験が存分に活かされていると思っています。

※1 さんりく旅するべ: 三陸DMOセンターが運営する三陸の観光サイト

一 応援隊に応募するきっかけについてお聞きします。このメンバーでは当時の記憶が一番新しい及川さんから伺います。

(及川) 私は、応援隊の前は三陸防災復興プロジェクト2019(※2)の事務局に採用された県の臨時職員で、その任用期間が終わる頃に、応援隊として活動しないかと声をかけていただきました。
臨時職員の時も応援隊の時も志望動機は同じですが、まず自分の親族が三陸に所縁があるということで、機会があれば三陸復興に関わる仕事をしたいと思っていたことと、また震災の頃、自分は県外に居たため、震災についてきちんと知りたいと思っていたことが大きいです。臨時職員から応援隊に変わる時は、応援隊ならもっと深く関われるという期待が強くなったことを覚えています。



※2 三陸防災復興プロジェクト 2019

岩手県沿岸13市町村で開催され、復興に取り組む地域の姿や三陸地域の魅力を発信したイベント。これにより生みだされる効果や三陸の魅力を継続して発信するためその後もプロジェクトとして継続されている。

(真部) 私は、ちょっと記憶が曖昧で…震災の時は、前の会社で札幌にいました。会社でもかなりの被害を受けていて、視察に行った同僚から状況は聞いていて、その話はどこか心の片隅にあったと思います。あるところで、次のステップにチャレンジしてみたいなど考えていた時にそのことを思い出して、それまで何の縁もなかった“東北”で検索をしていた時に、ちょうどタイミングよく岩手から応援隊につながったと記憶しています。

一 応援隊のイメージと実際の活動との間にギャップというのは感じませんでしたか？

(真部) どちらかというとミッション型で課題を与えられていたので、ギャップは感じませんでした。そばに先輩隊員の佐藤さんや阿久津さん(宮古市配置)が居たのが心強かったのと、職場の県の方々が本当に良くしてくれました。活動が進むにつれて、ジオやDMOなど様々な活動に取り組んでいることを知ったので、比較的スムーズに入っていけたと思います。

一 佐藤さんは、応援隊前は香川でお仕事されていたんですね。

(佐藤) 香川県の瀬戸内国際芸術祭の実行委員会にいたんですが、2016年の閉会直前に、岩手県の観光コーディネーターの方と県職員の方が視察にいられて、一緒に話をする機会があったんです。芸術祭が終わったら私は岩手に帰る予定だということ話をしたときに、震災から10年という節目を前に、三陸沿岸一帯を会場とした事業構想があるというお話を伺いました。

震災の頃は盛岡に居てボランティアも経験していましたが、お二人から事業開催の目的や三陸の今後の話などを伺って、大事な事業だなと思いました。その時点では、応援隊の詳しいことは聞いていませんでしたが、事業に参画する一員となるため、応募することになりました。

採用後1年間は、マリオスの事業準備室で応援隊3名と県職員合わせて10名程度の少人数体制で、事業内容の検討などをしていました。事前調査ということで頻りに三陸に通い、被災・復興の状況や地域の文化などを学びました。事業概要や中身がなかなか決まらず不安もありましたが、「三陸防災復興プロジェクト2019」の開催が発表されると、事務局が盛岡合同庁舎に開設され、メンバーが倍以上に増えて新体制となり、本格的に事業推進に臨むことになりました。



瀬戸内国際芸術祭: 瀬戸内海の島々を舞台に、現代芸術や建築、音楽、パフォーマンスなどの作品を展示する国際的芸術イベント。2010年から3年に一度、春・夏・秋の3つのシーズンにわかれ開催される。佐藤有子さんは、2013年、2016年の開催に関わった。

一 峠館さんは、2013年4月着任の応援隊2期生ですが、応募されたきっかけなど覚えていますか？

(峠館) いや～10年長いですね。震災の時は東京にいて広告代理店に勤めていました。職場のモニターに映し出された津波の映像を見て「これって岩手のこと」とショックを受け、どうにかしたいと悶々としながら、行動に移せない日々が続いていました。

ある時、東京・銀座のいわて銀河プラザで「いわて復興応援隊募集」のチラシを見て興味が湧き、有楽町のふるさと回帰支援センターでの説明会に行きました。その説明会で、すでに活動している首都圏出身の応援隊3人の活動紹介をしている姿がとてもキラキラしてました。

県外出身の隊員が、岩手の被災支援についてこんなに熱く語っているのを、岩手出身の自分が聞いているということが何か不思議で、ものすごい刺激を受けました。応援隊の話を知りまでは、岩手へのUターンまでは考えていませんでしたが、彼らのオーラに圧倒されて「いいな、応援隊に入りたいな」って思いました。

いわて復興応援隊 セミナー&募集説明会

募集説明会の入場は自由ですが、事前のお申し込みをお勧めします。 ☎019-629-5194 ☎40007@pref.iwate.jp

1月19日(土)
●10:00-16:00(15:00)
マリオス183、184会議室
〒019-621-5000

1月25日(金)
●10:00-16:00(15:00)
ふるさと回帰支援センター
〒03-6273-4401

1月26日(土)
●10:00-16:00(15:00)
岩手県産業事務所分室
〒020-8570

いわた定住・交流促進連絡協議会 (岩手県庁地域振興室内)
〒020-8570 岩手県盛岡市南丸10-1 ☎019-629-5194 Mail:AB0007@pref.iwate.jp

都内において、2013年1月25日と26日の両日、「いわて復興応援隊セミナー&募集説明会」を開催。会場では、応援隊1期生の菅原久美子隊員(陸前高田市配置)、宮本慶子隊員(洋野町配置)、町田恵太郎隊員(野田村配置)がそれぞれの活動についてプレゼンを行った。

一 これまでの活動の中で最も印象に残る活動や経験について伺います。

(及川)



私がメインでやっていたのは、三陸防災復興プロジェクトの web サイトの更新や、SNS による三陸の情報発信だったんですけど、正直、最も印象深いのは応援隊の田川さん(宮古市配置)の「明日の浜人発掘事業」のお手伝いですね。正直それまで私が行っていた情報発信の業務は盛岡の事務所に居ても最低限のことはできるものだったんですが、浜人事業は県立宮古水産高校の PR を支援するため、田川さんに付いて現地を回り、授業の様子を見させてもらったり、実習船を見せてもらったり、生徒の話を生で聞いたりしました。

話を聞いてみると、「親が漁師だから水産高校に入った」という生徒から、漁師という職業をピンポイントで選んで県外から宮古に来たという生徒まで、いろんな立場の子たちが混ざり合って学ぶ、環境の多様な価値観と自由度に驚きました。半年くらいの間でしたが、この事業に関われたことで、表面的な情報発信から地域に触れて情報を掘り下げる大切さを改めて感じ、自分にとっては仕事のやり方を見直す転換期になったと思います。

自分にとっては仕事のやり方を見直す転換期になったと思います。

「明日の浜人発掘事業」:水産業に携わる人材の発掘を目的に将来を担う中学生に職業の選択のひとつとして水産業への理解を深めてもらうことを目的に県宮古水産振興センターが県立宮古水産高校との連携で実施する事業。



(真部)

佐藤さんと文化・芸術という分野に知見があり、阿久津さんは鉄道に詳しいとか、それぞれ力が発揮できると思いますが、自分にはそのような素地がなく、ジオ関係の展示とかフォトゲイニングの運営とか、これまでの人生ではまるで関心がなく強みもない分野を担当したんです。

自分の性格上、知らないとかいやだと思うことはあっても、やらないという選択肢はなくて、とりあえずやってみて、何か面白そうなポイントを見つけるところはありまして、結果として「自分はこういうことに興味があったんだ!」と意外な気づきがあったことが印象に残っています。プラタモリを見て 10 年前の私ならそんなこと興味なかったはずなのに「タモさん、凄い!」とか言っている自分がいます(笑)

フォトゲイニング:地図をもとに時間内にチェックポイントを回り得点を集めるスポーツ。チェックポイントでは見本と同じ写真を撮影し、チームメンバー全員が写るようにする。2019年6月15日、岩手県沿岸地域で初開催となる「三陸ジオパークフォトゲイニングフェスティバル」が開催された。



(佐藤)



三陸防災復興プロジェクト 2019 さんりく文化芸術祭で上映のオペラ「四次元の賢治—完結編—より

私は、三プロで文化芸術事業を担当させてもらいましたが、地元住民の方との直接的な交流はあまりなく、オペラ公演の受託事業者さんと関係先との調整をしながら、無事に成功することに集中していた気がします。公演後、涙していた方や、客席からの感想を聞いて、地元のみなさんの心に届いたと胸が熱くなりました。

三プロに関わって、国連防災機関(UNDRR)の方や音楽プロデューサー小林武史さんなど、日本の第一線で活躍される方々とお会い出来たことも嬉しかったですが、それ以上に、このプロジェクトを成功させるべく、一丸となってチームを創り上げ事業を完遂した推進室の皆さんの仕事ぶりや、課題に向き合い事業を推進していく姿勢に感銘を受けたりと、身近にいた上司や仲間たちの姿が印象に残っています。

一 これまでの活動の中で最も印象に残る活動や経験について伺います。

(峠館) いろいろありますが、プランナー養成塾(※)とかは、様々なところに行かせていただき、多くの体験もさせていただきました。体験取材して、文書にして人に伝える楽しさを学べて、今の仕事にもつながっていることがありがたいです。

※ 三陸観光プランナー養成塾

三陸DMOセンター(さんりく基金 DMO 事業部)が三陸沿岸地域の豊かな自然・食材の恵み・郷土文化等を生かした体験プログラム等の企画を担う人材育成を目的に実施する研修プログラム。

それとも一つ、応援隊時代の重要な出来事は、ずっと一緒に歩んできた相棒のことで、田野畑では仮設住宅に住まわせてもらっていたんですが、そこで出会った猫です。出会ったときにすごく人馴れしていたので、多分、他の入居者の方が、出られる時に手放さざるを得なかったんじゃないかと推測したんですが、いたずらでおやつをあげたら、ほぼ毎日自宅前に顔を出すようになって。回りに相談したら“しかたないね”ということで、ちょっと遠くの山の方に置いてきてくれたんですけど、10日くらいしたら、入口から可愛い声がして・・・これは運命だと家族になりました。遠くに置いちゃったことの凄くすごく反省しました！田野畑から盛岡への異動の際も一緒に矢巾の実家で暮らし、結婚して今住んでいる雫石でも元気に家族しています。



一 皆さんは、三陸沿岸地域のこれからについて、こうなって欲しいなという思いがありますか？

(佐藤) プロが終わって、自分にとっての応援隊の活動も終わり、沿岸に行く機会が減りましたが、もっと多くの人に三陸の良さを知ってもらいたいし、沿岸のみなさんが穏やかに過ごす日常が続くよう願っています。それと沿岸に限らずですが、最近では全国で若手の首長などの活躍を目にする機会が増えたので、県内でも新たな時代の感性で街づくりを行うリーダーの誕生に期待します。

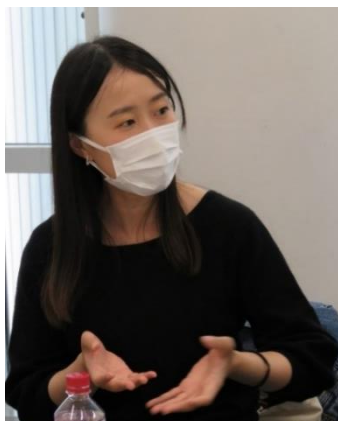
以前生活した香川の人とは今も交流があって、もうひとつの故郷のように思っています。香川の友人を三陸に案内したり、洋野町のウニなど美味しいものを送り合ったりして楽しんでいるんですよ。沿岸との交流もずっと続いていくと良いなと思います。

(真部) 今は、沿岸に仕事で関わることはないんですが、札幌にいたときの知り合いが、三陸に行くというのでルートとか見るべきところとかアドバイスできたので、これは活動で得た知識を使っているなと感じます。岩手から東京への土産とかも沿岸のものという選択が出てきますね。

これまでも全国点々と仕事していますが、住めば都という方なので、住み難さとか感じないのと、長野と岩手(盛岡)は似ているところが多いので、ネイティブな言葉で困ることはありますけど全然苦にはなりません。今、塾やっていますが、商売という感覚より、それがきっかけでどう岩手に還元できるかという視点でやっています。

今年東大に合格した学生をスタッフとして雇っているんですが、彼が持っているノウハウを高校の後輩達に還元して地域格差をなくす取組をしてもらっています。医者が少ないなら医学部へ、そのもっと前に医学部を目指すという身近な先輩がロールモデルになって子供たちが後に続く、そういう人づくりの取組を、教育業を通してやっていきたいと思っています。各地で仕事してきて断言できますが、岩手の子たちは能力が高くて真面目、素直だし伸びます。情報格差的な機会均等の問題があるとは思いますが、今はオンラインも活用できるし、十分期待できます。

(及川)



陸前高田に親族が住んでいるので、高田の街を見る機会があるんですけど、思っていたより人の戻りが少ないなと感じます。ハード整備はほぼ終わり、中心市街地も出て、公園には若い夫婦や子供がいっぱい溢れているのに、視線をずらすと空き家がいっぱいで不思議な気持ちになります。きれいな街なだけけど、無機質というか、ホントはもっと賑やかになる予定だったんだろうなと。

なので、非現実的な意見というのは承知で、水産系、海洋系に特化したキッズニア的な、そういう土地ならではの生業に触れられる施設が作れたらなって思ったりします。先ほど話した明日の浜人での体験のように、子供の時から水産業に触れられる機会があったら、私も土木じゃなくて水産を選んでいたかもしれません。楽しんで水産業に触れられる唯一無二の施設みたいなのが沿岸地域にあればなと思います。

(峠館) ああなって欲しいとかこうなって欲しいという願いより、自分がどのようなスタンスで仕事したいかが重要だと考えているんです。SNS上では表向きはキラキラしているんですが、その裏側や後側にどのような問題があって、どのように解決すればいいのかを大事にしたいと思っています。企業に取材に行くと、一見地味ですが結構すばらしい取組みがあって、うちの NPO でも、堅実に環境問題に取り組んでいる企業を紹介しようということで、自分も率先して調べながらやっていきたいと考えています。

地域というより、行政の皆さんにお考えいただきたいのは、数字とか表面的にいいところだけでなく、数字は低くても質は良い場合もあったり、数字は良さそうに見えても失敗だったり、ダメだったりすることももっと共有して見せていくことも大事だと思うんです。

キラキラしたことばかりじゃなく、地味でも小さくてもいいものを引き出すこと、そういう支援をアンテナ高くしてやってもらえたらなと思います。私も今の仕事でそういう姿勢で臨むようにしています。



— 応援隊を経験して良かったですか？

(峠館) 取材力やカメラの撮影の技を活動の中で学べたこととか良かったですね。今の仕事にどんどん生かしていきたいと思えますし、三陸復興支援から今度は岩手の環境づくりに貢献できるようがんばります。

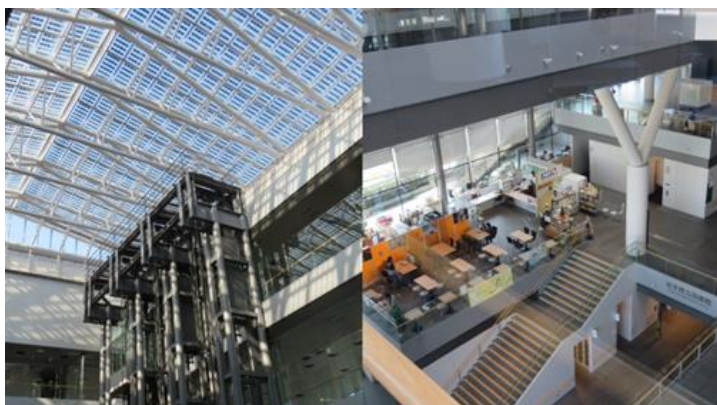
(及川) まず志望動機でもあった、震災について知りたいが叶えられたのが一番です。隊員になっていなかったら、こんなに積極的に震災に関するシンポジウムを聞いたり、イベントに出たり、防災について考えることはなかったと正直思います。震災だけではなく、地域のお祭りや歴史、文化、伝統、それに関わる人の想いなどにも触れられたのが、本当に良い経験でした。今の仕事には災害時の測量というのがあり、出勤する可能性もあるので、そうしたら応援隊時代の経験で、少しは被災地に寄り添った動きができるのかなと思います。ちょっと、こじつけみたいですけど。

(真部) 応援隊として活動することがなければ、おそらく踏み込めなかったであろう分野に関わることができたことで、いろんなことを許容する柔軟性がついたかなと思います。キャリアとしてはすごく良い時期を過ごしたと思います。

(佐藤) 応援隊の活動を通じて、たくさんの素敵な人たちに出会えたのが財産で、専門支援員のみなさんをはじめ、職場のみなさんにも助けてもらいながら、良い経験を積むことが出来ました。これからも、このご縁を大事にしたいなと思っています。



いわて県民情報交流センター「アイーナ」 (岩手県盛岡市盛岡駅西通1-7-1)



アイーナは、いわて復興応援隊の募集説明会や活動報告会、復興支援員・地域おこし協力隊の合同研修会などにこれまで数多く使用してきた県の交流施設です。

県立図書館や多目的ホール、盛岡免許センターのほか、岩手県立大学アイーナキャンパス、子育てサポートセンター、高齢者活動交流プラザ、青少年活動交流センター、男女共同参画センター、国際交流センター、NPO 活動交流センター等も設置されています。

元応援隊の峠館さんが活動する環境学習交流センターは、建物の5階にあります。

いわて復興応援隊インタビュー【宮古編】



【左】

阿部 智子さん(大槌町在住)

活動期間:2020年8月18日~2023年3月31日

配置先:三陸ジオパーク推進協議会事務局(宮古市)

【右】

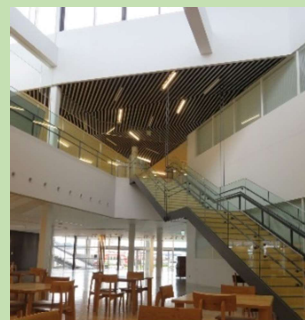
田川 深青さん(宮古市在住)

活動期間:2020年8月18日~2023年3月31日

配置先:県沿岸広域振興局宮古地域振興センター

(連携先:同水産振興センター)

インタビュー場所:宮古市・イーストピアみやこ



一 阿部さんは、応援隊の任期終了後も引き続き三陸ジオパーク推進協議会の事務局員として活動されていますが、業務内容とか変わったこととかありますか？

(阿部) 応援隊の任期が終了して、引き続き三陸ジオパーク推進協議会の直接雇用でお世話になっています。基本的には同じ業務ですが、今年度は文化庁等が進めている2025年日本国際博覧会という事業にも関わっています。昨年度、釜石で開催したジオタウンのイベントの経験が今年の活動のベースになっています。企画から運営までほぼ任されていて、当時の応援隊仲間との連携プレーを思い出しながら進めています。今年度は、事務局長はそのままで、事務局のメンバーも1人異動されましたが、地質の専門員の方が入ったので、ある意味凄く安心感があります。

一 田川さんは、子育て真っ最中ですが、郷土芸能の指導は今もされているのですか？

(田川) 岩泉高校の中野七頭舞のコーチ(※1)は、引き続きやらせて頂いていて、新型コロナが5類になってからは子連れOKになったので、子連れで毎週通っています。

一 改めて、応援隊になる時のきっかけや応募動機を教えてください。

(阿部) 当時働き口を探していたので、求人を見かけて応募しました。年齢的に近所のパートしかないなって思って半ばあきらめていたのですが、ちゃんと月の給料がもらえて、社会保険があるというのが一番でした。資格も何もない私ですが、でもやれそうかなっていう、そんな感じがあったのが正直最初の動機です。



確か、当時の応援隊募集は4つの事業があって、私はこれという希望はなくて「どれでもいいので採用してください！」みたいな感じで応募したんです。ジオパークは聞いたことはあるけど、全然理解していない状態から活動が始まりました。

(田川) 私の場合、ちょうど宮古に移住してきたばかりで、地域活動に関心があったので地域おこし協力隊をやろうかなって思っていたのですが、宮古の振興局に知り合いがいて、「それなら県が募集している復興支援員に応募して」とお誘い頂いたのが経緯です。復興と地域に関わる仕事ができるというので応募を決めました。

復興支援って、行政単位で様々あると思うのですが、パッと見たときに一般の人にはわかりにくいですね。自分でも復興に関わるなんて思っていなかったのが、復興というより地域活動をしたいという感じでした。



一 応援隊の活動は、イメージしていた通りでしたか？

(阿部) ジオパークって何だろう？から始まって、先輩隊員の林さん(三陸ジオパーク推進協議会配置)と地域を回って歩いて、「あれもジオだ、これもジオだ」っていういろんな事がわかったのが、凄く助かりましたね。元々、自分は(地域の)外から来た人間なので、地域づくりには、その地域資源を活用すれば良いというように、単純に客観的に見られたんじゃないかなって思っています。地域おこし協力隊の皆さんが、そのような目線で活動・活躍することの意味も凄くわかります。

(田川) 実際の活動は自分のイメージとのギャップしかなかったです。何をしたらよいのかわからなかった。最初、私が持っていたイメージは、地域おこし協力隊の方に近かったのが、自分で動いていいのだと思っていたんですが、それが自分では動くなされてから全部が躓いてしまい、ただただ時間をつぶしているようで、人生がもったいないのではないかなと思うようになっていました。

一 受入先と具体的にこうやっていこうよと対話するとか相談する機会はなかったですか？

(田川) 残念ですが全くなかったです。そもそも受入先の方も「応援隊って何？」って感じで、県の仕事は任せちゃいけないし、仕事の一部をしてもらって補助職員でもないし、何をしてくれるのかもわからないし、こっちもどこまでやっていいかわからない。そうして何にも出来なくなってしまい…(先述した)応援隊のお誘いをくださった方に相談したら、「そうだよ、それならもっと一緒に外に行こう！」と言って下さったんですけど、その直後にその方が異動になってしまっただけで…。その後は自分の出来ることをと頑張ったのですが、例えば県事業は SNS 発信ひとつとっても、その都度決裁が必要であるとか、制約も多かったんです。でも SNS については自分のほうが県の人よりはわかることが多かったのが、そこは重宝されましたけど、一日中 SNS をやっているわけでもないで…。



一 阿部さんは、三陸ジオパークの活動で一番印象の深い出来事ってなんですか？

(阿部) やっぱりイオンタウン釜石で開催したジオタウンでしょうね。とにかく「ジオパークで楽しいイベントをやりたい」と思うところから始まったのですが、いろいろと欲張りすぎていたようで、準備もとても大変でした。


本当に短期間で企画から準備、当日の運営までやり遂げられたのは、応援隊でジオパーク現地推進員でもある町田さん(久慈市配置)、里舘さん(宮古市配置)、菊池さん(釜石市配置)、それから及川理香子さ(盛岡市配置)、皆さんがいたからこそできたと思っています。

一 田川さんは、自分の活動で印書深い活動は何ですか？

(田川) 「宮古の真鱈」ブランド化事業関係(※2)ですかね。応援隊にお誘い頂いた知り合いの方とペアになった仕事で、結構勝手に動かしてもらえました。グルメフェアの参加店にお店にインタビューしたことを SNS で発信してみたら、お店の方も喜んでくださったんです。地元の人々の声を表面的ではなく、こういう思いでお店をやっているとか、きちんと発信することが大切なのだと思います。最後の真鱈祭りでは、宮古市役所の方と連携してお手伝いできるというのも面白かったですね。

(ここで、お子さんに我慢の限界が来てしまい、ご機嫌が急降下。田川さんへのインタビューはここで終了となりました)

一 阿部さんはジオパークを知って、自分的に何か変わりましたか？

(阿部)  応援隊にならなかつたら、ジオパークにもここまで関わることはなかったと考えていくと、自分の意識は変わったと思います。地域とジオを繋げられるガイドさんが各地にはいても、行政の方にもっと増えないと繋がらない。ジオパークをやっていくのであれば、各分野でその(ジオパークの)観点がわかる人がそれぞれの地域に増えていかないと、多分厳しいだろうと思っています。

郷土芸能ともジオは繋がっていて、虎舞とか獅子踊りは江戸時代に房州(千葉)から当時物流と一緒に伝わった歴史があると聞いていましたが、それが可能となったのは、三陸の特徴的な地形のため。交易に最適で良好な港があり、各地にそれぞれの文化が育まれる環境にあったという話で、三陸の郷土芸能は世界から注目されるほど各地に沢山あるということをジオパークで学びました。

一 これから先の三陸の復興や地域の暮らしはどうなって欲しいと思いますか？

(阿部) 基準は人それぞれなので何とも言えませんが、大植を例にすれば、家は増えてはいないし空き地はそのまま。でもそれは仕方ないことですよね。なんとというか、量より質・かなって思うんです。人口が減るのは、もう大植だけじゃなくて三陸全体だし、日本全体の問題ですよね。暮らしていくのに困らなければいいぐらいにしか思っていないくて、その中で人との関わりで豊かな時間ができれば、それが一番かなと思います。

地元で高校まではあるけど、その先の進学となったら盛岡や仙台とかになる。だから子供たちは、一度は地元を出て行くことになるけど、出てみて地元の良さを分かるんじゃないかなと。地方はどこも同じような課題があると思うので、地域の魅力を自分達ももっと気づこうよってとても思っていて、その度に(地域おこし協力隊や IJ ターンで)外から人が来て地域の人に関わるというのは、良いきっかけになっていると思います。(ジオパークの活動も同じことにつながるので)やっぱりそこに私は行き着きますね。

※1 東京都出身の田川さんは、中学生の時に民族舞踊を見て中野七頭舞(岩泉町)や黒森神楽(宮古市)に出会い、師匠について舞を学び、結婚を機に岩手に移住してからは、岩泉高校郷土芸能同好会に中野七頭舞の指導をしており、応援隊任期中も地域支援活動として継続し、岩泉高校は、2021年10月「第44回岩手県高校総合文化祭郷土芸能発表会」において、優秀賞一席に選ばれ、来年の全国大会出場を果たした。

※2 「宮古の真鱈グルメフェア」は、全国有数の水揚げ・抜群の高品質を誇る「宮古の真鱈」のオリジナルメニューが沿岸をはじめ県内のフェア参加店で味わえるイベント。期間は例年12月初旬から1月末で、主催は岩手県沿岸広域振興局水産部。関連イベントとして、宮古市の「宮古真鱈まつり」(主催:同実行委員会)が、宮古市魚市場特設会場で1月に開催される。



いわて復興応援隊インタビュー【大船渡編】



【左】

中野 貴之さん(大船渡市在住)

活動期間:2013年4月15日~2018年3月31日

配置先:一般社団法人大船渡市観光物産協会

【右】

佐藤 秀則さん(陸前高田市在住)

活動期間:2013年4月15日~2017年3月31日

配置先:NPO法人夢ネット大船渡

インタビュー場所:

大船渡市防災観光交流センター「おおふなぼーと」



一 応援隊任期中は、お二人とも大船渡市を拠点に活動されましたが、現在のお仕事など近況をお聞かせください。

(中野) 応援隊終了後、そのまま受入先の大船渡市観光物産協会にお世話になり、当初は嘱託職員の身分でしたが、その後、正職員となって3年目になります。

勤務先は協会本部で、観光客誘致拡大事業の国内担当として、営業職を仰せつかっています。人と話すことをあまり得意としない自分が、営業という立場になったのも不思議な話ですが、関わりの薄い関東や関西方面へ商談会等で出張に出かけたり、担当する別事業「大船渡さんま焼き師認定試験(※1)」の関係から、長崎県から要請を受け、世界で唯一の資格である「さんま焼師」の一人として、さんまを焼いたりしています。大好評だった「三陸・大船渡東京タワーさんままつり」は令和2年に終了しましたが、令和4年からは有志が集まり、代替イベント「大船渡さんまDAY」が開催されています。このほか、私自身が関わったイベントとして、盛岡市のオーロパークにて「さんまの炭火焼コーナー」を市内水産業者の要請で出展しましたが、600匹用意したサンマが開場とほぼ同時になくなりました。

(佐藤)



応援隊の活動終了後、ご縁があつて陸前高田市の職員に応募したところ、短期の臨時的な職員と思っていたら納税に関する任期付きの職員ということで、今年度で6年目になります。

はじめは政策推進室でふるさ納税を担当していて何もわからない状態。次はまちづくり戦略室への異動でしたが、そのままふるさと納税を継続して担当しました。

長く民間にいた自分に何が出来るかと考えましたが、とりあえず仕事の効率化を提案し実行することに努めました。

一 応援隊に応募したきっかけは何ですか？

(中野) 応援隊になる前は、兄貴と二人で看板製作関係の会社をやっていたんですが、震災の影響もあつて業績も苦しくなつたので新しい仕事を探していたところ、アイーナ(盛岡)の図書館で、応援隊の募集チラシを見たんです。震災後、ボランティアの経験はあったんですが、特に現地で役立つような何か特技とか資格もなかったの、自分では無理かなと思っていたら募集要項に“ガイドの会”という文字が目とまったんです。

昔、バックパッキングで南米パタゴニアの大氷河に行った時に、素晴らしいガイドに出会ったことがあつて、大自然のパノラマも素晴らしかったのですが、ガイドの演出で感動が増幅した経験が忘れられず、それもあつて観光には興味があつたんです。決してガイドになろうとしたわけではありませんが、ガイドの事務局ということで観光に携われたらという思いで応募しました。

(佐藤) 私は、震災のちょうど1年前に会社を早期退職して独立していたんですが、震災が起きてからは、大船渡や陸前高田に盛岡から支援物資を運んでいました。父が銀行員で、自分が転勤先の大船渡小学校出身ということで土地勘もあり、以前の職場の後輩がいたので、まず彼らの安否を知りたいのと物資を運びたいということで、アピオから物資を受け取り半年間続けました。

元々起業を計画していたので、起業支援制度に応募して支援金200万円を元手に大船渡で起業しようと思っていたんですが、応募直前に、担当者から起業を志している方たちのアドバイザーになってもらえないかと声がかかり、希望エリアも選べたので1年間その仕事に就きました。次はどうしようかと考えていたところ、起業支援の担当者から岩手県で復興支援員を募集しているみたいだと紹介されたんです。決め手になったのは、起業支援という項目が募集要項にあったことで、面接の時に、起業支援を念頭に入れていた受入先の方がその場におられたんです。

前職の経験がなければ、応援隊になることもなかったと思います。

一 応援隊の活動の中で、印象に残るものはありますか？ 三陸鉄道の企画列車も凄い人気で記憶に残っています。

(佐藤)



復興工事で来ている工事関係の方の、息抜き場(飲み屋)がないという声が聞こえてきて、いろいろ模索していたところ、当時、受入先の夢ネットが三鉄の盛駅の管理を任されていた関係で、三鉄を使えば何かできるかなと思ったんです。早速三陸鉄道に出向いて相談したところ、列車の貸切は可能だということになり、列車であれば酒を飲むのも食べるのもいいはず、と思いついたのがキッカケでした。

酒については、応援隊の平山さん(陸前高田市配置)経由で「県北の隊員から葛巻ワインさんが被災地で何か支援できることはないか検討している」という情報が入り、それならダメもとで交渉してみようと、大雪の中、葛巻に行って、企画を説明してワインを提供していただきたいとお願いしたところ、それなら飲み放題でやろうということになって「ワイン列車」が実現したんです。イベントは大盛況で、次は日本酒、次はビールとなり、地元ビールメーカーでは、実は話が来るのを待っていたと快く協力いただいたんです。お酒以外にも車内用の弁当など大船渡だけでなく、陸前高田、住田の飲食店にも声をかけ、持ち回りで用意してもらいました。

一 企画列車が「いわてさんりく恋列車」につながったんですね。

(佐藤) 「いわてさんりく恋列車」(※2)は、応援隊の岡本花織さん(旧姓:平山)から婚活パーティーをやってみたいと提案があって、列車と婚活を結び付けた婚活列車がひらめいたんです。じゃあ気仙地区に配置されていた応援隊みんなで行こうよとなって3回実施しました。「いわてさんりく恋列車」は岡本さんの功績だと思います。

列車だけでは淋しいということで、恋し浜の公民館でバーベキューをやって、地元の漁師さんにホタテやアワビも出してもらって酒は飲み放題列車で実績のあるメーカーさんに提供して頂きました。

被災地で取材をしていたNHKのディレクターが、偶然にも恋列車のチラシを見る機会があって、私からイベントの説明をしたところ興味を示してくれて、3回目の恋列車に同乗取材させてほしいということになって取材していただき、それが題材になって制作されたのが、NHKのドラマになった「恋の三陸列車コンで行こう!」です。

まさかそんな展開になるとは思いもませんでした。



— 中野さんは、途中から碁石海岸インフォメーションセンターに活動拠点が変わり、三陸ジオパークやみちのくトレイルなど三陸の魅力を伝える活動をされましたね。

(中野) 以前は、大船渡市立体育館近くのプレハブに観光協会の仮設事務所があり、着任当初はそこにいたんですけど、碁石海岸にインフォメーションセンターが新設されるということで、「住んでいる仮設住宅も近いし」ということで、活動拠点が移ることになりました。

施設管理とか事務職はしたことがなかったので、運営も企画も好きにやっていたといいと言われても何をやっていいかわからないし、佐藤さんのような凄いイベントはできないけど、何かやらなきゃと、兄が趣味で燻製づくりをしていたのを思い出して、ネットで検索したら段ボールで作る燻製づくりというのがあって、これやろうと提案したら「じゃあ誰が講師？」ってことで、言い出しっぺの私が付け焼刃でやってみたりして、そうしてやっていくうちに季節ごとに色々チャレンジして、何とか形になっていった感じです。

そうしているうちに、みちのく潮風トレイルが開通したということで、トレイルでイベントやってみようとなったんですが、「道歩くだけで人来るの？」と半信半疑というか 8割型否定的に思っていたんですが、やってみるとポツポツと人が集まってきて、そのうち、トレイルのイベントや整備に駆り出され

たり、だんだん自主的に参加するようになって、今はセクションハイクなんてやるようになりました。今は、本部所属になりましたけど、トレイルが趣味というか結構はまりまして、いずれはお遍路さんや熊野古道みたいな観光資源に、トレイルが育ってくれればいいなと思っています。

そもそも自分から動く方じゃなかったんですが、やらざるを得ない環境に置かれて、ポスターだ商品デザインだってやってみたら、配置先(所属先)の業務にちょうどはまった感じだったのかな。インフォメーションの企画とかも同じで、勝手にやって、運よく喜ばれて良かったということで、お陰様で今があるなと思います。



— 大船渡や陸前高田にこれまで関わってきたお二人ですが、今後について思っていることがあればお聞かせください。

(佐藤) 陸前高田市役所の仕事は、今年度で任期満了となるので、次をどうしようか考えていましたが「働かないという選択肢もあるな」と思い始めたんです。今、陸前高田で大き目の一軒家を借りて住んでいるんですが、ここは自然環境は申し分ないところなのに、それを活かさきれていなくて、外から来た人にできるだけ長く居てもらうためには？と考えたときに、ここだけで頑張るより、高田と大船渡、住田や釜石ともつながればいけないかと思っています。

岩手県、特に沿岸地域は、もともと閉鎖的なところがありました。震災で、外からの支援に対する感謝の思いが人と人をつないで開放的になったんですけど、震災から 10 年を経過して、またちょっと内向きになりつつあるというのをいろんな面で実感していて、なんとか出来ないかなという思いがあるんです。

私は子供の頃大船渡で過ごしたこともあり、今借りている家の庭木の手入れや雑草取りなんかやって、庭先で近所の方々と話したり、庭の柿や梅の実のおすそ分けとかしているうちに地元自治会にも入れてもらいました。近所のおばちゃんから「あなたに来てもらって良かった。」と言われ、そういう地域のフレンドリーなところが“よそ者”と言われるような人にもっとと伝わるようにできたらなといういろいろと考えているところです。



(中野) 縁があって大船渡に来て 10 年。現在は、観光客誘致拡大国内担当ということで商談に出かける機会も多くて、期待されていることを強く感じています。観光は、すぐには数字に反映されないものと周りからも助言をもらっていますが、すぐには数字に表れなくても、気仙地域にお客さんを少しでも多く引っ張ってこられるよう、自分でもっと頑張っていこうと思います。大船渡を日本だけじゃなく、世界にももっと発信していきたいです。



※1 大船渡市さんま焼き師認定試験(主催:一般社団法人大船渡市観光物産協会)
 “さんまのまち大船渡”を PR し大船渡市ファンの獲得や地域力の強化を図ろうと 2016 年にスタート。毎年 7 月上旬から中旬の 2 日間実施され、初日は実技講習として熟練した技を持つ「師範代」から焼き方のコツを学び、2 日目は筆記試験が行われ、合格者には、後日、認定証と焼き師タオルが贈られる。さんま焼き師に認定されると、大船渡市や同協会が主催する「さんままつり」などで腕をふるうチャンスもある。焼き師タオルは、中野貴之さんが応援隊任期中にデザインしたもの。



※2 いわてさんりく恋列車

2013 年から 2015 年まで、気仙地域で活動する応援隊が中心となり、応援隊配置先や三陸鉄道、地域企業等と連携し共同で企画し、地域経済の活性化、観光資源の活用、若者によるコミュニティ再生によるまちづくりを目的に実施したイベント。同イベントがモデルとなり、2016 年 2 月放送の NHK 特集ドラマ「恋の三陸列車コンで行こう！」が制作され、大船渡市で行われた撮影には、応援隊もエキストラ等で参加した。

大船渡市防災観光交流センター「おおふなぼーと」

(大船渡市大船渡町字茶屋前 7-6)

2018年にオープンし、観光交流・地域づくり・津波伝承・都市間交流等を目的にした大船渡市の交流施設です。

津波発生時等の災害発生時は、一時的な緊急避難場所としての機能も整備されており、現在の施設運営は、元応援隊の中野貴之さんが所属する一般社団法人大船渡市観光物産協会が指定管理者として担っています。



いわて復興応援隊インタビュー【陸前高田編】



【左】 山本 健太さん(陸前高田市在住)
活動期間:2015年6月1日~2016年12月31日
配置先:陸前高田まちづくり協働センター

【中】 種坂 奈保子さん(陸前高田市在住)
活動期間:2013年4月15日~2018年3月31日
配置先:陸前高田地域振興株式会社
陸前高田まちづくり協働センター

【右】 佃 実佳さん(陸前高田市在住)
活動期間:2013年4月15日~2018年4月14日
配置先:陸前高田市仮設住宅連絡会
陸前高田まちづくり協働センター

インタビュー会場:陸前高田市まちなか広場交流施設
「ほんまるの家」

— 山本さんがちょっと遅れるとのことですので、まずは種坂さん、佃さんの近況をお聞かせください。

(種坂) 応援隊の任期を終え、陸前高田市の復興支援員として、所属はそのまま陸前高田まちづくり協働センターで1年くらいお世話になりました。その後、陸前高田市のまちづくり会社設立に伴い社員として入社し、主に事務局の仕事をして今に至ります。

高田の中心市街地は、かさ上げが完了した7年前から月に1店2店が新規で開店していて、今は100店を超えているんですが、ほとんどが「高田まちなか会」という団体に加入していて、その事務局のサポートやまちなか広場の公園管理やチャレンジショップ等の運営などをやっています。元々私はイベント企画が好きなので、ビアガーデンや映画上映会、古本市のようなイベント運営や、以前からやっていたデザインの仕事やホームページの制作などもやっています。

プライベートでは2018年に結婚して、子どもが生まれて4歳になります。



(佃) 応援隊の活動が終わる前に、保育士の資格を活かして活動できるということで、大船渡の児童養護施設でボランティアをしていたんですが、活動終了後は職員として働かないかと声をかけてもらい、今年で6年目になりました。



施設では2歳から18歳までの子どもたち約30人が暮らしていて、虐待を受けた子や家庭の事情で親と一緒に住めない子とか、家庭環境に恵まれない子どもたちと一緒に過ごしていて、時には親の代わりに参観日や三者面談に行ったり、子ども達からの進路等の相談に乗ったり、施設を出る時には、引っ越しを手伝ったり、家族のように寄り添うようにしています。

一 応援隊に応募した経緯やきっかけは何ですか？

(種坂) 震災の年の2011年11月から、NPO法人ETIC.(東京都)の震災復興リーダー支援「右腕派遣プロジェクト」で、陸前高田未来商店街の事務局で活動していましたが、その後も高田に住みたくて、大船渡市観光物産協会でもわずかな期間ですが仕事をさせてもらい、応援隊に応募しました。

(佃) 私は実家の方でフリーターをしていました。その前は今の仕事と同じ児童養護施設で保育士として働いていて、事情があって辞めたんですが、震災の後しばらくしてネットで東北のことを検索していたら、陸前高田市仮設住宅連絡会のことを知って事務局長さんにメールを送ったら、翌年に、県で応援隊を募集することを教えてくれたので、東北や岩手のことは何もわかりませんでした。応募しました。

一 様々な活動に取り組まれた中で、特に印象に残っていることをお聞かせください。

(種坂) 活動の方向性の違いもあって、途中から配置先が陸前高田まちづくり協働センターに変わりました。協働センターでは「大丈夫？」と感じるくらい自分が思うことをやれる環境を頂いてとても助かりました。

当時は、高田の街なか整備に向けて、このエリアの店主たちとの関係をつくっていくという段階で、いずれはここに集まろうよという話し合いを毎週のようにしていて、そこに参加させてもらっていて、街ができる前から「まちゼミ」というイベントを手伝ったり、「まちなかマップ」を作ったりして、その頃の活動が今につながっています。印象的な出来事というより、あの時そこに関わって今があります。

一 着任当初の配置先でもネット販売を支援し軌道に乗せましたね。

(種坂) 私はモノを売るだけの仕事は向いていないと思いました。

生産者とのコミュニケーションを大切に、生産者の思いを伝えることをやりたかったんですが、思うようにそれが実現できなかったことが残念でした。ネットショップは、それなりに注文が入るようになって少しは貢献できたのかもしれませんが、軌道に乗せたというレベルではないし、もう少し上のレベルにまで持って行けたんじゃないかなと思います。

でも、仙台でのネットショップの講習会に参加させてもらったのがありがたくて、応援隊でなければ参加できなかったと思います。あの講習会に参加出来たことで東北中に知り合いができて、素晴らしい経営者と出会えて、自分の財産になったと思っています。

応援隊の任期を終えてからも5年を超えて、あの時がどうだったかを思い出すのは難しいですが、いろんなことにチャレンジができて、今思うと濃厚な5年間だったと思います。

一 佃さんも、任期途中で配置先や活動内容が変わるなどいろいろなことがありましたね。

(佃)



応援隊になるきっかけになった陸前高田市仮設住宅連絡会では、仮設支援員との連絡や外部の支援団体との調整をしたり、復興や地域情報の発信ツールとして連絡会通信を発行したりで結構忙しかったですね。連絡会の事務局長が途中で変わったとかいろいろありましたが、連絡会が目的を終え解散となり、陸前高田まちづくり協働活動センターに移ることになりました。

協働センターでは、陸前高田市まちづくりプラットフォームの事務局の活動もあり、仮設連絡会での活動以上に地域支援団体との横のつながりが多くなりました。

(種坂) 私もNPOの活動や仕組みについての知識が増えて、市民活動や地域づくりに対するイメージが変わりました。周囲にも活動している人たちがこんなにいる、いろいろな地域の課題に取り組んでいるんだとすごく勉強になりました。

— 種坂さんは、応援隊時代の活動がそのまま今の仕事につながっているようですが、佃さんはいかがですか？

(佃) 応援隊の頃に知り合った人たちが職場の施設にボランティアで来てくれたり、応援隊仲間の酒井さんも学習ボランティアで月2回来てくれたり、子どもたちの支援ということでクリスマスプレゼントを届けてくれたり、仕事のつながりというより、応援隊の頃の出会いから人とのつながりが、ずーっと活着ていると感じます。
人と人とのつながりが、養護施設に対する理解の輪の広がりにどんどん結びついているとも思います。

— 陸前高田は、この後どのような街になってもらいたいですか。

(種坂) やっぱり子供ができれば、子供が将来帰ってきたいと思える街にしたいというのはすごく感じます。自分自身も、他のところに住んでみたいと思うことはあったんですが、これだけ長く住んでいると、まちづくりの仕事をしているし、早々気軽に引っ越せるわけでもない。じゃあ自分で面白い街にするしかないと思っていて、創りたい場所は自分で創ればいいと思っていますんです。誰かができないことをブチブチと不満を言うより自分が創るみたいなの。

動かないと何も進まないの、あとはやるかやらないか、何をしたいかしたくないかだと思んです。自分がやりたいと思ったことをやっている人の集まりですべての街ができていと思うので、何をやりたいかだと思います。他の街を見て羨ましいと思うことは多々ありますが、それは街の誰かが頑張っているから、というのが裏側を知るとそう思えます。



— この先どうするとか、今何か考えていることはありますか？

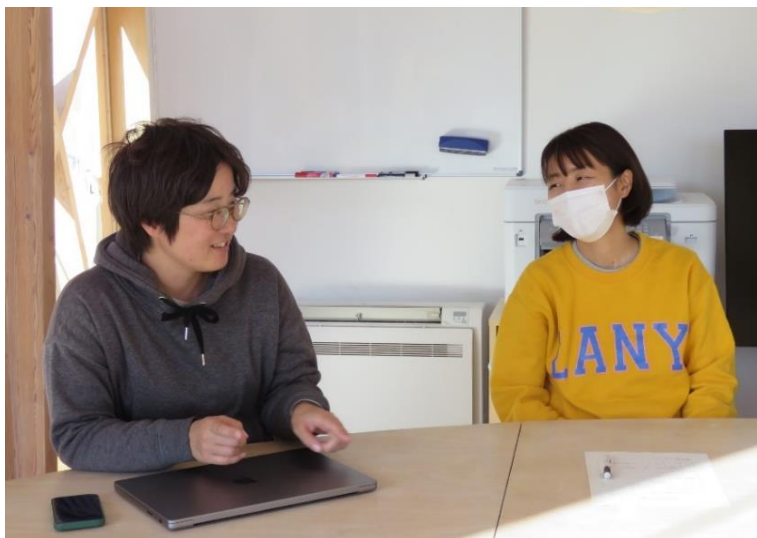
(佃) 毎年どうしようか迷うんです。コロナが落ち着いて4年ぶりに実家に戻ってとても懐かしかったんですが、まだ当分は岩手に居て子どもたちと過ごすことにしました。新しい子たちはいつからという区切りがなくて、常に見てあげなければならない子もいるので、自分もここを区切りでどうするというのは難しいですね。

(種坂) 佃さんが養護施設で働いていることで接点できて、私は児童養護や里親とか全く無知で遠い世界のことに思っていたんですが、身近に感じられるようになりました。

私は、佃さん経由で施設の存在を知り、そこに様々な事情を抱えた子ども達がいるということを知りました。佃さんがいたから知ることが出来た私みたいな人が他に多いと思います。

(佃) 結構、養護施設は閉鎖的に思われているところがあるんですが、地元の周囲の人たちには昔から理解があって、気軽に声をかけてくれたり、手伝いに来てくれたりします。

養護施設がどういうところなのか知らない人からはクローズに感じるかもしれませんが、繊細な面はあるけれど普通の子供たちが普通に暮らしている施設なんです。

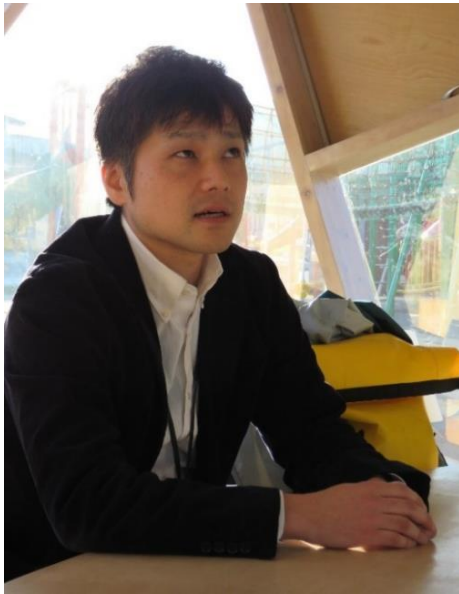


あ、健太さん。
今、健太さんと一緒に子ども食堂やってます。

山本健太さんが
ここから遅れて参加します

一 山本さん、早速ですが近況をお聞かせください。

(山本) 応援隊の活動は2016年の12月末で終わったので、その後は一般社団法人トナリノ(旧:SAVE TAKATA)に所属しています。現在は公私を含め、3つの仕事をしており、①講師業、②トナリノ、③デジタル庁です。



①の講師業は、岩手県立高田高校で総合学習の講師をしており、今日も「時間の使い方」をテーマに、自戒の念も込めて話をしてきたところです。他にも気仙沼市立病院附属看護学校で、看護課情報学を受け持っています。

②のトナリノでは、デジタルチームのマネージャーを担当しており、様々な世代の方々にデジタル機器の操作・活用方法などについて講習会を実施しています。

③のデジタル庁では、自治体と政府職員が利用できるオンラインコミュニティの事務局を担当しています。デジタル利用促進に関わる情報交換の場の提供に加えて、対面の勉強会などを通じて自治体間の横軸連携等を推進しています。自治体によっては直接出向いて、提案や相談等の対応をすることもあります。基本的にテレワークで業務を行っており、地方に居ながら様々な仕事に携わっています。

一 山本さんの着任は、2015年6月ですが、応援隊になるまでの経緯など教えてください。

(山本) 福岡の出身で関西の機械系メーカーで3年働いて「何か違うなあ」と感じていて、そのタイミングで東日本大震災が起こってしまって、なにか役に立てればと思い、ガレキ撤去やサロン活動などで1年間ボランティア活動をしていました。福島と陸前高田、宮古にも入りましたが、落ち着いたのは高田の人達と出会ったからです。商工会の会議の時だと記憶していますが、店主の方が「街ぶっこわれちゃったけど、ここで商売やっていくしかねえからな」って言ったのを聞いて「カッコいい！」って感動しちゃって。「ここで10年居させていただきます。要らないって言われるまでいます！」と決心しました。

ボランティア活動からいろいろな活動を経て、陸前高田まちづくり協働センターで応援隊に出会って、応援隊はやりたいことを続けさせてもらえる機会になったと思っています。感謝していますし、いろんな地域に応援隊や復興支援員の仲間がいて、他の地域のことを知る機会ができて、それまで全く知らなかった行政のことや動きなんかにも触れることができて、いい経験だったと思います。



一 応援隊としての活動期間は1年半ですが、印象に残った経験(活動)は何ですか？

(山本) 被災地域の仮設商店街の連携イベントですかね。復興グルメF1グランプリという名称で行われていますが、震災でダメージを受けた商店の人たちが商店街をつくりました、それが各地にあり、持ち回りで集まって継続して合同のイベントをやったんですが、それをきっかけに、支援している人たちとつながりもできました。

被災沿岸地域って割と一括りにされることってあるじゃないですか。でも、大船渡と高田では違うし、陸前高田でも気仙町と高田町では違うとっていて、現地に行かないと見えない部分や、資料だけではなく人と会って話さないとわからないことがあります。そのあたりが応援隊の約1年半の活動や経験で学べた部分だと思いますし、その後の仕事にもつながっていると思います。



一 陸前高田が今後こうなって欲しいとか、将来に向けた思いはありますか？

(山本) あんまりないですね。自分で選んだ場所なので、自分として良し悪しひっくるめて楽しんでやろうとは思っていますが、このまちの未来については、高田に生まれた人たちがどのように思っているか、それに依るとは思います。変わってほしいというより、陸前高田の色を出してほしいという思いはあります。

講師業で接する若者からは、自然の流れとして「地元では仕事がないから仙台や東京に行く」みたいなことを毎年聞きます。それが悪いこととは思いませんし、選ぶのは本人の自由です。しかし今はどこにいても仕事はできるし、ここに身体を置いて、どこか国内外の大手企業の仕事をすることも可能な時代です。あとは本人が現状を認識し、判断できる能力を身につけられるよう、大人が支えてあげられるかが勝負だと思います。

「一部のおとなの言うことに振り回されずに自分で調べろ」とは生徒たちにはよく言います。

自分もそうですが「大人は昭和の考え方や働き方が染みついている、そこからどう抜け出すかで頑張っている。現状維持でずっとやり続けるのは90年代で終わっています。明日自分の会社がつぶれると思ってどこでも生きていけるように勉強しなさい。」というのが若者に言いたいことですかね。



陸前高田市まちなか広場交流施設「ほんまるの家」

(岩手県陸前高田市高田町字大町 106 番地)

2017年10月に陸前高田市中心市街地に完成した公共の広場「まちなか広場」の一角に建つ交流施設です。東京ガス株式会社から陸前高田市に寄贈された世界的建築家の伊東豊雄氏設計のレンタルスペースで、現在の運営は、元応援隊の種坂奈保子さんが所属する陸前高田ほんまる株式会社が市の指定管理者として担っています。



いわて復興応援隊インタビュー【釜石編】



【左】 菊池 啓さん(釜石市在住)

活動期間:2018年6月8日～2024年3月31日

配置先:県沿岸広域振興局経営企画部産業振興室

【右】 里舘 徹さん(大槌町在住)

活動期間:2019年5月1日～2024年3月31日

配置先:県沿岸広域振興局宮古地域振興センター

インタビュー場所:釜石市・根浜海岸レストハウス

ー 現在は、お二人ともこの根浜海岸レストハウスにお勤めということですが、近況をお聞かせください。

(菊池) 私は2023年4月からお世話になっていますが、勤務がシフト制なので、里舘さんと顔を合わせないことも多いです。仕事は主に施設管理ですが、各種受入れも担当しており、企業研修やワーケーション、インターンや教育旅行の行程を作ったり、受入関係者との調整などで外出する機会も多いですね。

仕事は充実しています。ただ、シフト勤務なので、自分が休みでも世の中は休みじゃなく、スマホに業務連絡が入ることも多く、見ないように思うこともあるんですが、やっぱり無理ですもんね。(笑)

(里舘) 私は8月から働き始めました。今の業務は、施設管理だけなので結構すぐに慣れました。出勤が月の半分くらいで、勤務は8時半から4時までなので、気分的にも体力的にも楽です。家も近いですし。

ー 応援隊に応募されたきっかけをお聞かせください？

(里舘) 私はちょうど転職活動の最中で、ハローワークで応援隊募集の求人を目にして、とりあえず面接は受けようと思いました。ジオパークの募集で面接を受けたんですが、面接官がいっぱいいてびっくりしました。募集要項に“復興”というキーワードがあったので、自分も被災体験があり、機会があれば地元の復興に関わりたいという思いがあったので、応募を決める後押しになったのかもしれない。

(菊池) 震災後に釜石にリターンして1年、車庫証明の現地調査を行う仕事に就いていたんですが、転職を考え始めていたタイミングで、ハローワークの相談員の方から、是非お薦めしたい求人があるということで「いわて復興応援隊」の募集と出会いました。応募前に盛岡の公会堂で開催された募集説明会にも足を運んで、応援隊の活動とジオパークというワードも知ることとなりました。面接は、釜石で面接官は3人でした。



一 最も印象深い活動や経験についてお聞きます。里館さんは、三陸ジオパークと縄文遺跡に関するオンラインセミナーを手掛けられましたね。

(里館) もともと配置先で、事業のアイデア出しを求められての提案だったんですが、これはジオでやった方がいいねと言われて、三陸ジオパーク推進協議会を經由してジオ協議会の中部ブロック事務局に相談したら、すぐにやりましょうということになって開催が決まったセミナーなんです。

打合せを重ねる中で北部・南部のブロックも入れようということになり、関係者との調整などで北部は町田さん(久慈市配置)、南部は菊池さん(釜石市配置)にも動いてもらいました。事業費が最初からあってという企画ではないので、中部ブロックをはじめ関係機関との折衝は大変でした。

実施が年度内の2月ということで、年末からの準備でてこ舞いでした。正月を挟み、コロナ禍の影響もあり、開催直前でWEB開催に切り替えたりしながら、八戸市埋蔵文化センター、岩手県立博物館、大船渡市教育委員会にこちらから足を運んで企画を説明し協力をお願いしましたが、すぐには承諾をいただけない機関もあって、かなり難航しました。チラシは、及川理香子さん、当日の運営はジオに関わる隊員4人にプラスして、司会は鷲塚さんをお願いするなど、応援隊仲間の連携でなんとか乗り切りました。

一 菊池さんにとって、特に思い出に残る活動や経験は何ですか？

(菊池) 県の出先機関への配置ということで、正担当は県職員の方という業務が多かった中で、主体的に動けたのはジオパークですかね。県職員は異動も多いので、ある意味で頼りにしていただいた面もあったと思います。そうするとモチベーションも上がりますので、縄文のオンラインセミナーや釜石のジオ祭り(※)みたいなイベントも、応援隊それぞれが役割を分担し、得意分野で力を発揮できたと思います。応援隊活動の最後の方で参加した石川県で開催されたジオパーク全国大会では、凄く熱量を持ったジオに携わる人たちがこんなにいるんだと仲間同士の連帯感を覚えました。

2022年11月に実施した三陸ジオ南部ブロックの首長ツアーは、少し大変だったのですが、とても印象深いですね。

本番1週間ほど前に、行程に見学サイトをもう1か所追加してくれというオーダーがあって、関谷洞窟住居跡をなんとか追加したのですが、直前だったので調整にバタバタでしたね。結果として参加された首長さん達から、高評価を頂いてとても達成感があったことを覚えています。



※三陸ジオパーク～ジオタウン@釜石(2023.1.7～8)

応援隊が中心となって企画・運営を担ったイベント



一 三陸DMOの支援についてはいかがですか？

三陸観光プランナー養成塾には、他の応援隊や協力隊とも一緒に参加されていましたね。

(菊池) 日常の業務では県の観光コーディネーターと組むことが多く、私が組んだ方は、常に様々な企画を考えていらして、勉強になったことも少なくありませんでした。お互いに信頼関係を築けて楽しく活動できたと思います。

三陸観光プランナー養成塾(※)については、観光振興などを担う地域おこし協力隊などの参加が多かったと思いますが、隊員同士でもあまり接点がないこともあり、横の連携を推進する効果があったと思います。活動内容が異なっても地域のためという気持ちは一緒に連帯感が生れる、そこに尽きると思います。養成塾のプログラムには、観光客と地域の生産者や受入側との交流が組み立てられていて、地域の取組みを体験しながら学ぶ機会が多く、とても勉強になりました。



※ 三陸観光プランナー養成塾

三陸DMOセンター(公益財団法人さんりく基金DMO事業部)が主催する観光人材を養成を目的とした実践塾。観光関係者や復興支援員(応援隊ほか)・地域おこし協力隊など観光振興に関わる人達が参加している。

一 応援隊任期中の経験を通して、今のお仕事に活かしていることはありますか？

(里館) 人との繋がりを意識するようになって、地元の大槌でも張頑っている若い人もいっぱいいることがわかりました。この施設(根浜海岸レストハウス)では、利用客から県内の海水浴場とか三陸沿岸の見どころなどについて聞かれることが多いのですが、ジオパークやDMOでジオサイトや名勝、穴場など応援隊の活動で知ることができたので、地図をみせながらアドバイスできていて、めちゃくちゃ今の仕事に活かしています。

宮古市の田老地区で開催している「タロウィン※」は、3年目ですが今年も関わることになりました。応援隊の活動を終わるときに「卒業です。お世話になりました！」と挨拶したはずなんですけど、何故か連絡をいただきました(笑)。これまでジオをイベントの要素に入れて「ブラたろう」とかやっていたんですが、今年は三ジオ協の本部も宮古のジオ協も全国大会があるということで、完全に私一人完全ボランティアで参戦します。大変ですけどこういうつながりが続いていることが嬉しいです。



「タロウィン2021」

主催: タロウィン実行委員会

「ブラたろう」

共催: 三陸ジオパーク推進協議会

※**タロウィン**: 10月のハロウィーンの時に宮古市田老の道の駅たろうで開催されるイベント。“田老(たろう)”と“ハロウィーン”をかけてタロウィンというイベント名となった。同イベントは、宮古市の地域おこし協力隊の発案で地域や道の駅関係者に応援隊も加わった実行委員会の主催で行われており、併催として三陸ジオパークに親しんでもらうための街歩きイベント「ブラたろう」も開催されている。

— 震災から13年になりますが、地域の変化を感じるどころや、今後地域にどうなって欲しいという思いなどありますか？

(里館) 復興に関連づけて言えば、震災前は若い人はほとんど都会へ出ていくとか、地元に残る人は少なかったのが現実で、震災だ復興だということで、三陸に来てそのまま移住された方も結構おられるんですよね。そのような方たちはとても一生懸命に前向きに活動されていて、物凄い人が町に来て、地域に様々な化学反応を起こしているのを感じます。人口減少もあって若い人もかなり減ってきていますが、もっともっと多くの人たちが街づくりに関わってくれれば面白いですね。

(菊池) 逆に私は震災前の釜石の事はあまりわかっていないんですよ。高校進学で釜石を離れて下宿生活だったので、中学生だと自転車で行ける範囲しか知らないですし、半島の先端や山間部の集落など、釜石生まれなのにそれまで何も知らなかったんですよね。釜石に戻って最初の年に仕事で市内を隅々まで車で走りまくって調査ことが凄く役になっていて今につながっている気がします。

町のこれからについては、やはり、いっぱい人に来ていただきたいですね。この施設の利用者にアンケートを取ると7割から8割が岩手県内の内陸からのお客さんです。あとは関東圏ですね。観光もそうですけど、企業研修やワーケーションで幅広く多くの人に来ていただいて、いっぱいお金を使ってもらいたいです。



根浜海岸観光施設オートキャンプ場「根浜シーサイド」

(岩手県釜石市鶴住居町第21地割23番地1外)

釜石市唯一の海水浴場「根浜海岸」の観光施設です。2019年8月、東日本大震災津波から復興オープンし、キャンプ場や多目的広場が利用でき、管理施設棟のレストハウスは、三陸ジオパークの拠点施設にもなっています。

現在運営は、釜石市の指定管理者として株式会社かまいしDMCが担っています。



いわて復興応援隊インタビュー【住田編】



-左から-

関 博充さん(住田町在住)

活動期間:2015年4月1日~2018年3月31日

配置先:三陸ジオパーク推進協議会事務局

小向 はるかさん(住田町在住)

活動期間:2013年4月15日~2018年3月31日

配置先:住田町観光協会

酒井 菜穂子さん(住田町在住)

活動期間:2013年4月15日~2018年3月31日

配置先:陸前高田まちづくり協働センター

植田 敦代さん(住田町在住)

活動期間:2012年10月1日~2014年9月30日

配置先:住田町観光協会

インタビュー場所:住田町「イコウェルすみた」

— 皆さんの近況をお聞かせください。

(植田) 私は2014年9月で応援隊を卒業していますが、住田町には応援隊着任の2012年10月からずっとお世話になっていて、今は、まちや世田米駅(※1)ので仕事をさせていただいています。一般社団法人SUMICAの副代表をやっているのと、2019年に個人事業主の「おとりもち」というのを登録していて、ここ2・3年は、ワーケーションの受入れやインターンシップのコーディネートをしています。

8月にこの子が生まれて、今はSUMICAで運営する“まちや”の仕事は育休をいただいています。



(小向)

応援隊卒業後もしばらく住田町観光協会で活動を続けていましたが、今は、県立住田高校の魅力化プロジェクト(※2)に携わっています。住田高校は生徒数がかなり少なくなっていて、入学する生徒をもっと呼び込むためにも魅力的な高校にするにはどうするかについて、放課後の充実とか授業の企画とかをお手伝いしています。



(酒井)

今、住田に住んでいます。応援隊を終了して半年くらい空いているんですが、その後、いわて連携復興センター(※3)に所属して、1年後に陸前高田から住田に移りました。応援隊から引き続き、災害公営住宅のコミュニティ支援がメインですが、今の所属先もいろんな事業をやっています、地域づくりの講座やセミナーとかNPOの支援もやっています。住田にたどり着いたのは、あっちゃん(植田さん)とか応援隊時代から住田の人とのつながりがあったからです。高田を離れる寂しさもありましたが、今は住田の暮らしが気に入っています。

一 住田は住みやすいですか？子育てがしやすい環境とかでしょうか？

(酒井) 確かに不思議な魅力があります。

(植田) 特別に子育てしやすいってわけじゃないけど、地域のみんなが子供を見てくれる。

(小向) 温かさはあるね。保育園入りやすいし。

(酒井) 住田は、私が住む前から移住者や応援隊のみんながいて、地域の方との関係など、大分開拓してならしえてくれたので、その恩恵を受けているのだと思います。高田よりもっと人との距離が近いし、高田でもそういう距離感が楽しめていたので、この町のおかげでコロナ禍でも寂しさを感じなかった気がします。



一 関さんは、お仕事が変わられて住田に来られたばかりですね。

(関)



私は応援隊としては、2015年度から3年間、三陸ジオパーク推進協議会(宮古市)に配置されました。その後、宮城県で転職し「みちのく潮風トレイル(※4)」に関わりましたが、2023年5月からは住田町に移住して地域プロジェクトマネージャーとして、この「イコウェルすみた」の管理運営をしています。

岩手県内で仕事を探している時に、この仕事をみつけ応募しました。住田町には応援隊で知った顔もいるし、ジオパークの時に住田町の役場や観光協会をはじめ、町民の方々にはいろいろお世話になっていたのですが、トレイルの時にはルートが住田町にはないため、関われなかったのが何か心に残っていたんですね。

一 では、あらためて皆さんに応援隊で活動することとなったきっかけをお聞きます。

(関) 私の場合は少し特殊です。応援隊になる以前から、三陸ジオパーク推進協議会事務局で活動していました。雇用期間が終了する際に、事務局に復興支援員を配置し運営するということになり、県からの勧めもあり、私は応援隊として引き続き活動することになりました。

(酒井) 2011年3月の震災の時は、海外で活動していたので、東北で震災があったのは知っていましたが、震災の直後には全く支援とかに関われなくて、職場の関係で何か出来るのかなと思っていたのと、地域おこし協力隊も考えていて、全国の地域おこし協力隊のブースが出展するフェアに行ったら、岩手県ブースに1期生のあっちゃん(植田さん)がいて、地域おこしと復興支援両方やっていて「楽しいよ」って言ってたんです(笑)。

確かにそのブースにいたみんなが何か楽しそうで、岩手の地理感が全くなかったんですが、復興支援に関わりたいう思いで応募しました。活動先は、行政側に入るのは嫌だったので、NPOとかの民間を希望しました。

平成25年度いわて復興応援隊員募集
岩手県では現在15名の「復興応援隊員」が震災後の三陸を中心に
元気に活動しています。
あらたに4月から加わる平成25年度隊員の募集が始まります。
三陸の復興と地域の活性化に力を注ぐ志のある方の応募をお待ち
しています。
東京と岩手で復興応援隊のセミナー&募集説明会を開催しますの
で、ご参加ください。

地域を元気にし、
復興を後押しする
人材を求めます！

いわて復興応援隊
セミナー&募集説明会

募集説明会の入場は自由ですが、事前のお申し込みをお勧めします。 電話予約申込みの番号 02019-629-5194
メールでお申し込みの場合は 0480007@pref.iwate.jp

盛岡会場 1月19日(土) 東京会場 1月25日(金)

一 応援隊採用面接の東京の会場で「電気や水道はあるんですね？」と聞かれたことを覚えてるんですが。

(酒井) 私もすっごくよく覚えてます！海外青年協力隊で海外では、電気も水道もない状況を経験していたので、質問してしまいました。同じ日本語で言葉が通じるし、電気と水道あるなら何でも大丈夫だろうなって(笑)。

(小向) 私も東京会場での面接でした。当時は今の旦那さんとの結婚を考えていて、そういうことを面接で言ったら採用されないかも迷っていたんですけど、思い切って面接で話したら「それはいいねえ」と言ってくれたのが嬉しくて、とても印象に残っているんです。震災当時は、静岡に住んでいたんですが、東北が大変な時に私ここで何しているんだろうと考えていて、岩手なら実家(青森)の隣だし、これを機に東北に戻ることも自分にとっていいことなのかなと、何かずっとひっかかっていたんです。

(植田) 私は、お二人より前の採用の1期生ですが、面接は銀座のいわて銀河プラザの地下だったと思います。震災の時は、東京で仕事をしていて復興には何も関わらず、当日付き合っていた夫の実家も被災しているのに、特に何か出来たわけでもなくて、大船渡の友人も被災したと聞かされて、「このまま東京で仕事していいのかな?」と考えていました。

2012年のお盆に実家に帰省した時に、新聞で応援隊募集の記事を目にして、応募の締め切りに余裕がなくてバタバタと行動して、今考えると会社に迷惑をかけるような辞め方だったのに、皆さん快く送り出してくれました。



— 皆さん様々な活動をされましたが、特に印象的だったと思える活動や経験をお聞かせください。

(小向) 住田町は夏祭りが大きなイベントで、その運営事務局を観光協会で作るんですが、台風で中止になったことがあって、夏の最大イベントがなくなってしまって子供たちがかわいそうだということで、「とびやっこ夏祭り」という子供向けの小さい夏祭りを企画して事務局で走り回ってやりました。



(植田) え?全然忘れてた(笑)

(小向) 子供達だけでも楽しんでもらえればというので、準備していた物を使って何かやろうということでしたが、町民の方から結構バッシングされたんですよ(笑)。「その地域の人しかいけないじゃないか」とか、「年寄りはどうするんだ」とか。衝撃を受けましたが仕事の難しさを知りました。

(植田) 私は、えーと何かな…あ!アリスの文化祭、それにします(笑)。私が赴任した翌月、今はなくなった下有住小学校が町内で最も大きい仮設住宅団地の隣にあって、小学校を使って地域の文化祭を観光協会の主催でやったんですが、私、イベントの運営とか1回もやった事なくて。そのイベントの背景とか、何を準備しなきゃいけないとか、調整とかで大変でした。

(関) ジオパークは三陸沿岸広域で仕事をするので、各地にいる隊員と一緒に何かしら仕事が出来たというのが面白かったなと思います。植田さん、小向さん以外にも、田野畑村の悦ちゃん(渡邊悦子/田野畑村配置)とか、中野さん(大船渡市配置)、野田村や洋野町では、町田さん(野田村、久慈市配置)とやったかな?その他にも、各地にいる人たちとなんかやろうと仕事が出来たのが印象に残っています。

後々、応援隊の交流会とかのタイミングで、一人で配置されている応援隊だと悶々としてしまう、というような話も隊員から聞いていたので、気晴らしになったらいいかなと思うことがあって、外の空気を吸うじゃないけど「こっち手伝ってみない?」みたいな感じの話は何回かしたと思います。

(酒井) 私は何かを作り出すという仕事は全くしていなくて、応援隊として協働センターに入った時にワークショップとかグループでの話し合いをまわすとか、人に意見を促すとかファシリテーターを、ちゃんと意識してやるというのは実は初めてでした。それがあったからこそ今につながっています。

— 応援隊で経験したことが、現在の仕事に活かせていると思いますか？

(植田) もうそれは、それしかない気がしますけど。

(小向) 外から来ているからこそ、不満に思うところや、なんか違うんじゃないかみたいな話とかは出来ると思います。当時、地域の大人たちが一生懸命動く姿に感動して、子供達や地域の活性化の為に活動している人達と関わりが出来て、自分はどうお手伝い出来るかとか、どのような仕組みがあればやりやすくなるのかとか、今の仕事にも通じていると思っています。コーディネーターという仕事は、思いを思いだけに終わらせないようにすることだと思いました。

民泊事業の事務局もやっていたので、地元を一軒一軒まわったのが本当に凄い経験になりました。身近に農家さんがいなかったで、地元の農家の方や地域の皆さんと繋がりが出来て、この人はこういう考え方をしている、こんなところこそ一所懸命になるんだ、というようなことを知ったのも良い経験だと思います。

— 関さんも応援隊の仲間たちとのつながりが、これからも大切になりそうですね？

(関) はい。実際に、植田さんがやっている「おとりもち」さんの仕事とどのような連携ができるかを考えています。イコウェルに関東や関西圏の企業を連れてくるのが仕事なので、単にオフィスとして使ってもらっただけじゃなくて、住田町にすればプラスαこれが出来ます的な営業をしていかないと、多分、勝筋が見えてこないと思っています。

それと、小向さんがやっていた民泊事業も、営業コンテンツとして活用させてもらうとか、今後も応援隊の繋がりを活用して、住田町の未来につながるような仕事をしていきたいと思っています。



— 酒井さんは、これまでの繋がりを活かせるお立場でもありますか？

(酒井)



今、私の肩書は地域コーディネーターなんですが、コーディネートスキルは全部応援隊の時の協働センターに始まり、そこから積み重なってきたと思っています。応援隊同士のネットワークは、毎日会えなくても、気軽に「ちょっと」と言えたりとか、そういう関係なのかなと思います。

私は東京に楽に日帰りできる神奈川県で育って、日本社会全体の地方と首都圏の関係性とか、東京集中に腹が立つこととか岩手に来て初めて思ったんです。

海外にいた時に、日本ってこうだよって話してきたこととは、良い意味で違う東北を見ることで、日本がこんなに多様だったと思えたのも岩手に来てからなんです。それが今の生活が好きってところに繋がるんですが、応援隊という入口をもらって岩手に来られたことで、地域社会の問題とか社会の課題に関心が向いてきて、視野が広がったなという感じがします。

— 酒井さん、ご実家は小田原ですよね。生活の拠点として住田との違いを感じますか？

(酒井) 小田原では地域との関係性がそんなに近いわけじゃなかったんです。私はまだ岩手に根付いたとは言いきれませんが、こっちに来た時にご近所との距離感とか、地域の事を教えてくれる人がいるとか、感覚が多分私に合っていたんだと思います。元々は、自分は仕事と生活の人のつながりを分けるタイプだったんですが、こっちに來たらそれは無理で、それが安心安全な生活なのかなとも思うんです。

一 岩手県内でも地域おこし協力隊の活動が増えてきましたが、協力隊と仕事等に関わることも多いですか？

(植田) そもそもほとんど関わっていないですね。今、住田に協力隊は居ないこともあるけど、協力隊だから関わっていると、NPOだから関わっているみたいな見方はしないかな。ただ、新しい人が来た時は、自分の時も地域の人を受け入れてくれたという思いがあるので、出来るだけその地域の人に紹介するとか、その程度伝えたりする存在になれたら良いのかなとは思っています。

(酒井) 協力隊というより移住してきたひとりとして見ているんだと思います。私も住田に来て色々な人に繋いでもらったし、自分も新しく来た人と地域をつなぐ立場になればいいなと思います。肩書が協力隊とか、応援隊というのは地域にとってはあまり関係なくて、応援隊というより、配置された団体の誰ということで見られていたのかなという気がします。



(関) 岩手県でも協力隊ネットワークができたのはいいと思いますが、酒井さんが言ったとおり、必要な時に繋がるのであって、必要性がないのに何かと繋がらなきゃいけないって言うのは、それはそれでストレスにもなるかもしれないし。協力隊だけのネットワークプラス、その周辺の関係者も加わるように拡がるといいんじゃないかと思います。

一 最後に、皆さんが関わってきた地域や岩手に対して、期待することや今の思いをお聞かせください。

(関) 地域にかかわればかわるほど、課題がたくさん見えてきて、おいそれとそういうこと言っちゃいけないように思っています(笑)。みんながハッピーな地域になれば一番いいと思いますが、自分たちが楽しんで活動していないと人は来ないし集まらないので、自分が楽しみながら、その笑顔を誰かに見てもらう機会を増やしていくことが大切だと思います。

(酒井) 子どもが将来に夢を持てる・描ける地域であって欲しいと思っていて、震災後しばらくしてコロナが来て、なかなか希望が持てる時代じゃなかったの、この先、子どもたちが大きくなったら楽しいとか世界が開けるみたいな、単純なことかもしれないけど語れるようなればいいなと思っています。

私たち大人は、例えば地域で職業を教える機会が少ないのであればつくるとか、岩手県全体でというのは難しいかもしれませんが、住田みたいな地域なら可能かなと思います。



(植田) 確かに楽しいと思えていないと人にお薦めできないですね。自分が10年以上住田にお世話になっていて、いろんな素敵な人に出会えたり、素敵な場所に行ったりしたので、多くの人にわかってもらえる機会を、自分が楽しみながら作れたらいいなと思います。

子供のことについても、子供たちが誇りに思えるようなことや楽しいと思えること、仕事の選択肢や歩み方の選択肢もそうですが、都会と格差なく選べて体験でき場所になればいいですね。

(小向) 前提として、親が子供たちに将来を選ばせてあげる環境を用意することが必要だと思っていて、沿岸の場合、将来を選ばせてあげられない状況に子供を置いていることが、進学とかを見ていると課題かなと思っています。子供たちが自由に選べる状態で、それでも地域に戻りたいと思うのは、その子のタイプだということ、双子を育てていて思います。

片方は淋しがり屋で、夜は明るいのが好きとか賑やかなことをしてみたいと言うし、もう片方は地域の人と一緒に居ることが楽しくて、お年寄りと話するのが楽しいって言うんです。自分が大切にされた思いが残っていれば、将来は育てられた地域に戻って来るんじゃないかと思っています。



(関) 住田町って面白いよね、人が。

(植田) そうそう、結構面白い！

(酒井) どの人にもドラマがあって、その人生にちょっと入り込めるのが住田の面白さかもしれない。

(小向) うちの子、学校帰りに近所のおばあちゃんの家によって、たまにお茶っこしてくるみたいで、おばあちゃんが今日はどうしたとか、こんなこと教えてくれたとか、すごく楽しそうに聞かせてくれるんです。親としてはちゃんと挨拶しておかなきゃと(笑)。

(小向)

地方の良さというのは人の優しさで、人口が少ないからこそ、一人一人を大事にして長所や短所を認めてくれて、暖かく見守ってくれると感じます。人のことを他人事としてほっとけない優しいお節介焼きがいっぱいて、普段はそうでもないけど、困っている時に「大丈夫か？」って言うってくれる人がいるのが岩手なんだろうなと思っています。



※1 まちや世田米駅

古い商家をリノベーションし、レストランを併設した住田町の住民交流拠点施設として 2016 年 4 月にオープンした。施設の管理運営は、町の指定管理者である一般社団法人 SUMICA がおこなっており、植田敦代さんは同法人副代表を務める。

※2 岩手県立住田高校魅力化プロジェクト

「ひとりひとりの個性を大事にする教育」を掲げ、高校生が挑戦できる環境づくり、地域内外との出会いづくり、同校の目玉授業「地域創造学」の充実をはかりながら、同高の魅力を高め発信するプロジェクト。小向はるかさんは教育コーディネーターとして活躍中。

※3 NPO 法人いわて連携復興センター

東日本大震災発災後の 2011 年 4 月 28 日に県内の中間支援団体が協働で設立した NPO 法人。岩手県沿岸の被災地域をはじめ県内全域での復興を目標とし活動を行っている団体。酒井菜穂子さんは、コミュニティ担当の地域コーディネーターとして活躍中。

※4 みちのく潮風トレイル

青森県八戸市から福島県相馬市までの太平洋沿岸をつなぐ全長 1000km を超えるロングトレイル。関博充さんは、2018 年から 2023 年 3 月まで同トレイル全線の管理運営を行う「みちのく潮風トレイル名取トレイルセンター」の指定管理団体 NPO 法人みちのくトレイルクラブの事務局長として活躍。

仕事と学びの複合施設「イコウェルすみた」

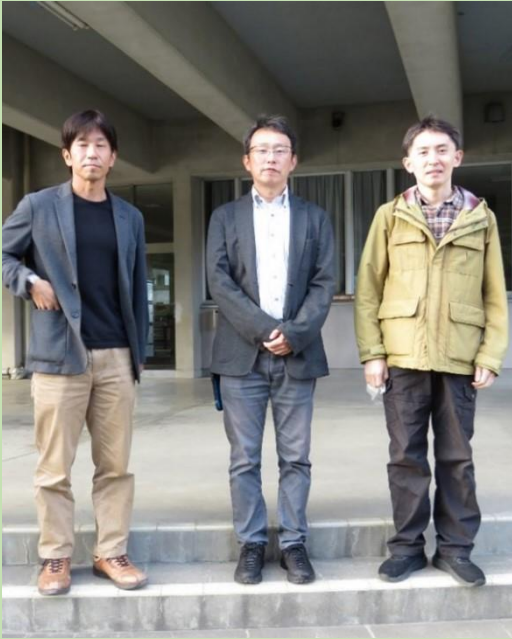
(岩手県気仙郡住田町世田米字本町 31 番地 2)

東日本大震災発災後まもなく、沿岸部の被災者を受け入れるために住田町内の 3 地区に応急仮設住宅を整備。同町独自の木造一戸建ての仮設住宅は、「住田型」として注目され、入居者全員が退去完了した 2020 年 4 月以降、跡地利活用と部材再利用により、17 戸の仮設住宅があった本町団地に同施設が整備されました。

震災の記憶や記録の継承と、町内外の多種多様な企業・個人の交流の場として利用を推進する町の公共施設です。



いわて復興応援隊インタビュー【洋野編】



【左】

町田 恵太郎さん(東京都清瀬市在住)
活動期間:2012年10月1日~2017年9月30日
2018年5月21日~2023年3月31日
配置先:野田村役場、NPO 法人久慈広域観光協議会、
いわて定住・交流促進連絡協議会久慈事務所

【中】

寺田 英人さん(青森県階上町在住)
活動期間:2012年10月1日~2017年9月30日
配置先:軽米町役場

【右】

田高 正博さん(岩手県久慈市出身)
活動期間:2018年10月1日~2021年3月31日
配置先:三陸ジオパーク推進協議会事務局
いわて定住・交流促進連絡協議会久慈事務所

インタビュー場所:洋野町にぎわい創造交流施設「ヒロノット」

— まずは、皆さんの近況からお聞きします。

(町田) 今年3月に活動を終わってから、住まいは東京ですが岩手に何度も来ています。4月に三陸ジオパーク認定ガイドに登録して、8月に宮古市の三陸ジオパークフェスタに認定ガイドとして参加し、先日は三陸ジオパークのイベントを久慈市の麦生漁港で実施したところです。応援隊時代もジオパーク関係のイベント企画はしていましたが、今は、応援隊時代にちょっとやり残したなあということをやっている感じもあります。他には三陸沿岸の特産品を東京や首都圏で、知り合いと一緒に物販などのイベントを企画したりしています。



(寺田) 私は、応援隊の活動終了後は、二戸地域雇用創造協議会で観光振興の仕事に携わりました。その後、現在は洋野町の地域おこし協力隊にて活動しています。主な活動内容は、三陸ジオパーク認定ガイドの資格を取り、トレイルの案内等や、北三陸ベースでは、コミュニティスペースとしてイベントの運営等をおこなっています。

【北三陸ベース】 寺田さんが協力隊の活動として運営する自然観光推進事業のヒロノット内拠点スペース。

(田高) 私は退任後、応援隊活動中から関わってきた宮古市の三陸ジオパークガイドブックの編集作業に携わりました。三陸ジオパークのガイド活動としては、八戸市の潮風アウトドアガイド協会に所属して、種差海岸の普及啓発活動ができたと思っています。

八戸市は市民活動にオープンな風潮があり、そういった環境からかガイド活動に関心がある方も多く、種差海岸だけでも複数の活動団体があるんです。

【宮古市三陸ジオパークガイドブック】

2022年3月に宮古市三陸ジオパーク推進協議会が発行。学術アドバイザーとして田高さんが編集に関わった。



— あらためて応援隊を志すきっかけについてお聞きます。

(町田) 大震災の直後、当時は東京に居て、仕事を探していたということもあって何かをしたいという思いはありました。東京に居るより、現地状況を自分で見たいという気持ちが湧いてきたのと、当時父が福島県相馬市に居たのですが、復興応援隊募集の新聞記事が目に入って、応募する心する決心をしました。特に希望する地域はなかったんですが、たまたま面接のときに野田村の方がおられて、選んでいただきました。被災地であればどこでも良かったので、県北地域であることに特に抵抗とかはありませんでした。

(寺田)

震災の時は二戸市で観光振興の仕事をしていましたが、二戸市は野田村と協定を結んでいたことで現地に行った際には、現地の状況を見てとても驚きました。また二戸市でも、IGRや新幹線も止まり、観光振興どころでないという雰囲気でした。しばらくしていわて復興応援隊募集の情報を知り、役に立ちたいと思って応募しました。



— 田高さんは、当時久慈市で仕事をされていて、津波を経験されましたね。

(田高)

当時、海岸の近くで仕事をしていたんですが、海なりを耳にして、津波がダアーと押し寄せて、そんなすごい光景を目にしていました。その後は、避難所のお手伝いや支援物資を避難所に運ぶ毎日でした。

応募の動機となったのは、三陸ジオパークが条件付きの再認定となってから、市町村の活動が停滞気味になっていたことが残念だと感じ、今度は自分が直接関わりたいと思ったからです。三陸ジオパーク認定ガイド1期生ということもありますが、認定ガイドになる前からそういった活動をしていたので、ジオを起点にできればとは思っていました。ジオは観光、教育、地域づくりに活かせるとても汎用性が広いツールなので、そこを起点にしてという思いがありました。

— 今振り返って特に印象に残った活動や経験はどのようなことですか？

(町田)

着任後すぐに仮設住宅に入居したんですが、その住民の方々と話げできたのが大きかったですね。一緒に飲んだり、一緒に時間を過ごすということは、普通は経験できないことなので貴重な経験でした。行政の方からこれをやってほしいということも確かに業務かもしれませんが、地域の方々と直接話をするのが、被災地に来た目的のひとつでしたので、仮設での生活は思い出に残ります。

先日も住田町の見学用の仮設住宅を見てきて、地域による特徴を実感しましたし、自分の経験を踏まえながら地域の説明する際にも役立っています。

(田高)

三陸ジオパークの活動として共通のキーワードとなるのは、見えないものを見えるような形にするサービスだということだと思います。具体的には、普代村のたたら製鉄の実験や宮古市のジオパークガイドブックですが、たたら製鉄は実験としては成功したものの、残念ながら村の体験メニューにはなりません。宮古のガイドブックは、その編集過程で、旧川井村エリアで、ジオの視点で何かできないだろうかということで、宮古街道を取り上げることになったんです。その延長で、宮古市地域おこし協力隊OBの松下さんによって、宮古と盛岡を結ぶツアー企画など観光商品開発につながりました。



【たたら製鉄】久慈地域は日本有数の砂鉄の産地で、普代村荻牛地区割沢には、かつてここには南部藩直轄の割沢鉄山があり、「たたら製鉄」により江戸時代には年間400トンの鉄が生産されていた。現在は、割沢鉄山跡は三陸ジオパークのジオサイトに登録されている。

一 寺田さんは、如何ですか？軽米町特産の「サルナシ」の新商品開発などの課題に取り組んでいましたね？

(寺田) 1年目は軽米町産業開発の配置で、2年目に役場の方に配置転換となりました。特産品の商品開発や物産関係のイベントや町の情報発信がメインでした。銀河プラザにも特産品の販売支援やキャンペーンで伺った際には、お客様から美味しかったとか、応援していますとか、暖かい声をかけていただいた事がとても印象に残っています。

「サルナシ」は生食では長くは保存できないので、ジュースが主な商品なんです。今では産直で様々な加工品が並んでいるようです。新商品開発の成功例は専門家でも100に一つと言われるなかで、素人が数年で答えを出すというのは無謀かもしれません。また専業で栽培すればそれなりの生産量にはなるのですが、主力商品の片手間で栽培を続けているような場合は、生産量は下がりますし、なかなか難しいですよ。

【サルナシ】

コクワとかコガとも言われキウウイフルーツを小さくしたような果実。岩手では県北の軽米町が特産品として栽培し、ドリンクやジャムに加工されている。



一 任期中の取組は、地域につながる事が出来たと思いますか？

(町田)



自分が居なくなった後も定着させる必要性は当然感じていて、自走することが必要だと思います。野田村玉川漁港の例もその一つで、当初の企画運営に自分も関わり、三陸DMOセンターの観光プランナー養成塾のプログラムから始まりました。今は村の予算で継続していますが、地域として続けていくための仕組みづくりは必要だと思います。

私は久慈事務所で活動して、宮古市や山田町、県北エリアの地域おこし協力隊の方々とは任期終了後もつながりがありますが、いろんな形で様々な地域でいろんな人たちと関係をつくりながら、地方で化学反応を次々に起こしていけるのではないかと期待しています。

(寺田) 地域に残したという点では、宮本慶子さん(洋野町配置)が取り組んだ洋野エモーションが顕著だと思います。また、

エモーションの光景をイラストで表現しポストカードにもなっています。自分もたまの休みの日には一緒に旗を振っていますが、それぞれの都合で地域を離れることになっても、形があるなしかわからず、残したものが地域の人に繋がるのが重要だと思います。

【洋野エモーション】 応援隊が地元の高校教師から「東北エモーションの列車が通る時、高校生と南部もぐりの格好で立つ」と聞き、大漁旗を振り乗客を歓迎することを思いつき、地域を巻き込む活動となった。



一 活動で縁があった地域や三陸の今後について、希望や期待があればお聞かせください？

(田高)

岩手には水産や観光、教育にしても見えていない資源がたくさんあって、それらがジオとか復興国立公園といった枠組みによって見える形になっていることが多いと思いますが、私は、いずれこの枠組みがなくなってもいいかなとも思っています。チャグチャグ馬コや南部鉄器などは、地域に根付いていたものが発展してPRに力を入れたことで有名になったと思います。四国のお遍路さんのように、誰もが知る地域の誇りとして育ていければと思っています。

(町田) 私は、子供たちにジオパークの難しい話はしません。
何故それがその地域にあるのか、どうしてその景勝地ができたのかを少し深堀して、地形や自然環境、生態系があり、その上に人の生業があるというストーリーについて話をするだけでも聞いてくれる子供たちの目が全然違うんです。

地元の方は、ここには何もないと口にしますが、私にすればあり過ぎていて、逆に東京は人工の建造物ばかりで、ビルにしても特に深いストーリーがあるとは思えないんです。

自分もジオパークを知って、そのような見方があると気づきましたが、多くの人に気づいて欲しいと思います。そう考えると、自治体の区分ではないですね。

特産品に関してもそうですけれど、全体的に広がっていくべきものだと思いますし、そういうことをみんなに知ってもらいたいという気持ちはあります。

自分のテーマでもあるんですが、生産者は単にモノを作っているだけではなく、環境問題も意識している。例えば、磯焼け問題対策のため、ウニを間引きして冬に出荷したり、木炭も森林の保全を考えながら作っている。そのような地域の生産者の取組みや思いも併せて伝えたいと思っています。



(寺田) これまでの経験が、その後のどの仕事でも参考になっていると思います。

私の仕事は、いずれも観光振興が柱になっているのですが、先ほどの枠組みの話で言えば、敢えて枠を通して見ることも必要かなと思っていて、例えば大野にある「ひろのまきば天文台」は、星空がきれいに見えるということでも有名ですが、何故きれいに見えるのかということも、地形的地理的な背景を説明することで理解が深まることもある



わけで、単純にきれいだと感動するだけでなく、敢えて見る枠組みを通して説明することも必要かと思っています。

先の震災では、幸いにも南に比べて北部は被害の程度が低かったのですが、洋野町の地域おこし協力隊がやっている街歩きでは、神社が津波の恐れが少ない場所に建立されていることなど、防災の意識付けになる説明も心掛けており、今後発生する可能性が大きい日本海溝海底地震等を意識し、北三陸エリアの皆さんにも、また岩手を訪れる皆さんにも伝える仕事をしていければと思います。

洋野町にぎわい創造交流施設「ヒロノット」(岩手県九戸郡洋野町種市7-116-21)

2020年に閉校となった旧宿戸中学校の校舎を利活用し、2021年11月にオープンした複合施設で、コワーキングスペースやサテライトオフィスのほか、管理宿泊施設が整備されています。

元応援隊の寺田さんが現在の協力隊の活動として運営する「北三陸ベース」はこの施設内に拠点があります。



メッセージ

関係者の皆様

— いわて復興応援隊発足の頃 —

元いわて定住・交流促進連絡協議会事務局長
九戸村副村長 伊藤 仁



震災1後の2012年6月、総務省の担当者の薦めで初めてこの制度を知った。

当時、私は県庁地域振興室の県北沿岸・定住交流課長だったが、既に県庁には復興局が設置されている。しかも、震災後、何人も復興局や沿岸振興局に異動になり、私の課員は、さんりく基金や緊急雇用のスタッフを除き、わずか5人にまで減っていた。それでもさんりく基金事業の大幅な見直しや三陸ジオパークの立ち上げ、県北復興対策など仕事は山積みになっている。しかし、人材を呼び込むのは定住交流の仕事ではないか。「誰もやらないならやるしかない」と思った。

翌月、復興支援員の事業を始めた宮城県庁を訪ね、石巻市の現場にも足を運んだ。何となく事業のイメージをつかみ、何とか9月補正予算要求に間に合わせることができた。震災で休止状態だった「いわて定住・交流促進連絡協議会」を受け皿に募集ホームページとFacebookを職員が手作りし、県北沿岸の受け入れ市町村と団体に声をかけ、マスコミ広報の甲斐があつて、予想以上に大きな反響があり、読売新聞の全国版にも掲載され、全国から問い合わせが殺到した。さっそく東京での説明会を2会場で開催。心配した参加者も会場はほぼ埋まり、後日の面接を経て採用者を内定。何とか14人採用し10月から着任させることができ、翌年1月にさらに1人採用した。採用した「いわて復興応援隊」のメンバーは多彩で、なかなか面白いことになるのではと期待したが、隊員も受け入れ団体も生身の人間である。我々も外から人材を受け入れるノウハウや体制が十分ではなかったし、県が日常的に面倒を見られるわけではい。隊員と受け入れ団体側の思いもそれぞれ食い違い、うまくマッチした隊員と、そうでない隊員と悲喜こもごもで、何人かの隊員には泣かれ、県庁から沿岸の現場をフォローするのは骨が折れるものだった。それでも翌年度の予算を増やし、更なる受け入れ団体を募り、隊員の二次募集を開始して17人を追加採用した。

私は、二次募集の隊員が着任する2013年4月から二戸に異動になったので、採用した隊員の活動に長く関わることはなかった。でも、さまざまな応募者と直に接して、彼ら(彼女ら)の応募動機を知り、被災地の受け入れ団体との調整などリアルな現場に身を置けたことは大変勉強になった。この時の経験は、九戸村で初めて地域おこし協力隊を募集し採用した時、大変参考になっている。

あの震災からもう13年になろうとしている。震災の日からちょうど1週間後に現地で見、津波で街並みが跡形も無く消えた陸前高田市の光景は今でも忘れられない。その被災地は年を追うごとに姿を変えている。

復興応援隊受け入れの当時は、走りながら手探りで準備だったため、不十分な点は多々あったと思う。それでも聞けば、応援隊卒業後も岩手で元気にしているメンバーは何人もいるらしい。人口減少が騒がれる昨今だが、岩手は人材がいれば大丈夫だ。人材が集まる地域は必ず発展する。これからもそれぞれの立場でそれぞれの力をいかに発揮していただきたい。そう心から祈っている。

— 個性ある多様な人材の力を結集した三陸の復興 —

元いわて定住・交流促進連絡協議会事務局長
岩手県ふるさと振興部副部長兼県北・沿岸振興室長
菅原 健司



私は、平成 27 年度から 4 年間、いわて定住・交流促進連絡協議会の事務局長として、いわて復興応援隊事業に関わりましたが、この間に活動いただいた隊員は 44 名。遠くは九州からという方もおられましたが、県内外から三陸沿岸地域の復興への熱い思いや高い志を持った多くの隊員が、現地で復興、地域支援活動に精力的に取り組んでいただいたことは大変頭の下がる思いでありました。

応援隊は、三陸沿岸地域を中心に現地に駐在し、市町村や NPO 団体等と連携し活動しているため、私が隊員の皆さまと関わるのは、活動状況の確認や採用時の面談、研修など、ごく限られた場面でありましたが、三陸沿岸地域の復興等の人員体制が整わない早期から、隊員ひとり一人の得意分野を生かし、若者や外部からの視点などを加わって、きめ細かな復興、地域づくりの推進に寄与されたものと考えています。

そして、駐在活動を中心とした隊員を“親”のようにサポートされた専門支援員のご尽力もあって応援隊という仕組みが展開されたものと思います。

活動終了後は、そのまま岩手の残った方、出られた方、そして再び岩手の戻ってきた方など、それぞれですが、テレビ、新聞等でその後の活躍を目にする機会も多く、隊員の皆さまには応援隊で活動を共にした岩手の一員として、ますますご活躍されることを期待しています。



いわて復興応援隊研修会より

いわて復興応援隊受入機関の皆様からのメッセージ



当法人は 2011 年の東日本大震災発災直後から活動を開始し、早いもので 12 年以上の活動をしていることになる。いわて復興応援隊の受入をしていなければ、ここまで活動が続いていなかったかと思うと感謝の念に堪えない。緊急支援ボランティアから長期的な視野にたった復興支援をする、そんな移行期間の真っ只中の受入だった。

そのため、応援隊のみなさんには様々な苦勞をかけたと思うが、都度相談をし、時にはぶつかりながらも、各支援活動を進めていったことを覚えている。応援隊の卒業後の進路としては様々にあるが、定住された方、定住しなかったとしても継続的に関係性を持つ方がいたり、受入期間のみならず

継続的な「復興応援」の形がつられていると感じている。応援隊の活動は 2022 年度に終了となっているが、その残した足跡と関係性はこれからも長く長く続くと思うし、当事者の 1 人としてつなげていきたい。

あらためていわて復興応援隊、そして関係者のみなさまへ感謝の念を持ち、今後の活動に精進したい。

一般社団法人トナリノ(旧・SAVE TAKATA)

代表理事 佐々木 信秋



いわて復興応援隊を受け入れたのは平成 25 年からで、大震災からの復興に向けて、地域に多くのボランティア団体が来訪していた時期でした。受入れ当初の目的は、グリーン・ツーリズムや観光による交流人口拡大を推進するための体験メニュー開発でしたが、当時の世の中は、まだ観光という雰囲気ではありませんでした。

そこで、木造仮設住宅に入居する被災者の皆様と、ボランティア団体や地域支援者の交流をコーディネートしながら、体験メニューの検討や、活動を通じてつながりを深めた企業等に体験をモニタリングしてもらい、メニューを造成し

ていく等、復興活動と共に観光を推進していく取組みとなりました。

これらの活動を共に推進していく中で、応援隊が地域に自然と溶け込み、担い手として自覚し、応援隊の活動終了後も、地域に根付いてそれぞれの得意分野で活躍している姿は、地域に活力を呼び込む役割を現在も果たしていると言えるのではないのでしょうか。

住田町観光協会

事務局長 佐々木 康行

いわて復興応援隊受入機関の皆様からのメッセージ



陸前高田まちづくり協働センターは 2012 年に活動を開始しましたが、いわて復興応援隊の皆様には立ち上げから間もない 2013 年から 2017 年までの期間、計 5 名の受入れをさせていただきました。

被災者支援が偏らないように情報共有やコーディネートを担っていただいたことをはじめ、地域の復興後の将来像を住民の方々に寄り添いながら一緒に考えたり、一歩踏み出す後押しをしていただいたり、仮設商店街や新市街地のにぎわいづくりのためのイベントを開催したりと、幅広い分野で活動していただきました。いわて復興応援隊の皆様の支援に深く感謝を申し上げます。

当団体で活動していただいた方々は、任期が終わった後も引き続き岩手に、また陸前高田市に関わり続けてくださっている隊員が多くいらっしゃいます。形は変わっていますが、ご縁が続いていくことをうれしく思います。今後の皆様のご活躍を心よりお祈りいたします。

特定非営利活動法人 陸前高田まちづくり協働センター
理事長 三浦 まり江



当団体は、東日本大震災で甚大な被害を受けた陸前高田市に住まいの被災者や復興支援に関わる方々に向け、復興支援の活動を行っていました。私たちの目標は、被災者自身が主体となり、生活の再建、コミュニティの再構築、被災地の経済復興に寄与することです。同時に、後世や未災地の方々にも被災と復興に関する知識を伝え、災害に強い地域づくりに貢献することも大切な使命としていました。

当法人に所属した隊員は、自己の性格や活力を活かし、地域社会を震災後、地道に再建してきました。地域住民からは高い信頼をいただきましたが、震災から 10 年が経ち、新たな節目を迎えることとなり、地域を離れる決断をしました。引き続き、隊員が地域への貢献ができる仕組みを構築できなかった事は、受け入れ側として心残りであり、今後の『復興応援隊』の課題と考えています。

しかし、隊員たちの尽力なしには、当地域の復興は実現しなかったでしょう。改めて、『いわて復興応援隊』の活動に関わる皆様に深い感謝の意を表します。

特定非営利活動法人 陸前たがだ八起プロジェクト
(2020 年6月、ミッション終了のため解散)
元代表理事 蒲生 哲

いわて復興応援隊受入機関の皆様からのメッセージ



2006年、私が東京から岩手県田野畑村に移住した時、とても珍しい事をしているような地域の方々の反応だった。多くの人に「なんでこんな所に東京から？」と言われた。

移住から4年少々で東日本大震災が起こり、多くのボランティアの方々と交流が生まれ、その中から移住したいという声も聞かれるようになり、「いわて復興応援隊」がその大きな受け皿になったと思う。今まで1ターンとは縁遠かった沿岸部の町村に都会から応援隊員が赴任し、役場や観光振興を通じて地域の人々に受け入れられていく姿を見てきて、移住者の先輩としてとてもうれしい気持ちだった。

あれから10年以上が経ち、任期終了後も岩手に残り続ける応援隊員もいれば、地元に戻った人もいるが、それぞれの活動した地域との繋がりが消えるものではなく、人生においても大きなウェイトを持つ期間であったことは間違いないと思う。私も岩手に来てもうすぐ丸17年。もうすっかり岩手県民です。

特定非営利活動法人 体験村・たのはたネットワーク
理事長 楠田 拓郎



東日本大震災津波により壊滅的な被害を受けた大槌町は、新しいまちづくりを推進するため、町や金融機関等が出資する第三セクター「復興まちづくり大槌株式会社」を平成25年に設立しました。この第三セクター立ち上げの際に、新たに導入されたばかりの制度「いわて復興応援隊」の一員として応募してくれたのが、東京の大学の卒業を間近に控える神奈川県川崎市出身の松岡雄也さんでした。華々しい社会人としてのスタートの地に「被災地」を選択した都会の若者は、生まれたばかりのベンチャー企業の創設メンバーとして加わることになりました。

宿泊施設の建設から、ふるさと納税の立ち上げ、新商品の開発、イベントの企画運営に加え、総務や経理にも携わり、まさにオールラウンドプレイヤーとしてその若さを存分に発揮し、縦横無尽に被災地を駆け巡りました。勇気をもってこの被災地に飛び込んで仕事を全うした松岡さんは、確かな足跡をこの町に残してくれました。松岡さんにとってこの経験は今後の人生において糧となることでしょう。また、仲間として松岡さんと一緒にこの復興という大きな事業に挑んだ時間は、私にとって誇りでもあります。

元復興まちづくり大槌株式会社 企画部長
石井 満

いわて復興応援隊受入機関の皆様からのメッセージ

三陸ジオパークは、平成 25 年 9 月の日本ジオパーク認定以来、東日本大震災津波からの復興と三陸地域の発展のために、広大な地域が一体となった活動を展開してきました。

この間、三陸ジオパークの推進のために、活動の初期から多くの復興応援隊の皆さんに活躍いただきました。特に隊員が各地域で展開した、地域住民を巻き込んだ多様な活動は、地域づくりプログラムとしてのジオパークの基本である「ボトムアップ活動」の実践であり、本今年認定から 10 年の節目を迎えた三陸ジオパークの礎は、皆さん一人ひとりの活動の積み重ねによって築かれたものといえます。

現在、当協議会では推進体制を強化するため、隊員経験を生かした職員を採用し、また、多くの隊員 OB は現在も三陸ジオパークや三陸地域に思いを寄せながら各地で活躍されています。こうした人材や人的ネットワークは、応援隊のレガシーであり、これからの三陸ジオパークの展開にとって、ますます重要な存在となります。

三陸ジオパーク推進協議会
事務局長 土澤 智



いわて復興応援隊が果たした役割は、岩手県三陸の観光地域づくりを担う三陸 DMO センターと共に三陸広域の観光振興を促進するため、三陸観光プランナー養成塾を通じて三陸観光プランナーとしての役割も担いながら、様々な場面で活動していただきました。

三陸ならではの体験プログラムを支援や企画する際には地域の方々と連携調整を行い、課題やニーズを把握し、それに合わせたプランの立案や地域の振興に向けた具体的な取り組みをサポートするなど、いわて復興応援隊はその一翼を担う大切な存在

でした。その結果、地域の魅力を再発見し、観光資源を活用する方法を提案し、三陸観光プランナーを数多く輩出できたと思っております。

いわて復興応援隊の活動に対する感謝の気持ちは計り知れません。彼らの協力と献身的な取り組みによって、岩手県三陸地域は復興への一歩を踏み出し、新たな希望が芽生えましたと言っても過言ではありません。また時には夜遅くまで三陸の未来について語り合い、地域の絆を深め三陸の魅力を多くの方に伝えることが出来たと思っております。

岩手県三陸地域は一步一步前進し、復興の道を歩んでいます。この活動に関わったすべてのいわて復興応援隊の方々に、心からの感謝の意を表します。

公益財団法人 さんりき基金 三陸 DMO センター
観光プロデューサー 北田 耕嗣

メッセージ

元いわて復興応援隊

いわて復興応援隊メッセージ

私がいわて復興応援隊に着任した 2012 年 10 月から早いもので 10 年以上の月日が経ちました。着任するまでは神奈川県内の企業に勤務していました。学生時代を岩手で過ごした縁があり、震災後は岩手県沿岸部や神奈川県内で被災地関連のボランティア活動を行うなど、少しでも被災された地域のためになればと思っていました。

応援隊に採用されてからは勤務していた企業での経験も活かし、陸前高田市内の一般社団法人 SAVE TAKATA(現:一般社団法人トナリノ)で ICT 分野を中心に活動してきました。就労支援のパソコン教室、気仙地区の高校での Web 制作キャリア教育などの事業を担当していました。

応援隊として活動した 4 年間、大船渡市で生活し、活動先があった陸前高田も含め、住民の皆さんと関わったり、美しい風景が身近なところにありました。現在は岩手を離れ、地元の群馬県で生活していますが、今でも帰りたくなるような場所です。

齊藤健祐(群馬県在住)

活動期間:2012 年 10 月 1 日~2016 年 9 月 30 日

配置先:一般社団法人 SAVE TAKATA

私がいわて復興応援隊に募集した理由は 2 つ。畑でつなぎ姿の青年 2 人が鍬を高く掲げた「いわて復興応援隊」のフライヤーが衝撃的だったから。地域の方々が生活再建から経済活動に移行できるまでの間に自分に出来る事があればと思ったから。そして陸前高田市を選んだ理由は拠点としていた気仙沼から一番近かったから。

「復興の為」というよりは、地域の方々が自分たちで地域を動かせるまでの「つなぎ役」というのが正直な所です。

活動を通して私の財産の 1 つとなったのが年齢も経歴も出身地もバラバラな応援隊との出会いです。私たち初期メンバーが採用されたのが発災からまだ 1 年 7 か月しか経っておらず、いざ採用されると「こんなじゃなかった」という事が勃発しても簡単に怯む事なく鼓舞奮闘している姿が刺激・励みとなり、また年に数回の研修では別のメンバーの困り事に耳を傾け夜遅くまで語り合うなど「応援隊」という括りだけで集まったとは思えない結束を感じました。そこには「各地の復興の為に」という共通の想いがあったように思います。



高い志を持っていた訳でもなく、通勤距離優先で始まった私の活動は今では陸前高田市の特産の 1 つである「米崎りんご」農家へと変わりました。そしてそこには応援隊の同期も手伝いに来てくれます。東日本大震災が繋いだ縁が今の私を築いてくれています。

菅原 久美子(宮城県在住)

活動期間:2012 年 10 月 1 日~2017 年 9 月 30 日

配置先:一般社団法人 SAVE TAKATA

いわて復興応援隊メッセージ

東日本大震災を東京で経験した私は、故郷岩手のために何かしたいと考えるようになり、いわて復興応援隊に応募し、2012年10月から野田村に移住して活動しました。主な役割は交流事業の促進でした。同部署の仲間と共に村内を回って、村の人たちとの関係構築に努めながら、地域の魅力の掘り起こしや体験の素材などを探し、民泊ツアーの受け入れやイベントの実施等を行いました。

一番印象的だったのは、私たちが関わるようになった村の人達が、とても楽しそうにしてくださることでした。漁業でも農業でも、自分の仕事を知らせてもらえる体験受け入れはやりがいであり、活力だったようです。イキイキと仕事のことを教えてくださる村の人たちから、私のほうが活力を得られるほどでした。

諸事情から2014年3月までのわずか約1年半の活動期間でしたが、信頼して気にかけてくださった村の方々には本当に感謝しています。ありがとうございました。また、会いに行きます。

山下 美陽(盛岡市在住)

活動期間:2012年10月1日~2014年3月31日

配置先:野田村



私は2013年1月から2017年12月までの5年間、復興応援隊として岩手県宮古市に本社を持つ三陸鉄道に赴任し活動しました。

2013年当時はまだ震災被害により一部分しか運行できていませんでしたが、その中でも人気の「こたつ列車」や「震災学習列車」など企画列車を運行し乗車促進を図っていました。またTV番組の爆発的なヒットにより東北地域のみならず首都圏からも沢山の方が三陸鉄道を訪れ交流人口が増加しました。しかし震災以降、地域人口の減少により地元の利用が伸びず、また2021年に三陸沿岸道路が全面開通し車社会に拍車がかかるなど鉄道事業者としての課題が山積しています。

応援隊任期終了後も宮古市に住んだ者として沿岸地域を考えると、観光に対するポテンシャルが高い沿岸地域ですが、残念ながら核となる観光ポイントが離れすぎているため鉄道利用に繋がりません。交通インフラを有効利用するためにもバス会社等他のインフラと一体となって有機的に繋がるような仕組みが必要なのではと思います。また三陸鉄道の利用促進策として、軽貨物の輸送なども考えられるのではと考えています。

小石川 茂(神奈川県在住)

活動期間:2013年1月1日~2017年12月31日

配置先:三陸鉄道株式会社

いわて復興応援隊メッセージ

震災当時、地元愛媛の銀行に勤務していました。その時は、行動を起こすこともできず想いを寄せることしかできませんでした。震災から1年が経った頃、自分の将来について深く考えるようになり、幼い頃からの夢である「教員」を目指そうと決めました。しかし、教員になる前にやり残したことはないかと考えた時に浮かんだのが「東北」のことでした。震災当時何もできなかったことへの後悔からボランティア活動に参加しているときに応援隊の募集を知り応募することにしました。

配属された先は、山田町の社会福祉協議会にあるボランティアセンターでした。活動の内容は主にボランティア活動のマッチング業務でした。震災から2年が経過し、ボランティア活動はハード面よりもソフト面での活動が多く、またその重要性を強く感じました。活動中に思い出に残っていることは、多くの方との出会いです。ボランティア活動する人、住民の方、それぞれの想いにたくさん触れさせていただき、温かい気持ちになるとともに、私にとっての山田町が「被災地」ではなく、「もう一つの故郷」に変わりました。

応援隊としての活動は1年という短い期間でしたが、私にとってはかけがえのない時間でした。応援隊という名ばかりで、何もできなかったと悔いが残ることの方が多いですが、いまま「岩手」という県名を見聞きすると嬉しくなり、立ち止まったり、手に取ったり、想いを馳せています。

応援隊を卒業後は、地元愛媛で高校の教員をしています。岩手を離れたあとすぐに、地元の小中高生と東北沿岸へ訪れる機会をいただきました。これからも震災を風化させないことはもちろんですが、この記憶を若い世代へ伝えること、今後訪れるであろう災害に備えた防災学習に少しでも携わることで、応援隊での経験を生かしていきたいと思っています。未熟な私を応援隊として迎え入れてくれた山田町社協の皆様を始め、山田町の方々、そして応援隊に関わってくださった多くの方々へ感謝するとともに、これからも岩手県の発展を心から願っています。ありがとうございました。



有元 慶子(愛媛県在住※旧姓山下)

活動期間:2013年4月15日~2014年4月14日

配置先:山田町社会福祉協議会

いわて復興応援隊メッセージ

私がいわて復興応援隊を志望した動機は、山田町の人たちです。当時テレビに映る東北の映像は、同じ日本とは思えず、現実に行き詰っていることとも考えられぬ物ばかりでした。

東北の地で私にできることはないかと思うことが増え、ボランティアに参加し、山田町のまちや人たちに惹かれ、「ここに住みたい」と思うようになりました。そんな時にいわて復興応援隊の存在を知り、応募しました。



応援隊での活動の思い出は、岩手で過ごした日々のすべてです。共に仕事をした山田町社会福祉協議会の皆さま、遊んだ子どもたちみんな、山田のじいじ、ばあば、兄さん、姉さん。会えば体調を気にしてご飯をくださった人たち、バスケットを一緒にした人たち、家族のような保護者、いつもお弁当を買いに行ったあのお店のお母さん、髪を切ってくれる美容師さん、パン屋を構えた同級生、行きつけの居酒屋、ボランティアに来てくれたたくさんの人。美しい景色。美味しい味。全てがいつでも思い出せるくらい、鮮明で美しい大切な思い出です。

大学を卒業したばかりで世間知らずの若造を、ここまで育てていただいた山田町は、私のふるさとです。

近いうちに家族3人で私の大切な人たちに会いに、ふるさとへ行きたいと思います。

木村 公介(東京都在住)

活動期間:2013年4月15日～2016年4月14日

配置先:山田町社会福祉協議会

私は2013年4月から2016年9月までの約3年半、岩手県大船渡市にあるNPO法人夢ネット大船渡に所属し、仮設住宅に配布する復興情報誌の作成などを通して、復興支援活動に携わりました。応援隊となったきっかけは、前職が地方紙の新聞記者だったので、その時の経験を活かして復興支援に関わりたかったのと、少し被災地域に腰を据えて長期的に活動に携わりたかったからです。活動中は、取材やイベント開催、仮設住宅での英語教室運営など、様々な形で地域の皆さんと交流しました。地元の方々から岩手の方言を学び、心温まるひとときを過ごした事が忘れられない思い出となっています。

岩手県を離れてずいぶん時間が経ちましたが、岩手県が好きな気持ちはこれからも変わりません。復興関係のニュースを見るたびに被災地域へ思いを馳せながら、いつかまた必ず岩手へ行くという想いを胸に、私も頑張って日々の仕事や家事育児に邁進している所です。改めまして当時お世話になりました県の担当者、温かく受け入れて下さったNPO法人関係者、地元の皆様に心より感謝申し上げます。

河野 由佳(静岡県在住)

活動期間:2013年4月15日～2016年8月31日

配置先:NPO法人夢ネット大船渡

いわて復興応援隊メッセージ



私がいわて復興応援隊になったきっかけは、東日本大震災でした。テレビから流れる現実とは思えない光景に、居ても立っても居られない気持ちになり、その年の6月にボランティアとして岩手県を訪れました。その後、毎月ボランティア活動に参加していましたが、もっと腰を据えて活動をしたいと思い、いわて復興応援隊に応募しました。

下閉伊郡田野畑村で、震災の語り部やサッパ船アドベンチャーズなど体験型観光を行っているNPO法人体験村・たのはたネットワークで、各種プログラムの観光客へのアテンド業務を行いました。大手旅行会社のツアーや連続テレビ小説あまちゃんの影響もあり、連日多くの観光客の方に訪れていただきました。津波の語り部の方は、震災から10年以上経った今でも、震災や津波でこれ以上犠牲者が出来て欲しくないという思いで辛い体験を語ってくれていることと思います。復興応援隊引退後は岩手を離れていますが、この願いは大切に受け継いでいきたいと思っています。

渡邊 悦子(千葉県在住)

活動期間:2013年4月15日~2018年4月14日

配置先:NPO法人体験村・たのはたネットワーク



応援隊となった動機は、東日本大震災が起こり、メーカーの営業職として、震災による工場不稼働の納期遅れの対応に追われ、いずれ落ち着き月日が経ち、いまだ震災で苦しんでいる方々が多い状況の中、いわて復興応援隊の取り組みを知った事を契機に、自分でも力になれる事があるのではと思い、応募しました。

活動の思い出はたくさんありますが、現在の添乗員の仕事に関わる契機となった地域住民の方々との日帰りバス旅行も一つの思い出です。新しい施設が出来ていく一方、活動の中で、住民さんの心の中に、仮設住宅にお住まいの方、家は残ったが支援が行き届かなかった方など、様々な震災による境遇のもと、心の壁があるのを感じました。そこで、分け隔てなく集える機会を作り、思い出を共有・積み重ねていく事で、未来志向の心持ちで、少しずつ壁を取り除ければと日帰りバス旅行を定期的に行い、久しぶりの再会や交流を深めている様子を見て少しは心の復興のお手伝いが出来たかなと感じました。

岩手もまだまだ復興途上かと思いますが、工作上、東北・岩手にお伺いする機会もあり、個人的にも伺いたいのので、復興に向けひたむきに生活、活動されている現状を自分なりに伝えていき、微力ながら応援し続けていけたらと思っています。

池田 陽一(鹿児島県在住)

活動期間:2013年4月15日~2018年4月14日

配置先:NPO法人陸前たがだ八起プロジェクト

いわて復興応援隊メッセージ

震災発生当時、私は大学生でした。ボランティア団体に所属し何度も災害救援活動を行うなかで、継続的に携わり復興の一助になりたいと思うようになり、運よく応援隊でご縁を頂きました。最初に配属された、大槌町で設立したばかりの第3セクター、復興まちづくり大槌株式会社ではプレハブ製の宿泊施設事業やふるさと納税の商品企画や管理運営などに4年間。その後5年目は大槌町役場商工観光課にて観光事業に携わらせていただきました。

今振り返ると、もっと上手くやれたな、成果を上げられたなという場面がいくつも思い浮かびます。一助になれたかは分かりませんが、得難い経験を積ませていただいた5年間でした。また、神奈川から来た社会人経験の無い私に良くてくださった配属先、関係各所の皆さんへは感謝しかありません。

応援隊の活動通じて、大槌町は私にとって大切な繋がりのある第2の故郷になりました。これからも度々訪れたいと思います。

松岡雄也(神奈川県在住)

活動期間:2013年4月15日~2018年4月14日

配置先:復興まちづくり大槌株式会社、大槌町商工観光課



応援隊となった動機は、三陸ジオパークから日本ジオパークへの人的支援の要請です。そして私が岩手に向かったきっかけは、三陸ジオパーク会長宮古市長の「今回の災害がなくても、津波を伝えるのは、三陸の役目だ」との言葉に感動したからです。

知らない土地に行くことは、決して簡単なことではありません。復興支援のためには、まずは「とびこむ」ことが必要です。文化の垣根を超え、異文化の世界に「飛び込む」わけです。歓迎されるか、冷たく無視されるか、拒否されるかわかりません。

次に「近づく」です。その地域の人々の生活や文化を理解することが必要です。なるべく年中行事などに参加し、地域のリズムを体感するよう心がけました。三陸沿岸の地質地形や気候は多様です。また、三陸の大地や海がもたらす自然景観、風土、人々が育んできた歴史や文化などもまた多様でした。

さらに「相手の立場にたつ」ことが必要です。背景のない絵はなく、地によって裏打ちされない柄はないわけです。だから表面的な絵柄だけを見るのではなく、その根底にあるものも見る必要がありました。三陸地方は、津波のよる度重なる災害にもかかわらず人々の営みが続いています。この地では、大地と海と共にある「三陸の人々の生きざま」を強く感じる事ができたのです。そして、お互いを理解し認め合うことにより、同じ地平に立って、新たな価値の創造に努力することができました。

島原半島と三陸は、火山と地震津波という災害の種類は違います。しかし、どちらも地球の営みによる恵みと災いがあり、度重なる災害にもかかわらず、人々の生活が営まれてきました。

三陸は本当に素晴らしいところです。私にとって第2の故郷になりました。ありがとうございました。

杉本 伸一(長崎県在住)

活動期間:2014年5月1日~2020年4月30日

配置先:三陸ジオパーク推進協議会事務局

いわて復興応援隊メッセージ

応援隊となったきっかけは、純粹に、自身の声を遣い少しでも被災地の方々、又災害ラジオ局の方の力に少しでもなれることが出来たらとの思いでした。

私の仕事は、岩手県陸前高田市の兄弟都市の愛知県名古屋市にあるFM ラジオ局のラジオパーソナリティでした。震災後は、居てもたってもいられず、ボランティアで 30 分間のラジオ番組を制作し、陸前高田災害エフエムにデータを送って、放送をして頂いていました。数ある災害エフエム局の中でも、何故陸前高田災害エフエムだったかというと、地震や津波で眠れない方の為に 24 時間、声や音楽を発信しているところに感銘を受けたからです。それからボランティアではなく、移住をして実際の現場で活動したい思いが強くなりました。現地では、被災して店を失ってしまい、再起しておられる方へのインタビューや地元の方の協力で地元の言葉を残すべく、方言で読む昔話を、仮設住宅で収録もさせて頂きました。

名古屋や大阪からもアプリで聴いているとのメッセージも届きました。忘れてほしくない思いがあったのでメッセージが他県から届くことは嬉しかったです。

10 年経った今では、自身の活動は、地元の方に何のお役にも立てず申し訳なく思っています。ただ、応援隊としての活動のおかげで、現在暮らしている場所で陸前高田の方を繋いで、震災への備えをラジオを通し発信してもらう機会もありました。出会った方々や陸前高田のことはこれかも忘れることはないと思います。

柿元 恵美(東京都在住)

活動期間:2014 年 5 月 1 日~2015 年 4 月 30 日

配置先:NPO 法人陸前高田市支援連絡協議会 Aid TAKATA



わたしの応援隊=三陸ジオパークでの活動は、2015 年からの約 2 年半あまりの期間でしたが、それまでの経歴を生かして、様々なことに取り組みせてもらいました。特に、三陸地域の津波防災や復興について研究していた経験をもとにしながら、当時の復興状況の他地域への発信、同じく災害で被災した地域からの視察受け入れ、そして子供たちへの継承のための復興・防災学習の企画に携われたことは、自分のなかでも印象深く残っています。

また、ジオパーク活動の目玉である地質や地域資源の活用と観光振興のコラボレーションについては駅を起点に徒歩でジオサイトや観光スポットを巡る周遊ルートの造成にも取り組みました。このノウハウを学校遠足の企画に生かす機会にも恵まれ、学校関係者、地域の協力者と協働しながら、生徒たちが地域の“見どころ”や“史跡”を訪ねながら“ジオパーク”や“震災”の要素に触れられるルートを提供することもできました。このような取り組みに携わることができ、三陸の地で復興のお手伝いできたことは自分にとって貴重な経験だったと感じています。

熊谷 誠(山形市在住)

活動期間:2015 年 4 月 1 日~2017 年 10 月 31 日

配置先:三陸ジオパーク推進協議会事務局

いわて復興応援隊メッセージ



長崎県の島原半島世界ジオパークでガイドをしていた私がこの応援隊となったきっかけは、ジオパーク活動に興味を持ち、自らの経験と知識で何かのお役に立ちたいという思いからでした。

三陸ジオパークの推進活動を通して5年間ほど宮古市内にある推進協議会事務局を中心に取り組ませていただきました。思い出として景色の美しさや食べ物のおいしさがあげられます。なぜこんなに景色が美しく食べ物が美味しいのだろう？という疑問は、地質的な遺産を活用するジオパークを通して学ぶ中で知ることが出来ました。

豊かな海と大地の恵は、遡ること5億年ほど昔の地球の営みで生まれた大地が元となっている、という事からなんとなく分かる気がしました。そこに住む人々は、豊かな恵を受けて生活しているということを発見することができ、その地域に住みながら応援隊として活動できましたことを、本当に感謝しています。時には、自然現象による災害による悲しい出来事もございますが、豊かな海と大地の恵を持つ三陸沿岸の地域は、本当に素晴らしい場所であると思います。皆さま方が幸せで過ごされる事を祈っております。

林 ちはる(宮古市在住)

活動期間:2016年2月1日～2021年3月31日

配置先:三陸ジオパーク推進協議会事務局



大学時代に地球科学科に所属し、活断層周辺域の活動について学んでいた私でも、未曾有の大震災と大津波は想像することも出来ず、まだ余震の続く中、ネット配信される映像ニュースを自宅で見いていたことを思い出す。

2011年8月に休暇を取って、思い入れの強い三陸鉄道の現状を見に行った。衝撃を受けた。それから年に何度も三陸に足を運んだ。直接肌で感じることの大切さが、応援隊に応募する原点となっている。

2017年、応援隊の業務は『三陸復興博(仮)』開催のための調査。ハード面の復興作業が進む中で、現地に住む人たちの心の復興を支える活動だった。先輩応援隊員をはじめ、多くの人々の話を伺いながら作業に邁進した。2018年に入ってから宮古の三陸ジオパーク推進協議会に異動し、ジオパークを通

じた情報発信とプロジェクト実施のサポートを行った。

活動期間は短期間だったが、沿岸をくまなく移動し、それぞれの課題・解決法があることを知った。もちろん復興はまだ終わらない。活動を終えても私なりに沿岸に出向き、課題解決のための一助となれたらと思う。

阿久津 貴之(福岡県在住)

活動期間:2017年5月15日～2018年12月31日

配置先:三陸総合復興準備室

三陸防災復興プロジェクト2019推進室

三陸ジオパーク推進協議会事務局

いわて復興応援隊メッセージ

定住・交流推進員として5年間活動しました。

学生時代に、過疎地の農地活用を目的とした短期滞在型二拠点居住について学びました。当初のターゲット「リタイヤ層」から「若年層」へ移行し、「ふるさと回帰」の新しいステージに関わることができると思ったことが動機です。活動は主に、移住支援に関する情報を、SNSを活用して広報することでした。単独で事業を企画して行動することはできませんでしたが、県職員や協議会職員と一緒に沿岸地域や県内各地へ取材や企業訪問、首都圏でのセミナーの開催、イベントでのブース対応など初めてのことばかりでしたが、充実していました。初めてのイベント対応で司会進行を仰せつかったときはさすがに参りました。

県外からの移住者でもある「地域おこし協力隊」の支援団体の発足が、一番嬉しい出来事でした。最後に、震災でふるさとから離れなければならなかった方々が、「ふるさと回帰」できるよう、これからもご尽力いただきたいと思います。

高橋 美紀(盛岡市在住)

活動期間:2018年10月1日~2023年3月31日

配置先:いわて定住・交流促進連絡協議会

定住・交流推進部



あとかき

あしがき（専門支援員）



2013年春、いわて復興応援隊の専門支援員として、いわて定住・交流促進連絡協議会の事務局に席をいただいてから11年。その前年の夏前から募集業務等に携わっていたこともあり、今では、いわて復興応援隊の創設準備以来の歴史を知る、数少ない生き証人となっています。

隊員57人それぞれの写真、やりとりした記録から当時を振り返ると、57のドラマがあったことを思い出されます。いわて復興応援隊のサポートという形で、三陸の復興に僅かながら関われたことを誇りに思います。

報告書作成にあたり、いわて復興応援隊元隊員の皆さん、応援隊受入機関ご担当者を始めとするご関係者の皆さんにご協力をいただき、あらためて感謝申し上げます。

専門支援員 及川 玲

平成 24 年 10 月に「いわて復興応援隊」が発足し 11 年が経ちました。このいわて復興応援隊には、震災後、全国各地から現地の人に「何かしたい、役に立ちたい」という思いの人達が集まり、様々な分野で長きに渡り活動して頂きました。各地で活動する応援隊の方々が、地域の人達に親身に寄り添い活動している姿に、「こんな人達がいるんだ」と、感銘を受け、これまでの自分の考え方を改めて考えさせられました。震災は、あってはならないものではありましたが、この震災が縁で場所も年齢も違う人達が出会う場となり、応援隊の活動は、地域の復興だけではなく地域の人達の心の支えになったと思います。

思い返せば色々な事がありました。この 11 年間で、被災地の現状を応援隊の活動を通して知り、いわて復興応援隊や他県と情報を共有しながら多くの人と出会った事で、各地の復興の活動や人との繋がり、思いやりの心、自分の知らなかった知識や考えなど数多くのことを学びました。「いわて復興応援隊」に関わった時間は、私にとって日々学びの時間となり貴重な財産になりました。

いわて復興応援隊の活動は終了しますが、これからも皆様のご活躍を心からお祈りしております。



専門支援員 斉藤 まゆみ

あとがき（専門支援員）

2012年10月に応援隊1期生が活動を開始して間もなく、沿岸南部で受入体制の不備と活動のミスマッチによる問題が発生し、その後も次々に課題が浮き彫りになりました。

当時、私は、県の三陸交流事業の受託団体として外から応援隊公募作業をサポートする立場でしたが、応援隊受入問題と応援隊の活動支援のために2013年4月から応援隊全般をマネジメントする専門支援員として当協議会事務局に入りました。

岩手県三陸沿岸に県内外から集まった応援隊は、被災地へ寄せる思いを物凄いパワーで支援活動につき込む隊員も多く、受入先や県・事務局とぶつかることも度々あり、お互いに悩みながら成長してきた10年半だったと思います。

任期を終えた後、そのまま地域に残り活動継続する隊員や家族をつくり定住する隊員、新しい道に躍進する隊員も多くその活躍は、今も岩手の復興を押し上げてくれています。

一方、様々な事情により思い半ばで岩手を去っていった隊員も少なくなく、本報告書には、応援隊57名すべての活動を記録できたわけではありません。過去を振り返り、隊員一人一人のこと、その時の出来事の記憶を辿りながらも、この長い年月をざっくりとしか綴れなかったことは申し訳なく思います。

本報告書には無い、数多くの応援隊の足跡は、地域に根を張り、未来の岩手につながるものと信じています。

最後に、2020年7月21日にいわて復興応援隊1期生の岡本花織さんが他界されて今夏で4年となります。本来であれば、仲間と一緒にインタビューで「いわてさんりく恋列車」運営のエピソードを語る笑顔の花織さんを掲載するはずでした。改めてご冥福をお祈りいたします。

花織さん、三陸の空から、ふるさと岩手を見守っててくださいね。



専門支援員 西館 孝子

